岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡・白山社及び駒形根神社

令和５年３月

一関市教育委員会

序

一関市厳美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、平成17年には国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定、平成18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年６月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、平成24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、一関市教育委員会では継続して調査研究を行っています。

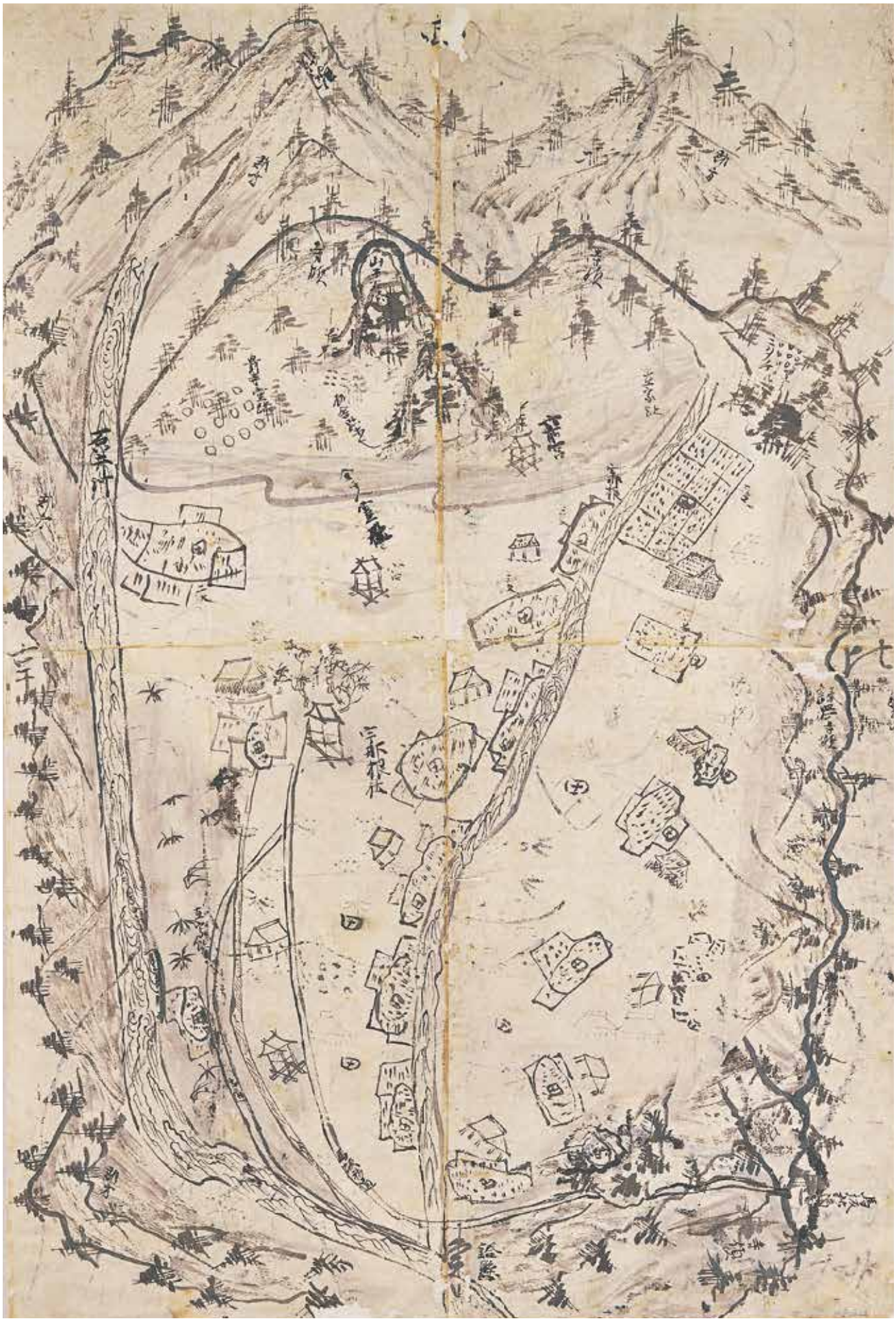
本年度は、国指定史跡骨寺村荘園遺跡のうち、白山社及び駒形根神社の２地点で確認調査を実施し、その成果を本報告書にまとめました。本報告書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々に衷心より感謝を申し上げ、本報告書発行のあいさつといたします。

令和５年３月

一関市教育委員会

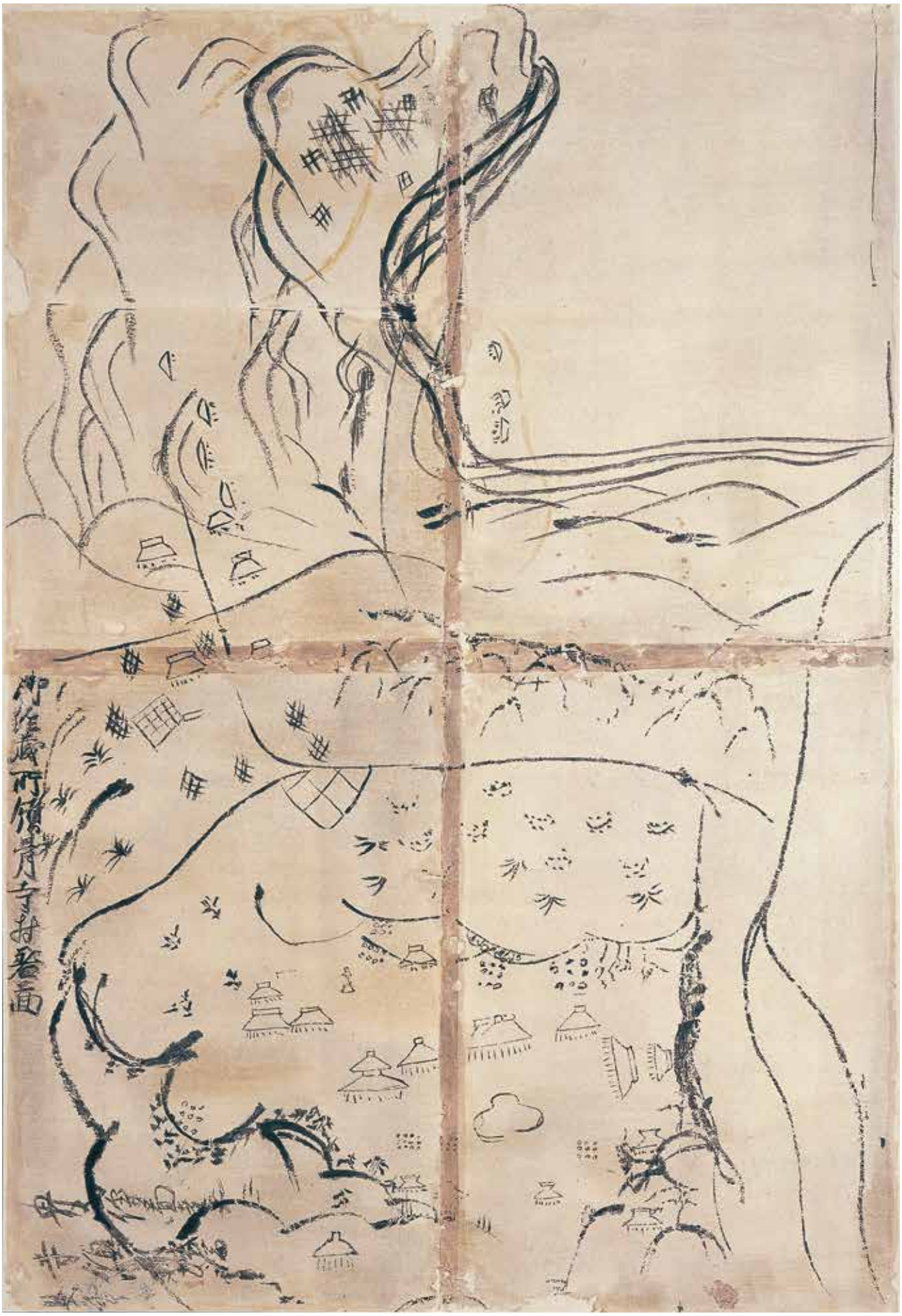
教育長　**小　菅　正　晴**



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製）　原典は中尊寺蔵

カラー図版２

国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製）　原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製）　原典は中尊寺蔵

若井原194-1地点遠景（矢印直下が調査区、南西から、無人航空機による空中撮影）

若井原194-1地点調査区全景（直上から、画面上が南東、無人航空機による空中撮影）

例　　言

1．本書は、岩手県一関市教育委員会が令和４年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。

2．調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。

3．調査は、平成７年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市厳美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。

4．令和４年度の調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」の範囲内の若井原194－1（平泉野遺跡）、駒形８－１地点である。

5．調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。

6．調査体制は以下のとおり。

教育委員会　文化財課	課長	氏　家　克　典
	文化財係長	金　野　　修
	主任学芸員	菅　原　孝　明
	文化財調査研究員	光　井　文　行
		阿　部　　充
	会計年度任用職員	小　岩　誠　也
		菅　原　友　明

7．本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。

8．本書図３に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。
（許可番号　令和５年２月17日総第11015号）

9．土層断面図の土色表示は新版標準土色帳2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。

10. 調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は川嶋印刷株式会社に、調査補助及び調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、それぞれ委託した。

11. 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土した石製品の石材鑑定、黒曜石鑑定については、佐々木繁喜氏（一関市文化財調査委員）の指導を頂いた。

12. 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
伊藤桂子、井上雅孝、及川幸子、小形栄一、小岩寿男、小巌芳夫、佐々木源輔、佐々木登志也、佐藤勲、佐藤金朗、佐藤健爾、佐藤弘征、佐藤光雄、須原拓、二階堂孝子、平山勇、茂庭文朝、山川純一
岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、文化庁、骨寺村ガイダンス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会

目　　次

序…… 1

カラー図版…… 3

例言…… 7

目次…… 8

１　位置と環境…… 9

２　調査に至る経緯…… 14

３　若井原194－１地点（平泉野遺跡）の調査 …… 21

４　駒形８－１地点（駒形根神社境内）の調査…… 45

５　骨寺村荘園遺跡から出土した黒曜石の原産地推定…… 49

６　総括…… 56

遺物観察表…… 58

写真図版…… 67

1　位置と環境

（1）一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の７市町村が合併、さらに23年（2011）9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42㎢である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」（昭和43年《1968》）や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年）および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年《2006》）、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ渓谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「厳美渓」（昭和2年《1927》）がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「猊鼻渓」（大正14年《1925》）がある。

（2）骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市厳美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海抜高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海抜230m～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一《岩手大学名誉教授》）による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の厳美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、厳美層が交互に出現する理由は、断層活動により厳美層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田ａ火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサやソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし十和田ａ火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

（３）歴史的環境

中尊寺文書　骨寺村の中尊寺荘園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経を奉行し、８年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保２年《1318》３月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡　文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮は所領の安堵を求めるため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈祷料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鎰懸、西は山王窟、南は磐井川、北は峯山堂（から）馬坂である。

陸奥国骨寺村絵図　中尊寺大長寿院には２枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版１）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版２）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版３）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年《1699》）　磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年《1773》）　平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年《1775》）　仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名　若神子」、「山王社、小名　山王山」、「不動窟、小名　真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

（4）骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。平成21年度調査で逆茂木が残る陥穴を、22・23年度で楕円形の陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の竪穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器埦や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。遠西遺跡からは、12世紀の常滑窯産三筋壷と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定

が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

（一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「１.位置と環境」を引用、加筆）

令和４年度骨寺村荘園遺跡現地説明会（６月18日開催）の様子

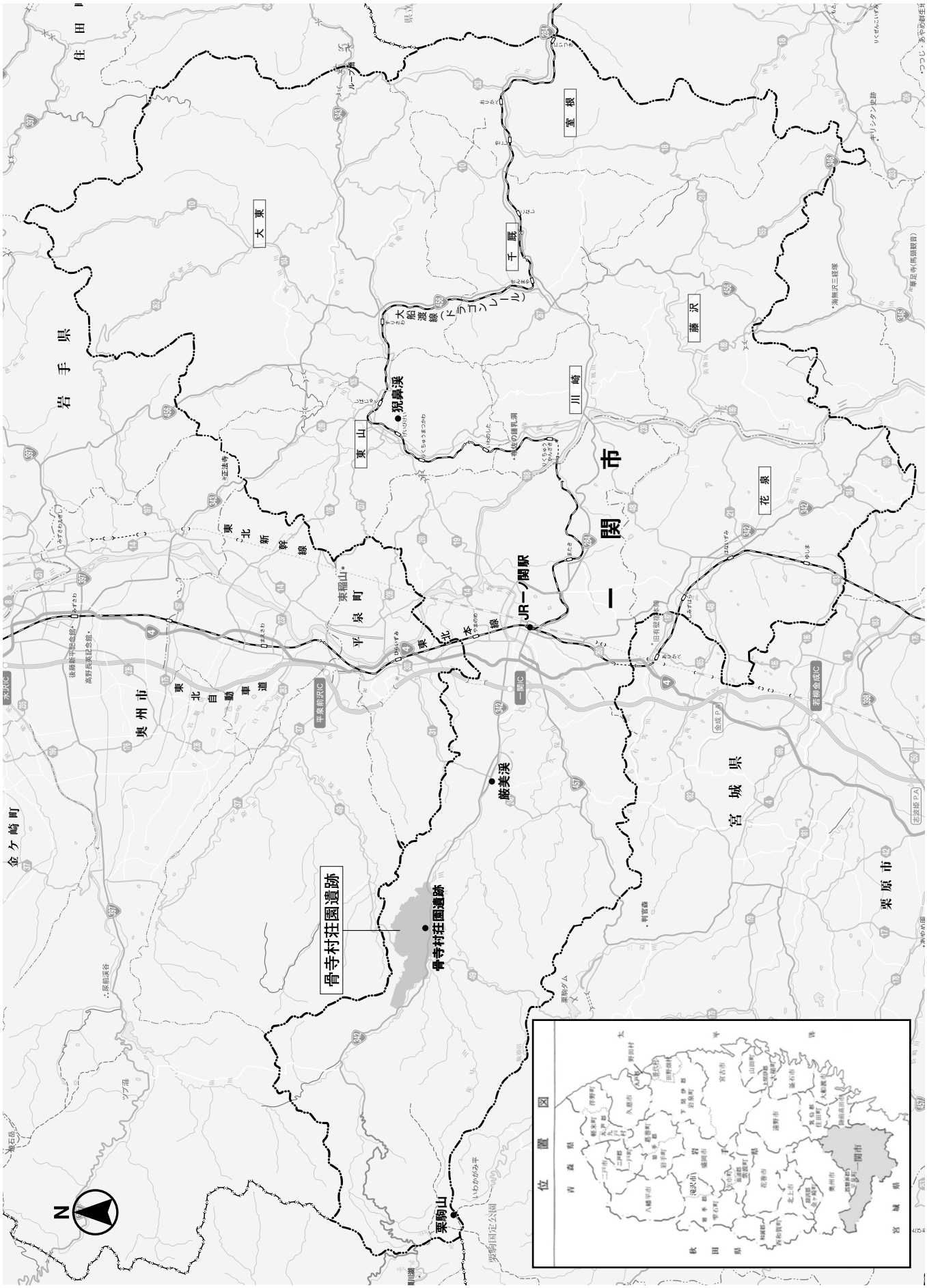


図１　骨寺村荘園遺跡位置図

2　調査に至る経緯

（1）骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成５年２月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成７年４月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成７年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成８～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1／2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年６月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年８月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年３月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全･活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年３月２日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される　文部科学省告示第22号 （山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂（拝殿））
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年７月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内２番目の重要文化的景観に選定　文部科学省告示第121号
平成18年９月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉―浄土世界を基調とする文化的景観」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年８月26～30日	イコモス現地調査
平成20年５月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年６月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方約３km

平成20年７月	世界遺産委員会で「平泉―浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、９世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年４月４日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥舘遺跡、達谷窟の４資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年１月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年９月８・９日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年３月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年５月	イコモス「登録」を勧告
平成23年６月29日	世界遺産委員会で「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定　但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第１回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成24年３月22日	第２回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田ａ火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年５月18日	第３回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成24年９月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議　開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年１月30日	第４回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に３基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川６地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成26年１月７日	第５回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川４、６地点）確認調査、中川４地点の塚の自然

	科学分析を実施、13世紀後半と推定
	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成27年１月６日	第６回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成27年１月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定　文部科学省告示第６号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川６地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け
	梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認
	平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成28年１月５日	第７回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認
	白山社及び駒形根神社（駒形５、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認
	平泉野遺跡（中川９、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け
	山王窟三次元測量
平成28年８月４～６日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会　開催（第８回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月３日	第９回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成28年12月３・４日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成29年１月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川９、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝２条、竪穴状遺構確認
平成29年６月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成29年８月５日	「平泉の文化遺産」国際会議　開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年８月６日	第２回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年９月８日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成30年３月７日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川９、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フラスコ状土坑確認
	駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年３月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査、遺構は発見されず、自然科学分析を実施し縄文時代と推定
令和２年度	駒形4-1地点確認調査　土坑確認
令和３年３月12日	第16回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催

令和３年度	駒形1-1地点確認調査
令和３年９月19日	骨寺村荘園遺跡研究集会　開催
令和４年１月６日	第17回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
令和４年３月18日	第18回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
令和４年度	平泉野遺跡（若井原194-1）確認調査、竪穴住居、竪穴遺構確認
	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、８世紀の土師器確認
令和４年８月18日	第19回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催

（2）令和４年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成８年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことは、遺構の時代も中世まで遡ることを示唆している。一方、宗教施設の調査については、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は７カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡（平泉町）、達谷窟（平泉町）、白鳥舘遺跡（奥州市）、長者ヶ原廃寺跡（奥州市）の５つの拡張予定資産が、世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係県市町間で25～29年度の５カ年で重点調査を実施することを確認した。この重点調査で成果を積み重ねたが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らないとの結論に達し、関係県市町で30年度以降も調査を継続することで合意した。

令和４年度は、平成21年度からの発掘調査計画を改定した第３期計画（令和４～令和８年度）の１年目にあたる。第２期計画から引き続き、平泉野台地の最大の平場（字若井原194-1）を調査すること、また平成18年度に実施した駒形根神社境内の調査に不明瞭な点があることから再調査を実施した。

これまで（平成11～令和４年度）調査した地点を図２-１、図２-２、表１に示した。

（一関市教育委員会2022『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「２　調査に至る経緯」を引用、加筆）

（菅原）

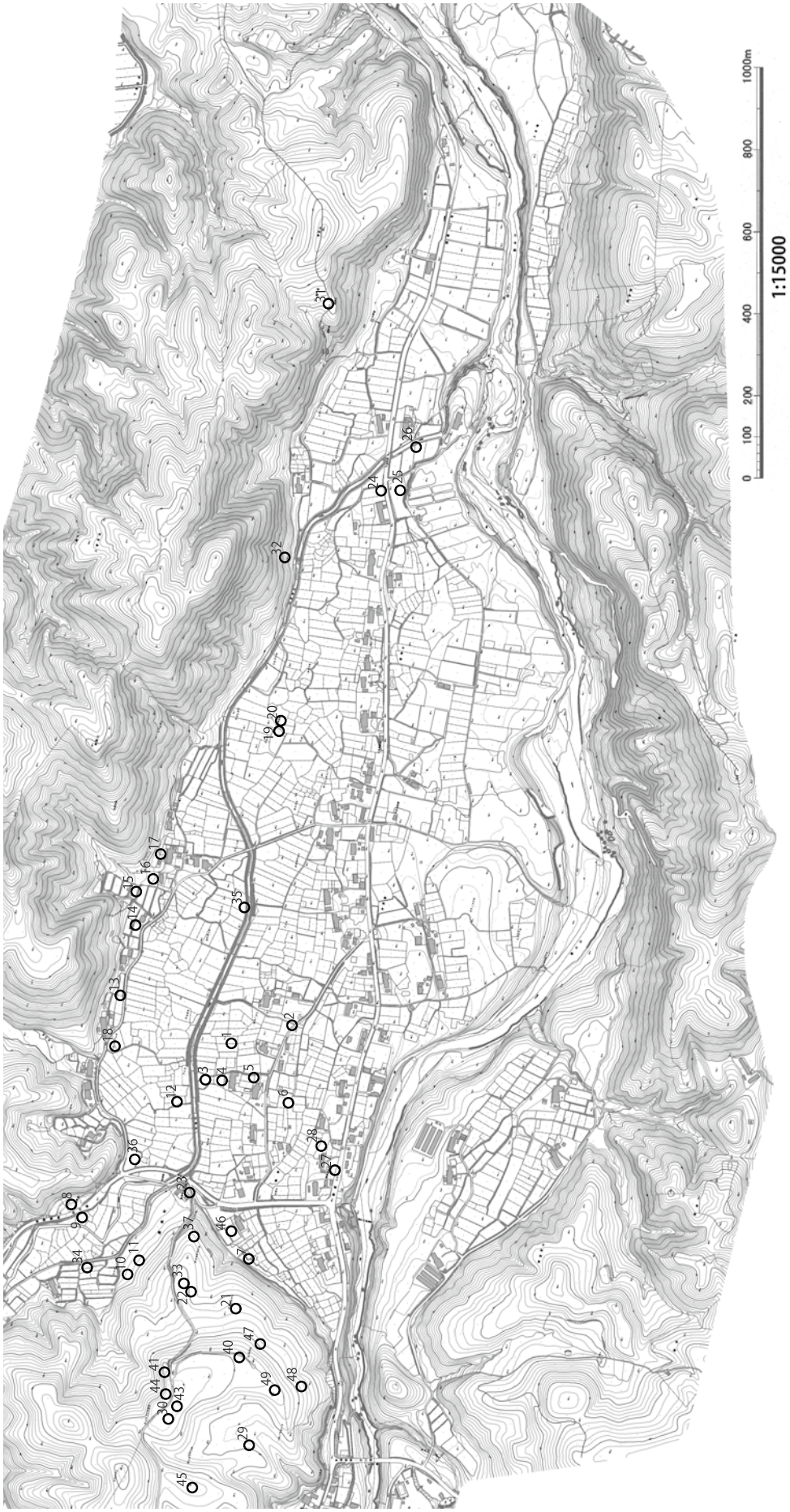


図２-１　骨寺村荘園遺跡における既調査地点（１）

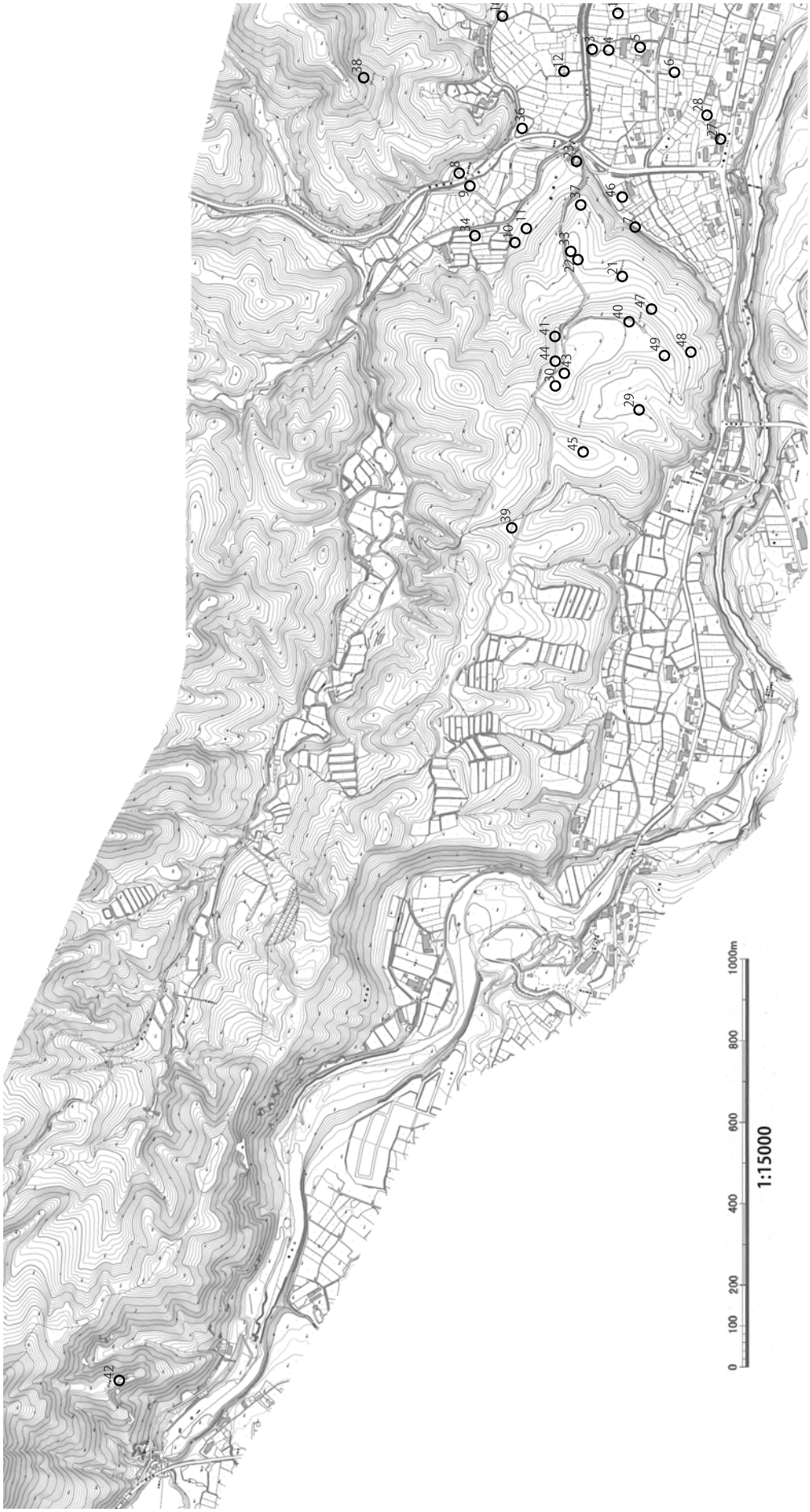


図２-２　骨寺村荘園遺跡における既調査地点（２）

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、土師器片、陶磁器片、鉄釘、近代銭	平成18・令和４年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度
47	駒形4-1	土坑、縄文土器片、礫石器、石製品	令和２年度
48	駒形1-1	炭窯跡、土坑、柱穴状ピット、溝、縄文土器片、石器	令和３年度
49	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴住居、竪穴遺構、土坑、落とし穴、埋設土器、柱穴状ピット、縄文土器片、石匙、削器、箆型石器、磨製石斧、磨石、凹石、台石、剥片、黒曜石	令和４年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表１　骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

3　若井原194－１地点（平泉野遺跡）の調査

調査地点は、駒形根神社の南西約500mにあり、一関市厳美町字若井原194－１に所在する（図３）。本寺地区で平泉野と呼ばれる台地（以下平泉野台地と表記）のうち、高位段丘の南西端に位置し、標高約226～227m、同じ面にのる現白山社の南西約100mにある。現況は雑木林で、埋蔵文化財包蔵地「平泉野遺跡」の一部である。

『陸奥国骨寺村絵図』（簡略絵図）では、平泉野台地と思われる丘陵が南北に３つの山稜線に分けて表現され、南側の稜線内に「骨寺跡」の文字が見え、その稜線の途切れるあたりに「白山」の文字と５つの丸があり、これに接して「寺崎」が描かれている。絵図における画像や文字の向きから見て、骨寺跡は東の里に望むような向きと位置にあったと考えられている。白山社もまた、骨寺の境内鎮守とみなされ、骨寺と関連して勧請されたと推定されている。したがって、骨寺の位置は、白山社や寺崎と近接していたとみなされる。白山社も寺崎（屋敷名）も実在しており、かつての骨寺はこの周辺に実在し、骨寺は平泉野台地南西側にあったと推定されている。

今回の確認調査は上記の推定から、平泉野台地の高位段丘の南西側に再度注目して調査区を選定した。高位段丘における過去の確認調査は、北側から東側にかけて平成６･21･22･28･29年度に５地点（図２－２の20、29、30、39、40）で行われている。確認された遺構は竪穴住居、土坑、落とし穴、道路遺構、遺物は縄文土器、石器、土師器、須恵器、近世陶磁器などであり、「骨寺（堂）跡」に伴う遺構、遺物は確認できていない。今回の調査地点は、今まで調査されていない高位段丘南西部の平坦面であり、須川岳も眺望できる位置でもあるため、遺構の有無、特に「骨寺（堂）跡」の痕跡を確認するために実施した。

調査期間は令和４年４月11日～７月21日、調査面積は約620㎡である。

調査区の広さは、最大東西径39m、最大南北径20mである。調査区に４m四方のグリッドを設定し、東西を西からａ、ｂ、ｃ・・、南北を北から１、２、３・・とし、グリッド１ａ、２ｂとして、グリッドごとに遺物を取り上げ、南側半分が全面、北側半分で4m置きにトレンチを設定して確認調査を行った。

今回は発掘調査前に、礎石などの存在を確認するために、調査区を25cm間隔でボーリングを使用して石の存在を確認した。その結果、石は散在していて、大きさも小さく、数も少なく、まとまった形では検出されなかった。調査は表土（Ⅰ層）を重機により除去した後、Ⅱ層からは手掘りで掘り下げながら遺構検出を行った。最終的には、地山であるⅢ層上面で遺構の有無を確認した。

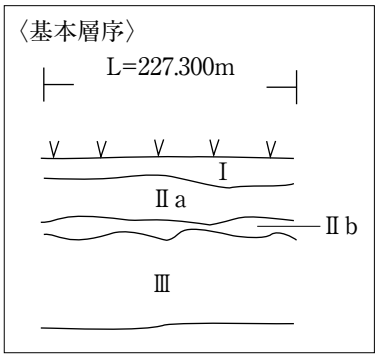
図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基R4-№1　X＝－113748.828、Y＝9554.180、H＝227.085

基R4-№2　X＝－113769.195、Y＝9515.306、H＝226.774

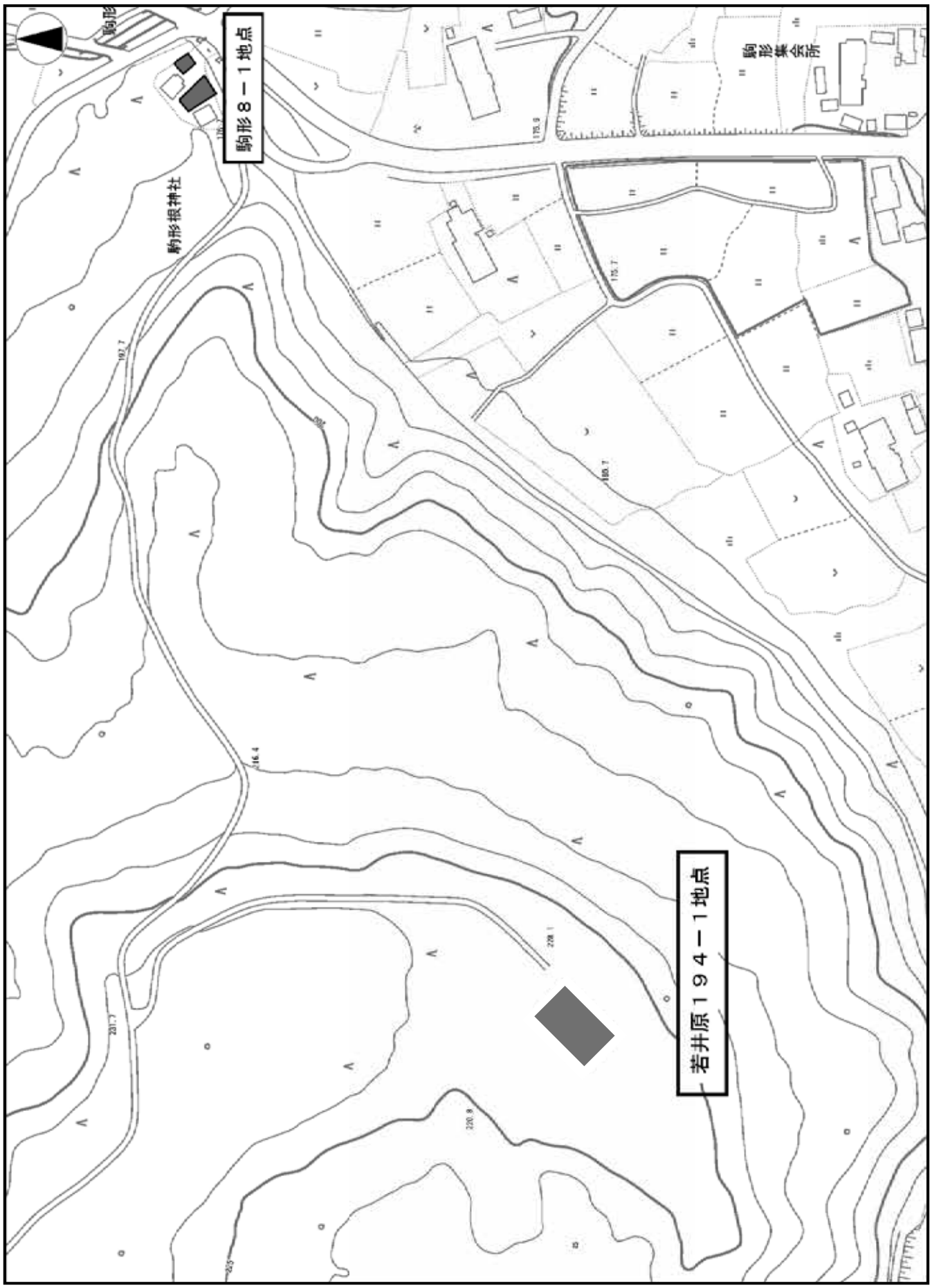
調査終了後、残土を用いて、重機を使用して埋め戻し、現状の回復を行った。



基本土層図

（１）基本土層

Ⅰ層：10YR2/3黒褐色粘土質シルト。やや粘性あり。しまり弱い。



※敷地の境界，その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。　　縮尺 1：2500

図３　調査区位置図

植物根、植物遺体を上位に多く含む。木根による攪乱あり。表土。縄文土器や石器を含む。層厚約10～20cm。

Ⅱａ層：10YR4/4褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。縄文土器や石器を多く含む。層厚10～20cm。

Ⅱｂ層：10YR3/4暗褐色粘土質シルト。やや粘性あり。しまり弱い。縄文土器や石器を多く含む。層厚約10～15cm。

Ⅲ層：10YR5/8黄褐色粘土質シルト。粘性強く。しまり強くあり。地山。層厚30cm以上。

（２）確認した遺構と遺物

確認した遺構は竪穴住居４棟、竪穴遺構４棟、土坑16基、落とし穴６基、柱穴６個である。遺物は縄文土器、石器類である。

１）竪穴住居・竪穴遺構

竪穴住居はＳＩ－１、ＳＩ－２、ＳＩ－６、ＳＩ－７の４棟、竪穴遺構は、ＳＩ－３、ＳＩ－４、ＳＩ－５、ＳＩ－８の４棟である。

ＳＩ－１（図５、写真図版１－１、５－１、表４－１）

調査区南東側にあり、グリッド４ｈ・４ｉ・５ｈ・５ｉに位置する。Ⅲ層上面で土器を多く含む暗褐色土の広がりがみられ、遺構と確認したものである。重複する遺構はない。規模は、長径約3.1m、短径約2.4mで、平面形が南北に長い不整楕円形を呈している。壁高は８～20cmで、東壁側で最大を測る。Ⅲ層を掘り込んでつくられている。

埋土は、上半部が暗褐色シルト層、下半部が炭化物粒、焼土粒をやや多く含む褐色粘土質シルト層で占められている。三角状の堆積がみられ、自然堆積の様相を呈している。床面は、北側に20～40cmの幅で10cmほど高く段状になり、全体として中央部が浅皿状に窪んでおり、炭化物粒や焼土粒が集中して検出されている。柱穴は９個検出され、位置、規模からＰ３、Ｐ４、Ｐ７が主柱穴を形成していたと推定される。炉は検出されていないが、規模、形状、柱穴配置、遺物出土状況から、竪穴住居とした。

出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は20点掲載した。１～６は縦位の縄文原体押圧文、７は横位の縄文原体押圧文、８～20は隆帯や沈線、または両方で渦巻文、弧状文、三角状文、平行文を施されている。石器は10点掲載した。１は石匙、３～７は黒曜石の剥片、31、32は台石、33、96は磨石である。時期は縄文中期前半である。

ＳＩ－２（図６、写真図版１－２、５－２、表４－１）

調査区東端にあり、グリッド３ｋ、４ｋに位置する。東側半分は調査区域外にある。土器が集中して検出され、暗褐色土の広がりがみられ、遺構と確認した。プランが鮮明に把握できず、Ⅲ層上面まで掘り下げて検出した。重複関係はない。Ⅲ層の地山である黄褐色土層をあまり掘り込んでおらず、南側は不明瞭であり、土層断面や遺物の広がりからプランを把握した。規模は径約4.2mで、平面形は、ほぼ円形を呈するものと推定される。

埋土は、上半部が黒褐色～褐色粘土質シルト層、下半部が暗褐色～褐色粘土シルト層、最下部に黄褐色粘土質シルト層で構成されている。床面は中央部が浅く窪んでいるが、ほぼ平坦で、しまっている。土層断面から推定すると壁高は約20cmである。主柱穴はＰ１が１個検出されている。炉は、中央部西よりのところに地床炉が検出されている。規模は48×54cmで、現地性焼土の最大厚は、３cmである。北西側に浅皿状の窪みが伴う。

出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は８点掲載した。21は縦位の縄文原体押圧文、22～28は隆帯、沈線によって渦巻文、三角状文が施されている。石器は７点掲載した。２は石匙、34、36、38、39は台石、35は凹石、37擦石である。時期は縄文中期前半である。

ＳＩ－３（図６、写真図版２－１、５－３、表４－１）

調査区南側にあり、グリッド５ｇ、５ｈに位置する。Ⅲ層上面でくっきりと暗褐色土の円形の広がりがみられ遺構と確認したものである。落とし穴ＳＫＴ－１を切り、土坑ＳＫ－２に切られている。規模は長径約３ｍ、短径約2.7mで、平面形はほぼ円形である。

埋土は、上半部が褐色粘土質シルト層、下半部が暗褐色粘土質シルト層で占められて、三角状の堆積がみられ、自然堆積の様相を呈している。底面は浅皿状に中央部が低くなっている。壁際との比高差は約10cmである。柱穴状ピットは４個検出されている。位置、規模から、Ｐ２、Ｐ３が主柱穴であると推定される。

出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は７点掲載した。29は細い隆帯と縄文原体押圧文で弧状文が施されている。30、31は隆帯による文様、32、33は沈線による文様、35は横位の結節回転縄文が施されている。石器は１点掲載した。40は擦石で底面直上から出土している。炉が検出されていないことなどから竪穴遺構とした。時期は縄文中期前半である。

ＳＩ－４（図７、写真図版２－２、５－４、表４－１）

調査区南東部にあり、グリッド５ｉ、５ｊに位置している。南側の一部は調査区域外にある。落とし穴ＳＫＴ－２を切ってつくられている。検出されたプランから、規模は径約2.6mで、平面形がほぼ円形を呈しているものと推定される。

埋土は、上半部が炭化物粒を含む褐色粘土質シルト層、下半部が炭化物粒、焼土粒を含む暗褐色粘土質シルト層で占められている。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、西側に幾分傾斜している。比高差は約 ８cmである。底面はしまっている。壁高は13cmである。柱穴状ピットが4個検出されている。位置、規模から、Ｐ１、Ｐ３が主柱穴であると推定される。炉は検出されていない。

出土遺物は、縄文土器で4点掲載した。34、36は結節回転縄文、38は単節の縄文、39は細い隆帯による貼付文が施されている。炉が検出されていないことなどから、竪穴遺構とした。時期は縄文中期前半と考えられる。

ＳＩ－５（図７、写真図版３－１、５－５、表４－１）

調査区西側に１棟だけ検出され、グリッド３ｃ、４ｃに位置している。Ⅲ層上面で、遺物を多く含む暗褐色土の広がりがみられ、遺構と確認したものである。重複関係はない。規模は長径約2.4m、短径約2.2mで、平面形が隅丸長方形を呈している。

埋土は、炭化物粒を全体に含む褐色粘土質シルト層で占められている。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、北側に幾分傾斜し、比高差は約10cmである。底面はしまっている。壁は緩く外反しており、壁高は約23cmである。柱穴状ピットが２個検出されている。Ｐ２は深さ46cmを測り、主柱穴であると考えられる。

出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は７点掲載した。40は短沈線による斜行文、山形文、41は沈線による平行文、42～44は隆帯と縄文原体押圧文による弧状文、平行文、45、46は結節回転縄文が施されている。石器は11点掲載した。41～45は磨石、49は台石、46～48、59、75は擦石である。炉が検出されていないことなどから、竪穴遺構とした。時期は縄文中期前半と考えられる。

ＳＩ－６（図８、写真図版３－２、５－６～８、表４－１）

調査区東側にあり、グリッド２ｊ、２ｋ、３ｊ、３ｋに位置する。Ⅱ層を掘り下げたⅢ層上面で、

遺物を多く含む暗褐色土の広がりがみられ、遺構と確認したものである。ＳＫ－４、ＰＰ－５に切られている。炉が２つ検出されており、古い方の炉を炉№1、新しい炉を炉№２とした。住居は東側に拡張していると考えられ、新しい住居を新ＳＩ－６、古い住居を旧ＳＩ－６とした。

（新ＳＩ－６）規模は長径約4.2m、短径約3.8m、平面形が東西に長い楕円形を呈している。埋土は、炭化物粒を全体に含む暗褐色粘土質シルト層で占められている。壁際に、褐色粘土質シルト層が三角状に堆積している。床面は東側半分が緩く西側に傾斜している。比高差は14cmである。壁は緩く外反しており、検出面からの壁高は17cmである。柱穴状ピットは新旧の住居で合計16個検出されている。位置、規模などから主柱穴はＰ４、Ｐ14、Ｐ15、Ｐ17と推定される。炉は中央部につくられている。現地性焼土の外周に、礫が埋められていたと推定される跡が数か所で確認でき、もともとは石囲炉であったと考えられる。炉の規模は約86×72ｃｍ、焼土の厚さは約７cmである。

（旧ＳＩ－６） 規模は長径約3.4m、短径約3.1m、平面形が南北にやや長い楕円形を呈するものと推定される。新旧住居に伴う柱穴状ピットは多数検出されているが、どれがどちらに伴うものかは不明である。炉は中央西寄りに設けられている。礫を埋めていた痕跡が確認できることから、石囲炉であったと考えられる。炉の規模は約52×44cm、焼土の厚さは約５cmである。南壁に周溝が一部検出されている。

出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は６点掲載した。47は隆帯と縄文原体押圧文による渦巻文、48はボタン状突起と縦位の縄文原体押圧文、49は縦位の縄文原体押圧文、50は隆帯と沈線による弧状文、51は隆帯による弧状文、縦位・横位の短沈線文、52は縄文原体押圧文をつけられた隆帯による渦巻文、縄文原体押圧文による渦巻文が施されている。石器は９点掲載した。50～52は凹石、53～55、60は擦石、57は磨石である。新旧住居の時期は縄文中期前半と考えられる。

ＳＩ－７（図９、写真図版４－１、６－１、表４－１）

調査区北東にあり、グリッド１ｉ、２ｉに位置する。Ⅱ層を掘り下げている段階で黒褐色土の広がりがみられたが、輪郭が不明瞭なため、Ⅲ層上面まで掘り下げて検出したものである。ＳＴＫ－３を切り、中央部をＳＫ－17、ＳＫ－19に切られている。規模は長径4.2m、短径2.8m、平面形はやや東西に長い不整楕円形を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルト層で占められ、壁際に褐色粘土質シルト層が三角状に堆積している。床面は平坦でしまっている。柱穴状ピットは15個検出されている。位置、規模からＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ８、Ｐ12が、主柱穴で、六角形の柱穴配置を呈したと考えられる。壁高は約７cmである。炉は不明である。床面中央部がＳＫ－17、ＳＫ－19に深く切られていることから、この位置に、炉が設けられていた可能性はある。

出土遺物は、縄文土器である。４点掲載した。53は口縁部内外面を隆帯による渦巻文、54は縦位の縄文原体押圧文、55は平行沈線間を交互刺突文、沈線による波状文、56は単節縄文が施されている。

出土遺物に時間の幅があるのは、切っている土坑の遺物が混在しているものと考えている。時期は縄文中期前半である。

ＳＩ－８（図９、写真図版４－２、６－２、表４－１）

調査区東側にあり、グリット３ｉ、３ｊに位置する。ＳＩ－６と近接しているが重複関係はない。Ⅱ層を掘り下げている際に、石器、土器が多く出土しており、遺構の存在を意識したが、輪郭がつかめず、Ⅲ層上面まで掘り下げて、遺構を確認したものである。規模は長径約2.7m、短径約1.6m、平面形が隅丸長方形を呈している。

埋土は、上半部は暗褐色粘土質シルト層、下半部が黄褐色粘土質シルト層で占められている。底面

は幾分凹凸があり、しまっている。壁は底面から緩く外反している、壁高は６cmである。柱穴状ピット、炉は検出されていない。

出土遺物は、縄文土器、土製品、石器である。土器は11点掲載した。57は隆帯と縄文原体押圧文、58は口唇部が細い流体による弧状文、59は隆帯と縄文原体押圧文による弧状文、60は隆帯による渦巻文、沈線による弧状文、61～63は沈線による平行文、弧状文、64は沈線による渦巻文、65、66は隆帯、沈線による弧状文、67は隆帯による縦位の平行文を施している。石器は４点掲載した。58は擦石、61～63は台石である。炉がないことなどから、竪穴遺構とした。時期は縄文中期前半である。

２）土坑

ＳＫ－１（図10、写真図版６－３・４、表４－２）

調査区南東隅にあり、グリッド５ｋに位置する。検出面はⅢ層上面である。規模は長径約159cm、短径約140cm、深さ28cmである。平面形は楕円形を呈している。埋土は、黒褐色シルトの小ブロックを全体に含むにぶい黄褐色粘土質シルト層で占められている。壁際に黄褐色粘土質シルト層が三角状に堆積している。底面は擂鉢状を呈し凹凸がある。東側に柱穴状ピットが１個検出されている。

出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は８点掲載した。68は隆帯による平行文、沈線によるは縄文、69はボタン状突起、沈線によるは縄文、70～73は沈線による波状文、渦巻文、弧状文、78、79は単節の縄文が施されている。石器は１点で、64は凹石である。機能については不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－２（図10、写真図版６－５・６、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド５ｊに位置する。検出面はⅢ層である。規模は長径1.3m、短径約１m、深さ約1.1mである。平面形は、上部が崩れて、楕円形を呈しているが、もともとは円形であると推定される。埋土は、上位が暗褐色～黒褐色粘土質シルト層、中位が暗褐色粘土質シルト層、下位がにぶい黄褐色粘土質シルト層で構成されている。最下位の副穴の埋土は褐色粘土質シルト層で占められている。全体的に自然堆積の様相を呈している。底面は平坦で、中央に径22cm、深さ18cmの規模の円形の副穴が形成されている。出土遺物はない。副穴をもつ円形の深い土坑であることから、落とし穴であると推定される。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－３（図10、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド５ｈ、５ｉに位置する。検出面はⅢ層である。ＳＩ－１とＳＫ－５に挟まれているが、重複関係はない。規模は長径約70cm、短径約55cm、深さ16cm、平面形はやや南北に長い楕円形を呈している。埋土は、暗褐色粘土質シルト層で占められている。底面は北側に急傾斜し、北壁下が小ピット状になっている。出土遺物は、縄文土器で4点掲載した。74は隆帯による渦巻文、75は刻み目をもつ隆帯による平行文、76は単節の縄文、77は縦位の縄文原体押圧文が施されている。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－４（図11、写真図版６－７・８、表４－２）

調査区東側で、グリッド３ｊに位置する。検出面はⅡ層下部面で、黒褐色土の広がりがみられ遺構と確認したものである。ＳＩ－６を切ってつくられている。規模は長径88cm、短径78cm、深さ26cm、平面形は円形である。埋土は、上半部が暗褐色土や黄褐色土の小ブロックを中央に含む黒褐色粘土質シルト層､下半部が暗褐色粘土質シルト層で構成されている｡底面は南側半分が一段低くなっている。出土遺物はない。時期の詳細は不明であるが、縄文中期と考えられる。

ＳＫ－５（図10、写真図版７－１・２、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド５ｉに位置する。ＳＩ－１とＳＩ－4の間にある。重複関係はない。検出面はⅢ層である。規模は長径100cm、短径95cm、深さ13cm、平面形が円形を呈する。埋土は、上半部が炭化物粒を少量含む暗褐色シルト層、下半部が褐色粘土質シルト層で占められている。底面は凹凸があり、小段状になっている。出土遺物は、縄文土器、石器である。土器は３点掲載した。80、81は単節の縄文、82は隆帯による平行文が施されている。石器は１点掲載した。66は擦器である。性格は不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－6（図10、写真図版７－３・４、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド５ｉに位置する。ＳＩ－１・４、ＳＫ－４・７に挟まれている。重複関係はない。規模は長径75cm、短径65cm、深さ８cm、平面形は円形を呈する。埋土は、上位に黒褐色粘土質シルト層があり、大半は褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平担でやや東側が高い。出土遺物は縄文土器で、１点掲載した。単節の縄文が施文されている。性格は不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－7（図10、写真図版７－５・６、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド４ｉ、５ｉに位置する。ＳＩ－１と近接しているが、重複関係はない。検出面はⅢ層である。規模は長径93cm、短径81cm、深さ25cm、平面形はやや南北に長い不整楕円形を呈している。埋土は上半部が黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト層、下半部が炭化物粒を含む褐色粘土質シルト層で占められている。底面はやや平坦である。出土遺物は縄文土器で、３点掲載した。83は隆沈線による渦巻文、84は隆帯による曲線文、縄文原体押圧文、86は単節の縄文が施されている。性格は不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－9（図11、写真図版７－７・８、表４－２）（ＳＫ－８は欠番）

調査区北東隅にあり、グリッド１ｋに位置する。検出面はⅢ層上面である。Ⅱ層下部で暗褐色土の広がりが見えたが明瞭でなく、Ⅲ層まで掘り下げて確認したものである。重複関係はない。規模は長径132cm、短径128cm、深さ13cm、平面形は円形である。埋土は上半部が黒褐色土、黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色粘土質シルト層、下半部が褐色粘土質シルト層で占められている。底面は凹凸があり、南側がピット状に一段低くなっている。出土遺物はない。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－10（図11、写真図版８－１・２、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｉ、２ｊにある。ＳＩ－６とＳＩ－７の間にある。重複関係はない。検出面はⅢ層である。規模は長径75cm、短径63cm、深さ９cm、平面形は円形である。埋土は炭化物粒を含む暗褐色粘土質シルト層で占め、壁際に黄褐色粘土質シルト層が堆積している。底面は平坦であり、壁面が緩く外反している。出土遺物はない。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－11（図11、写真図版８－３・４、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド１ｊ、２ｊに位置している。ＳＩ－７と近接している。検出面はⅢ層上面である。重複関係はない。規模は長径87cm、短径56cmである。平面形は楕円形を呈している。埋土は炭化物粒、黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色粘土質シルト層で占められている。壁際に暗褐色～褐色粘土質シルト層が三角状に堆積している。底面は凹凸があり、北側が上がっている。出土遺物はない。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－13（図12、写真図版８－５・６、表４－２）（ＳＫ－12は欠番）

調査区南東にあり、グリッド４ｃに位置する。ＳＩ－５に隣接している。検出面はⅢ層上面である。規模は長径123cm、短径98cm、深さ33cm、平面形は南北に幾分長い楕円形を呈している。埋土は、

上半部が炭化物粒を含む褐色粘土質シルト層で、下半部が炭化物粒を含む黄褐色シルト層で占められている。底面は浅皿状で北壁下に小ピット状の穴がある。壁面は大きく外反している。出土遺物は、縄文土器、剥片である。土器は８点掲載した。87は平行沈線間を短沈線による鋸歯状文、88は沈線による波状文、89は刻み目のある隆帯による平行文、90は隆帯による平行文、91は横位の縄文原体押圧文、92、97は単節の縄文、93は縦位の縄文原体押圧文、94は隆帯による渦巻状突起、95は隆帯による弧状文、96は刻み目のある隆帯と沈線による小波状文が施されている。剥片は3点で、13～15は黒曜石の剥片で、産地は分析により一関市花泉産であることがわかった。性格は不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－14（図12、写真図版８－７・８、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｉに位置する。ＳＩ－７に近接している。検出面はⅢ層上面である。重複関係はない。規模は長径58cm、短径54cm、深さ12cm、平面形は円形である。埋土は、上半部が褐色粘土質シルト層、下半部が黄褐色粘土質シルト層で占められている。底面は北側に深く傾斜している。出土遺物はない。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－15（図11、写真図版９－１・２、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｉ、２ｊに位置する。ＳＩ－６、ＳＩ－８と近接している。検出面はⅢ層上面である。重複関係はない。規模は長径79cm、短径73cm、深さ18cm、平面形は円形である。埋土は、上位が炭化物粒、黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色粘土質シルト層、中位が褐色粘土質シルト層、下位が黄褐色粘土質シルト層で構成されている。底面は平坦で、壁面は緩く外反する。出土遺物は縄文土器と、石器である。土器は３点掲載した。93は縦位の縄文原体押圧文、94は隆帯による渦巻状突起、95は隆帯による弧状文が施されている。石器は２点掲載した。67は擦石、68は凹石である。性格は不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－16（図11、写真図版９－３・４、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｊに位置する。検出面はⅢ層上面である。規模は長径59cm、短径57cm、深さ16cmである。平面形は円形である。埋土は、上半部が褐色粘土質シルト層、下半部が黄褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平坦である。壁面は外反している。出土遺物は、縄文土器である。土器は４点掲載した。98～100は隆帯による文様、縦位の縄文原体押圧文、101は縦位の短沈線、縦位の縄文原体押圧文が施されている。性格は不明である。時期は縄文中期前半である。

ＳＫ－17（図12、写真図版９－５、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド１ｉに位置する。ＳＩ－７住居跡を切っている。検出面はⅢ層上面であるが、ＳＩ－７住居を精査している段階で確認できた遺構である。規模は長径160cm、短径112cm、深さ47cm、平面形は不整円形を呈している。埋土は上位が褐色土の小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト層、中位が暗褐色粘土質シルト層、下位が炭化物粒を含む褐色粘土質シルト層で構成されている。底面はやや浅皿状を呈し、壁面は緩く外反している。出土遺物はＳＩ－７の出土遺物に含まれている。遺構としては取り上げていない。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－18（図12、写真図版９－６、表４－２）

調査区南にあり、グリッド５ｇに位置している。検出面はⅢ層である。ＳＩ－３を精査中に検出したものである。ＳＩ－３、ＳＴＫ－１を切り、ＳＫ－19に切られている。規模は長径72cm、短径68cm、深さ36cm、平面形が円形を呈している。埋土は、暗褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平坦で、壁面はゆるく外反している。遺物はＳＩ－３の出土遺物に含まれており、遺構としては取り上げられなかった。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫ－19（図12、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド５ｇに位置する。ＳＩ－７を精査する段階で、確認した遺構である。東側は一部掘りすぎて不明であるが、残存する壁から規模は長径97cm、短径64cm、深さ32cmと推定され、平面形は不整円形を呈している。底面は擂鉢状を呈している。出土遺物はＳＩ－７の中に含まれており、遺構として取り上げていない。性格は不明である。時期は縄文中期と考えられる。

３）落とし穴遺構

落とし穴は６基確認している。溝状のもの５基、円形のもの（ＳＫ－２）１基である。溝状のもののうち、２基を精査、１基を一部精査、２基を平面実測している。円形のものは土坑のところで事実記載をしている。

ＳＫＴ－１（図13、写真図版９－７・８、表４－２）

調査区南にあり、グリッド５ｇに位置する。上部をＳＩ－３、ＳＩ－18に切られている。

残存する落とし穴の規模は、上幅で長さ280cm、幅49cm、下幅で長さ292cm、幅10cm、深さ53cmである。平面形は細長い溝状の長楕円形を呈している。主軸方位はＮ－19°－Ｗである。埋土は、最上位が暗褐色～褐色粘土質シルト層で覆われ、上位が黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト層、中位が褐色粘土質シルト層、下位が褐色～明黄褐色粘土層で構成されている、最上位以外は自然堆積の様相を呈している。底面の両端は上に上がり、中央部が深くなっている。両先端の壁面はオーバーハングしている。副穴は確認されていない。出土遺物はない。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫＴ－２（図13、写真図版10－１・２、表４－２）

調査区南端にあり、グリッド５ｉに位置する。ＳＩ－４に上部を切られている。検出されている部分から、上幅で長さ250cm、幅87cm、下幅で長さ260cm、幅20cm、深さ85cmである。平面形は細長い溝状の長楕円形を呈している。主軸方位はＮ－15°－Ｗである。埋土は、上位が炭化物粒、黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色粘土質シルト層、中位が褐色～にぶい黄褐色粘土質シルト層、下位が褐色～黄褐色粘土質シルト層で構成されている。底面は両端が浅くなり中央部が深くなっている。両端の壁面はややオーバーハングしている。出土遺物はない。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫＴ－３（図13、写真図版10－３・４、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド１ｉ、１ｊに位置する。ＳＩ－７、ＳＫ－17に南側を切られている。残存する壁から推定すると、上幅は長さ約140cm、幅約30cm、深さ45cmである。平面形は細長い溝状の長楕円形を呈していたと推定される。主軸方位はN－73°－Wである。出土遺物は縄文土器１点で、102はボタン状突起、縦位の縄文原体押圧文が施されている。時期は縄文中期と考えられる。

ＳＫＴ－４（図14、表４－２）

調査区東にあり、グリッド３ｉ、４ｊに位置する。Ⅲ層上面で検出された。精査はせず、平面形のみ実測した。長さは304cm、幅は40cmである。主軸方位はN－52°－Wである。

ＳＫＴ－５（図14、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｊ、２ｋに位置する。Ⅲ層上面で検出された。ＳＫ－６の北側にある。平面のみ実測した。規模は長さ170cm、幅45cmである、主軸方位はＮ－73－Ｅである。

４）柱穴

ＰＰ－１（図10、写真図版10－５、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド５ｉに位置する。ＳＩ－１と近接している。検出面はⅡ層下部である。

規模は長径48cm、短径45cm、深さ８cm、形状は円形である。埋土は、上半部が炭化物粒、焼土粒を含む暗褐色粘土質シルト、下半部が褐色粘土質シルトで占められている。底面は北壁側が窪んでいる。出土遺物は縄文土器２点で、103、104は単節の縄文が施されている。時期は縄文中期である。

ＰＰ－２（図10、写真図版10－６、表４－２）

調査区南東にあり、グリッド５ｉに位置する。ＰＰ－１、ＳＫ－６と近接している。検出面はⅢ層である。規模は径39cm、深さ19cm、形状は円形である。埋土は、黒褐色粘土質シルトの単層である。底面は平坦で凹凸がある。壁面は外反している。出土遺物はない。時期は不明である。

ＰＰ－３（図12、写真図版10－７、表４－２）

調査区西にあり、グリッド４ｃに位置する。ＳＩ－５と近接している。検出面はⅢ層である。規模は長径59cm、短径52cm、深さ28cm、形状は円形である。埋土は、上半部が黄褐色土を含む暗褐色シルト層、下半部は褐色～黄褐色粘土質シルト層で占められている。形態は擂鉢状を呈していて、底部が窪んでいる。出土遺物は縄文土器で、３点掲載した。105、106は単節の縄文、107は横位の縄文原体押圧文が施されている。時期は縄文中期前半である。

ＰＰ－４（図12、写真図版10－８、表４－２）

調査区南西にあり、グリッド４ｉ、５ｉに位置する。ＳＫ－13に近接している。検出面はⅢ層である。規模は長径62cm、短径49cm、深さ12cm、形状は楕円形を呈する。埋土は、褐色～黄褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平坦で、壁は緩く外反している。出土遺物はない。時期は不明である。

ＰＰ－５（図11、写真図版11－１、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｊに位置する。ＳＩ－６を切ってつくられている。検出面はⅢ層である。規模は長径38cm、短径30cm、深さ９cm、形状は円形である。埋土は、上半部が炭化物粒を含む暗褐色粘土質シルト層、下半部が褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平坦で緩く外反している。出土遺物はない。時期は不明である。

ＰＰ－６（図11、写真図版11－２、表４－２）

調査区北東にあり、グリッド２ｊに位置する。ＰＰ－１、ＳＫ－16と近接している。検出面はⅢ層である。規模は長径50cm、短径42cm、深さ18cm、形状は楕円形である。埋土は、上半部が炭化物粒を含む暗褐色粘土質シルト層、下半部が暗褐色～褐色粘土質シルト層で占められている。底面は凹凸があるが平坦である。出土遺物はない。時期は不明である。

５）埋設土器

埋設土器１（図14、写真図版11－３・４）

調査区南にあり、グリッド５ｇに位置する。ＳＩ－３に近接している。検出面はⅡ層下部である。検出面での埋設土器は縄文（ＬＲ）の地文をもつ深鉢形土器の底部である。残存高は５cm、底径は13cmである。二次的に過熱を受けている。土器を埋めた穴の規模は径35cm、深さ８cmである。埋土は、暗褐色～褐色粘土質シルトで占められている。土器の真下に長さ16cm、幅７cm、厚さ４cmの大きさをもつ扁平な亜円礫が埋置されていた。土器を埋めるときに一緒に埋めたものである。石を埋置した理由は、機能的なものなのか、精神的なものなのか不明である。住居との関係も不明である。時期は縄文中期と考えられる。

埋設土器２（図14、写真図版11－５・６）

調査区南西にあり、グリッド４ｅに位置する。検出面はⅢ層である。近接する遺構はない。検出面での埋設土器の大きさは残存高18cm、底径26cmである。縄文（ＬＲ）の地文をもつ深鉢形土器であ

る。内面に炭化物が厚く付着している。外面は二次的過熱を受けている。土器を埋めた穴の規模は径41cm、深さ８cmで、土器を埋めた部分が周りより10cm深くピット状になっている、埋土は、土器内部が暗褐色粘土質シルト層、周りが褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平らである。時期は縄文中期と考えられる。

埋設土器３（図14、写真図版11－７）

調査区西端にあり、グリッド4ｂに位置する。Ⅱ層を掘り下げていた際に、検出されたものである。検出面での埋設土器の大きさは、残存高10cm、底径10cmである。縄文（ＬＲ）の地文をもつ小型の深鉢形土器である。土器を埋めた穴は径33cm、深さ７cmで浅皿状を呈し、埋土は、褐色粘土質シルト層で占められている。時期は縄文中期と考えられる。

６）遺構外出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、石匙、磨製石斧、磨石、凹石、擦石、台石、剥片である。大半が縄文中期前半（大木７ｂ式～大木８ａ式）に含まれるものである。

（１）縄文土器（写真図版12、13、14－１、14－２、表５）

縄文土器は口縁部を主体に選んで掲載した。器種は深鉢が大半を占め、わずかに浅鉢が出土している。以下の文様を基本にしながら分類した。文様は、刺突文、細い隆帯による貼り付け文、短沈線文、縄文原体押圧文、隆帯と縄文原体押圧文、隆帯による文様、沈線と隆帯による文様、沈線による文様などである。

（Ａ－１類）　刺突文が施されている。108は平行沈線間に交互刺突文、109は刺突文が施されているものである。（Ａ－２類）　短沈線による文様が施されている。110､111は縦位の短沈線を横に並べている。112は１列の刺突文と２列の縦位短沈線、113は短沈線による斜行状文、114は短沈線による鋸歯状文が施されている。（Ａ－３類）　刻み目をもつ細い粘土紐で文様を施している。115は粘土紐で弧状文、116～120は粘土紐による小波状文が施されている。（Ａ－４類）　指頭圧痕をもつ隆帯による文様を施すものである。120は隆帯によるＹ字状に施文されている。（Ａ－５類）　刻み目を付けた隆帯による文様が施されているものである。122～124は刻み目をもつ隆帯により平行文が施されている。

（Ｂ－１類）　縦位に縄文原体押圧文が施文されているものである。（Ｂ－１ａ類）125～127は刻み目をもつ粘土紐による小波状文をもち、縦位の縄文原体押圧文が施されている。（Ｂ－１ｂ類）128～130は縦位の縄文原体押圧文が施されている。（Ｂ－１ｃ類）131～135は縦位に短い縄文原体押圧文が施されている。133は２列に施文されている。（Ｂ－２類）横位に縄文原体押圧文が施文されている。136、137、139は横位に縄文原体押圧文、138は短い長さの縄文原体押圧文を横２列に施されている。（Ｂ－３類）隆帯と縄文原体押圧文によって施文されている。140～142は隆帯と縄文原体押圧文によって弧状文、三角状文を施している。

（Ｃ－１類）　隆帯と沈線によって文様が施文されている。143～153は隆帯と沈線によって楕円文、弧状文、三角状文が施されている。

（Ｄ－１類）　沈線よって文様が施文されている。154～158は沈線により楕円文、弧状文、平行文が施されている。

（Ｅ－１類）　口唇部～口縁部に隆帯による突起をもつものである。160～164は隆帯による渦巻状の突起がつくられている。

（Ｆ－１類）　結節回転縄文が施文されている。165～167は横位の結節回転縄文が施されている。

（Ｇ－１類）　撚糸文が施文されている。68は撚糸文が施されている。

（その他）179は単節の縄文が施されている。当初、撚糸文が施文されているとみて取り上げたものである。

（２）石器類（写真図版14－３～８、15、表６、本文中の番号は表６の番号である）

16は石匙、17～20、29は石篦、28は磨製石斧である。礫石器では80～92は擦石、94～99、101、102は磨石、103～105、107～112は凹石、113～121は台石である。石質は石匙、石篦が頁岩、磨製石斧が流紋岩、84の擦石と121の台石が緑色凝灰岩で、それ以外の石器がデイサイト質凝灰岩である。磐井川には段丘の構成礫であるデイサイト質凝灰岩が多くあるとのことである。

（３）まとめ

今回確認できた遺構は、竪穴住居４棟、竪穴遺構４棟、土坑16基、落とし穴６基、柱穴状ピット６個、埋設土器３基である。竪穴住居は調査区東側に分布している。平面形は円形のものが２棟（ＳＩ－２、ＳＩ－６）、楕円形のものが２棟（ＳＩ－１、ＳＩ－７）である。規模は円形のものが、径４m前後、楕円形のものが、長径３ｍと４ｍである。住居の中央部が切られているものもあり、正確ではないが、炉の持つ住居は２棟で平面形が円形のものである。炉は地床炉１棟（ＳＩ－２）、石囲炉１棟（ＳＩ－６である。ＳＩ－６の住居は炉が２つ検出されているが、東側に拡張された結果だと考えた。柱穴のうち主柱穴は、ＳＩ－２以外多角形の柱穴配置になっている。今回の調査区は南西に開く馬蹄形状をなす平泉野台地の南西側にあり、縄文中期の土器を多数検出している。縄文中期の土器は、今回の調査区以外にも、東側、沢を挟んだ北側の台地、南に降りる道の崖面からも検出していることから、平泉野遺跡は平泉野台地一帯に広がっているものと考えられる。

竪穴遺構は、調査区西側に１棟、中央に２棟、南東に１棟分布している。平面形は不整円形のもの２棟（ＳＩ－３、ＳＩ－４）、隅丸長方形のもの２棟（ＳＩ－５、ＳＩ－８）である。規模は前者が径2.2～3m、後者が長径2.4～2.6mで、小規模のものである。円形のものは、落とし穴の上部を切ってつくられ、柱穴状ピットをもっている。隅丸長方形のものは遺物が多く出土し、柱穴状ピットはないものと、あっても少ないものとがある。同じ竪穴遺構でも機能が異なっていると推定される。時期は縄文中期前半であるが、出土遺物からＳＩ－８が一番新しいと考えられる。

落とし穴は溝状のもの５基、円形のもの１基、合計６基検出されている。調査区の東側半分に分布している。主軸方位が北西―南東のものが２基（ＳＫＴ－１、ＳＫＴ－２）北東―南西のものが３基（ＳＫＴ－３、ＳＫＴ－４、ＳＫＴ－５）である。前者は並んで南東で検出されている。落とし穴は、さらに調査区域外の南東に伸びるものと推定される。沢を挟んで北側の平泉野台地の地点でも、溝状の落とし穴が２基検出されている。そのうちの１基には底面に逆茂木痕を確認している（平成21年度調査）。円形のものの落し穴は、平泉野台地で初めての検出である。溝状の落し穴と円形の落し穴には、時間差があると考えられる。

土坑は16基（円形の落し穴は除く）検出された。平面形が円形のもの10基、楕円形のもの６基である。規模は長径75～160cmと幅があり、両者とも大小様々である。調査区東に分布している。ＳＩ－１とＳＩ－４との間に５基、ＳＩ－６とＳ－７との間に５基、南東隅と北東隅に１基とそれぞれ離れて分布している。またＳＩ－３やＳＩ－６を切ってそれぞれ１基、ＳＩ－７を切っているもの２基がある。出土遺物がＳＫ－１・３・５・６・７・13・15・16の８基から見つかっている。いずれも縄文中期前半である。用途、機能については不明である。これらの土坑は縄文中期以降のものと考えられる。

埋設土器は３基検出されている。調査区西側にそれぞれ離れて分布している。埋設土器１・埋設土器２は二次的に過熱を受け表面が変化している。埋設土器の内面には炭化物が多く付着しており、煮

炊きに使用されたと推定される。埋設土器３は小型で、二次的過熱も受けておらず、埋設土器１・２とは用途、機能が異なるものと考える。土器底部のみで文様が不明であるが、時期は縄文中期と考えられる。

縄文土器は、調査区中央部を中心に全体に出土している、風化が激しく脆く、洗浄すると表面が剥がれそうなものが多数ある。器種は深鉢型土器が大半で、浅鉢土器は数点である。口縁部を中心に文様を観察して分類した。大きくは大木７ｂ～大木８ａ式の範疇に入るものと考えるが、時間の幅があり、古いものから新しいものまで含まれている。口縁部から底部まで復元できる土器はなく、口縁部のみの分類であるので正確にはつかめない。大きな流れは、（細い粘土紐による文様）（刺突文）（縄文原体押圧文）（隆帯と縄文原体押圧文）（隆帯と沈線文による文様）と流れていくものと推定した。これらの文様は同じ土器に複数重複されて施文されており最後まで残っていくものもある。

縄文中期の土器は平泉野台地全体から出土している。今回の調査で出土した縄文土器は、中期の中でも一番古い中期前葉のものも出土しており、縄文中期における平泉野台地は南西側から人々が生活の場として利用していることが判明した。縄文中期が出土する周辺の遺跡としては、厳美町の槻木平遺跡、まつるべ（Ａ）遺跡、岡山遺跡、神楽平遺跡、大久保遺跡などがある。

今までの平泉野台地の確認調査では、平安時代・９世紀代の須恵器、土師器坏形土器、甕形土器の破片が見つかっている。骨寺（堂）跡にかかわる12世紀代の遺物は出土していない。今回の調査は、「陸奥国骨寺村絵図」（簡略図）に描かれている「骨寺跡」の痕跡を見つけることが目的であった。しかし、古代･中世の遺構、遺物は検出されず、「骨寺跡」の痕跡は確認できなかった。これまでの調査結果から、文献史学で指摘されているように骨寺（堂）跡は平泉の台地の裾野周辺に存在する可能性がある。今後も、骨寺（堂）跡の痕跡を見つける調査を進めていきたい。

（光井）

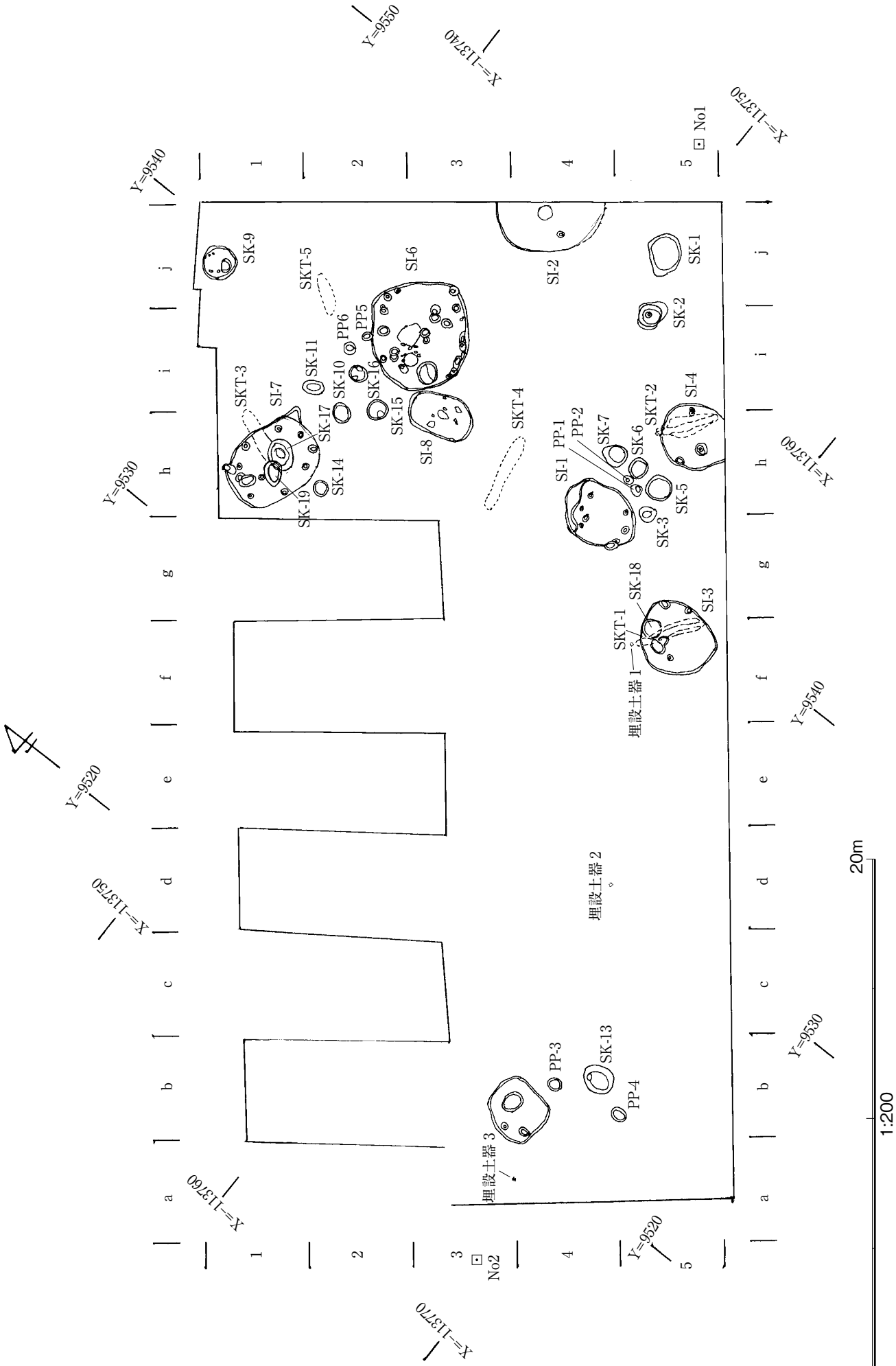
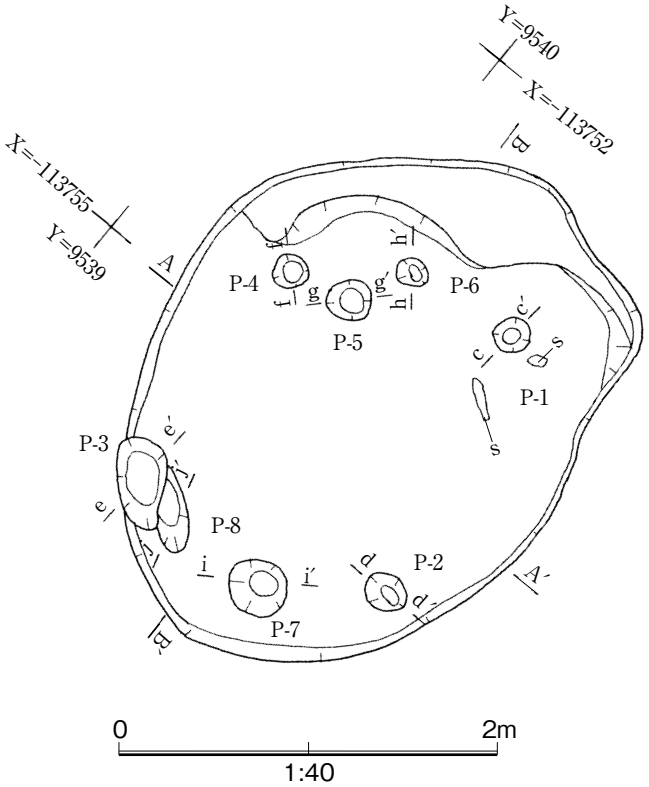
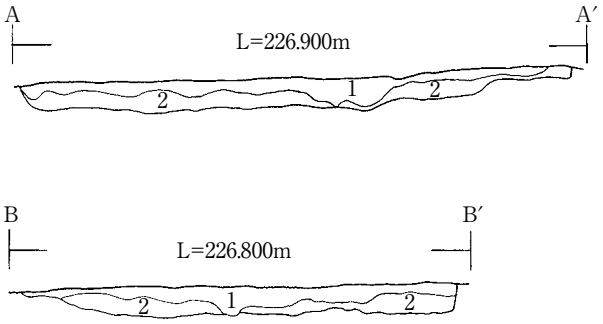

Y=9550
X=-13740
X=-13750
No1
Y=9540
1
2
3
4
5
j
i
h
g
f
e
d
c
b
a
SK-9
SKT-5
SI-6
SI-2
SK-1
SK-2
PP6
PP5
SK-11
SK-10
SK-16
SK-15
SKT-3
SI-7
SK-17
SK-14
SK-19
SI-8
SKT-4
SI-1
PP-1
PP-2
SK-7
SK-6
SKT-2
SI-4
SK-5
SK-3
SK-18
SI-3
SKT-1
埋設土器 1
埋設土器 2
PP-3
SK-13
PP-4
埋設土器 3
Y=9530
X=-13760
Y=9520
X=-13770
No2
20m
1:200
0

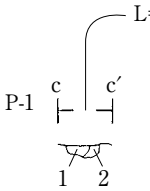
図４　遺構配置図

SI-1

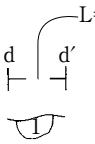




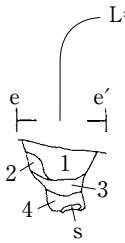
SI-1（ A-A′, B-B′共通）
土層注記
1　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性なし。炭化物粒、焼土粒を少量含む。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒、焼土粒をやや多く含む



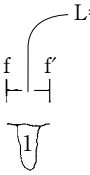
P-1
土層注記
1　10YR4/4　褐色シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。



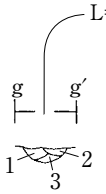
P-2
土層注記
1　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。炭化物粒、焼土粒をやや多く含む。



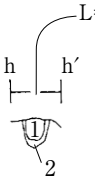
P-3
土層注記
1　10YR3/4　暗褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。炭化物粒をやや多く含む。
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒、焼土粒を全体にやや多く含む。
3　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり



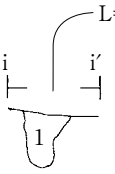
P-4
土層注記
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。炭化物粒、焼土粒を少量含む。黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルトの小ブロックを少量含む。



P-5
土層注記
1　10YR2/3　黒褐色シルト。ややしまっていない。粘性なし。炭化物粒、焼土粒を少量含む。
2　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。



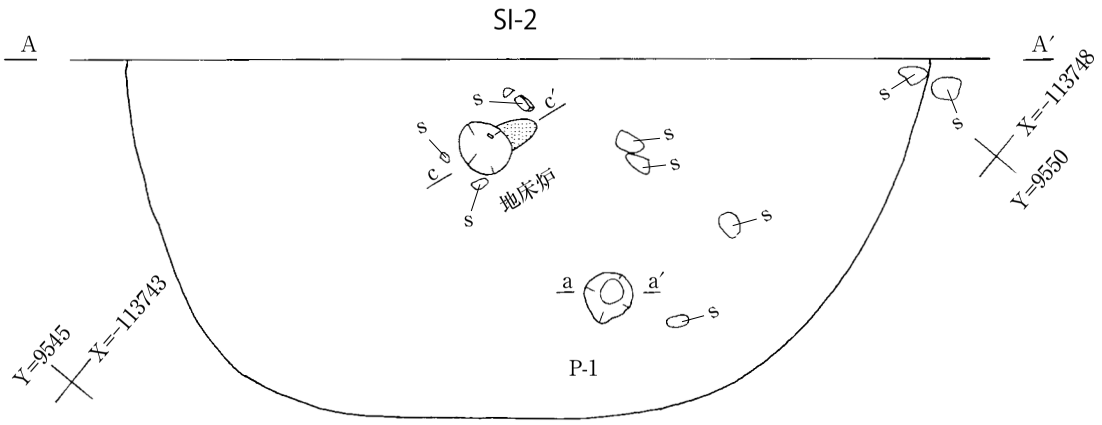
P-6
土層注記
1　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。ややしまっていない。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

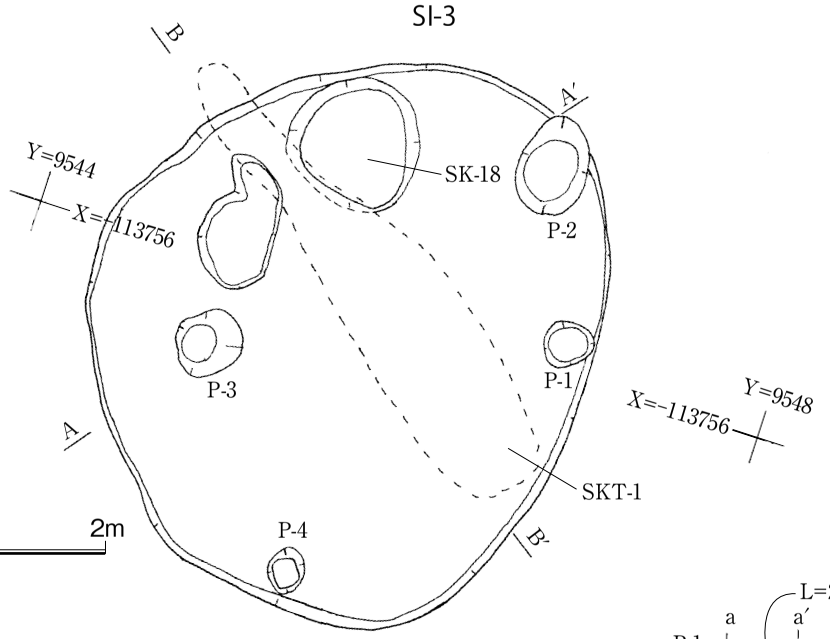


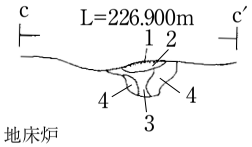
P-7
土層注記
1　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒を全体に少量含む。

P-8
土層注記
1　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒、焼土粒を少量含む。
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。

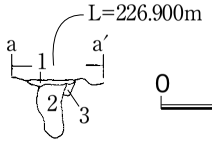
図５　SI-1　実測図





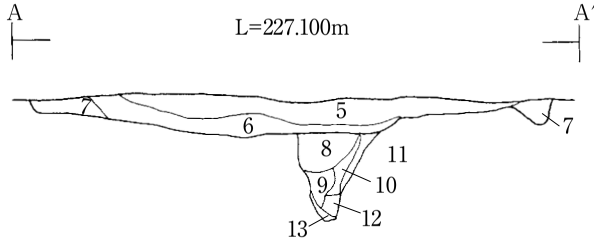


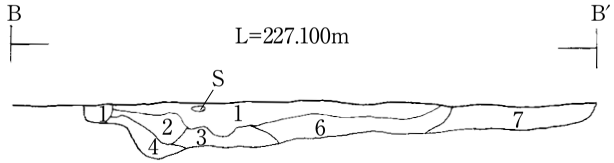
SI-2 地床炉
土層注記
1　5YR5/6　明赤褐色シルト。硬い。粘性なし。現地性焼土
2　5YR4/6　赤褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。現地性焼土。
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
4　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

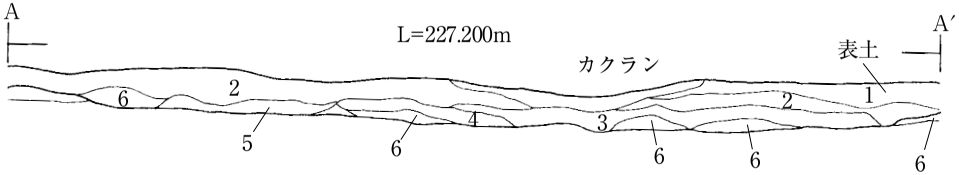


P-1
土層注記
1　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。
2　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。

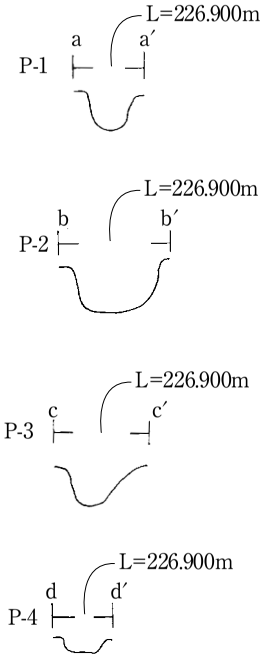
0　2m
1:40





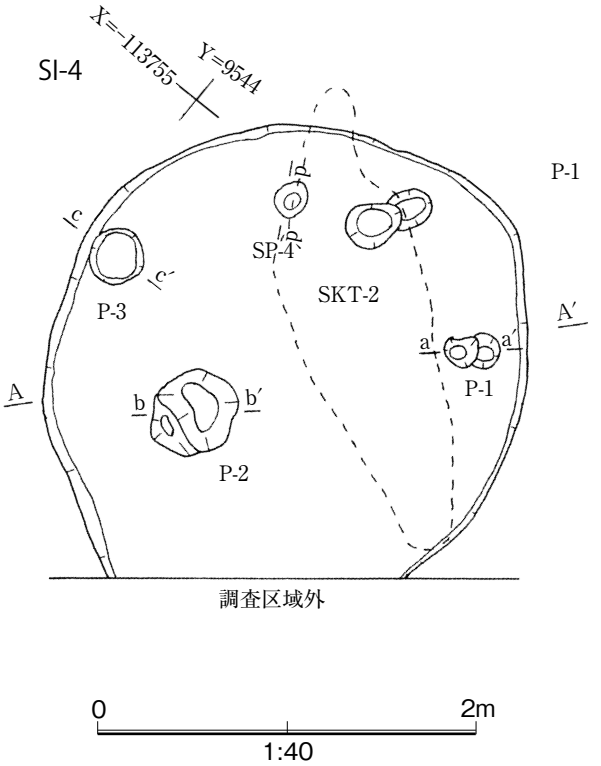


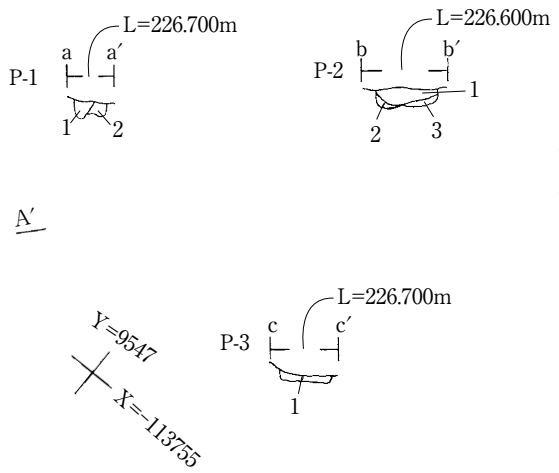
SI-2
土層注記
1　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
2　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
3　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
4　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
5　10YR4/4　褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。



SI-3（A-A′，B-B′ 共通）
土層注記
1　10YR4/4　褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。黄褐色 (10YR5/6) シルトの小ブロックを少量含む。
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
3　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
4　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色シルトの小ブロックを少量含む。
5　10YR4/4　褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色 (10YR5/6) シルトの小ブロックを少量含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色(10YR5/6)シルトの小ブロック、炭化物粒を少量含む。
7　10YR5/8　黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
8　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
9　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性やや強い。
10　10YR4/6　褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
11　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
12　10YR4/6　褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
13　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性やや強い。

図6　SI-2・3　実測図

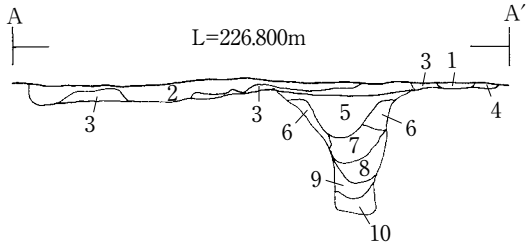




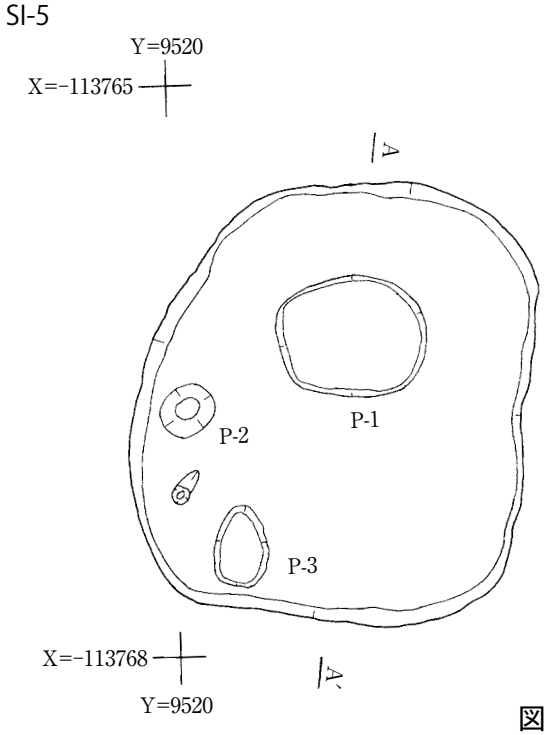
P-2
土層注記
1　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。中央に黒褐色粘土質シルトの小ブロックを含む。
2　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。

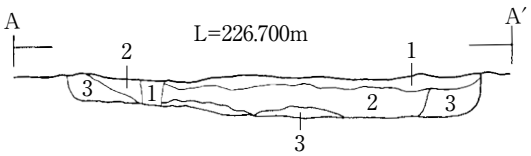
P-3
土層注記
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黒褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

P-4
土層注記
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黄褐色シルトの小ブロック、炭化物粒を少量含む。
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。



SI-4
土層注記
1　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。
2　10YR4/4　褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。黄褐色（10YR5/6）の小ブロック、炭化物粒を少量含む。
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色（10YR5/6）の小ブロックを少量含む。
4　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
5　10YR3/4　黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色（10YR5/6）シルトの小ブロックを全体に、炭化粒を少量含む。
6　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色シルトの小ブロック、炭化物粒を少量含む。
7　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを多く含む。
8　10YR6/6　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。





SI-5
土層注記
1　10YR3/4　暗褐色シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。炭化物粒を少量含む。

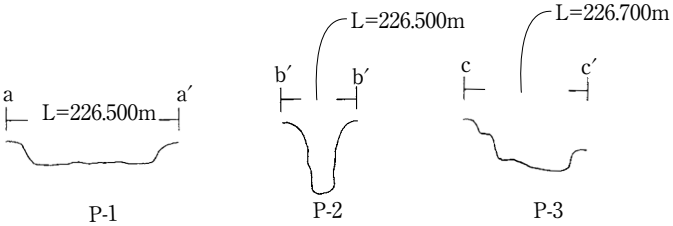
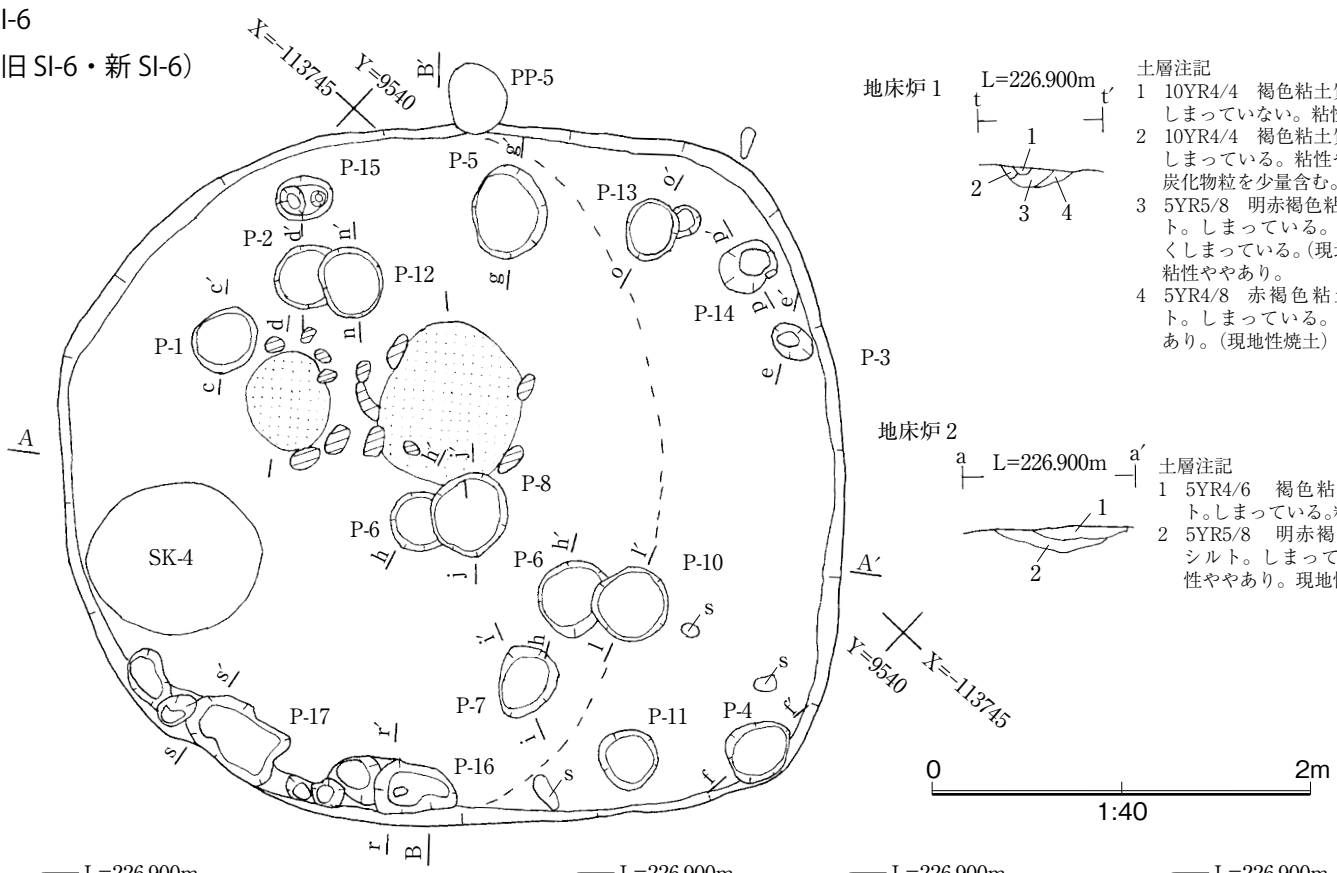


図７　SI-4・5　実測図

SI-6

（旧 SI-6・新 SI-6）



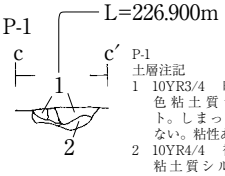
地床炉 1

土層注記
1 10YR4/4 褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。
3 5YR5/8 明赤褐色粘土質シルト。しまっている。上部は固くしまっている。（現地性焼土）粘性ややあり。
4 5YR4/8 赤褐色粘土質シルト。しまっている。やや粘性あり。（現地性焼土）

地床炉 2

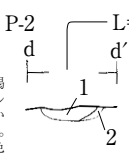
土層注記
1 5YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。
2 5YR5/8 明赤褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。現地性焼土。

P-1



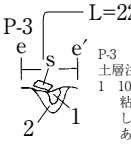
P-1
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。

P-2



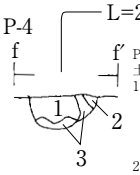
P-2
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黒褐色粘土質シルトの小ブロック、黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。

P-3



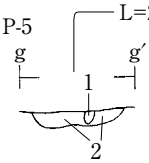
P-3
土層注記
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。（掘りすぎあり）

P-4



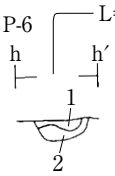
P-4
土層注記
1 10YR4/6 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黒褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR4/4 褐色シルト。しまっていない。粘性あり。
3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。

P-5



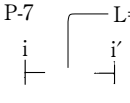
P-5
土層注記
1 10YR3/4 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。

P-6



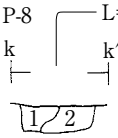
P-6
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒、黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒、黄褐色粘土質シルトを少量含む。

P-7



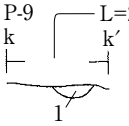
P-7
土層注記
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。

P-8



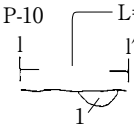
P-8
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒、黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。

P-9



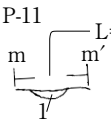
P-9
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。

P-10



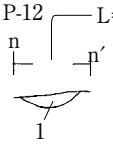
P-10
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。炭化物粒、黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

P-11



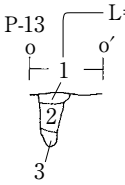
P-11
土層注記
1 10YR3/4 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。

P-12



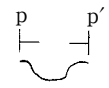
P-12
土層注記
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性なし。炭化物粒、黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

P-13

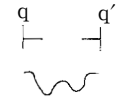


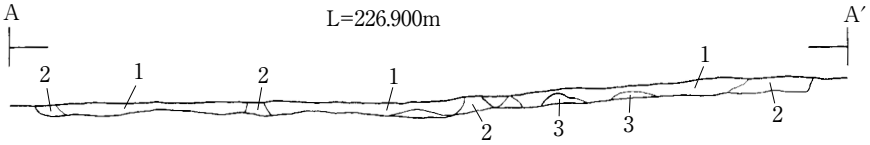
P-13
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。
3 10YR4/4 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。

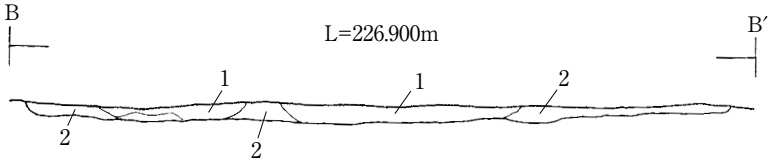
P-14



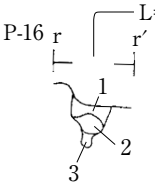
P-15





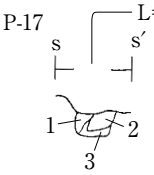


P-16



P-16
土層注記
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。
3 10YR4/6 褐色粘土質シルト。ややしまっている。炭化物粒を少量含む。

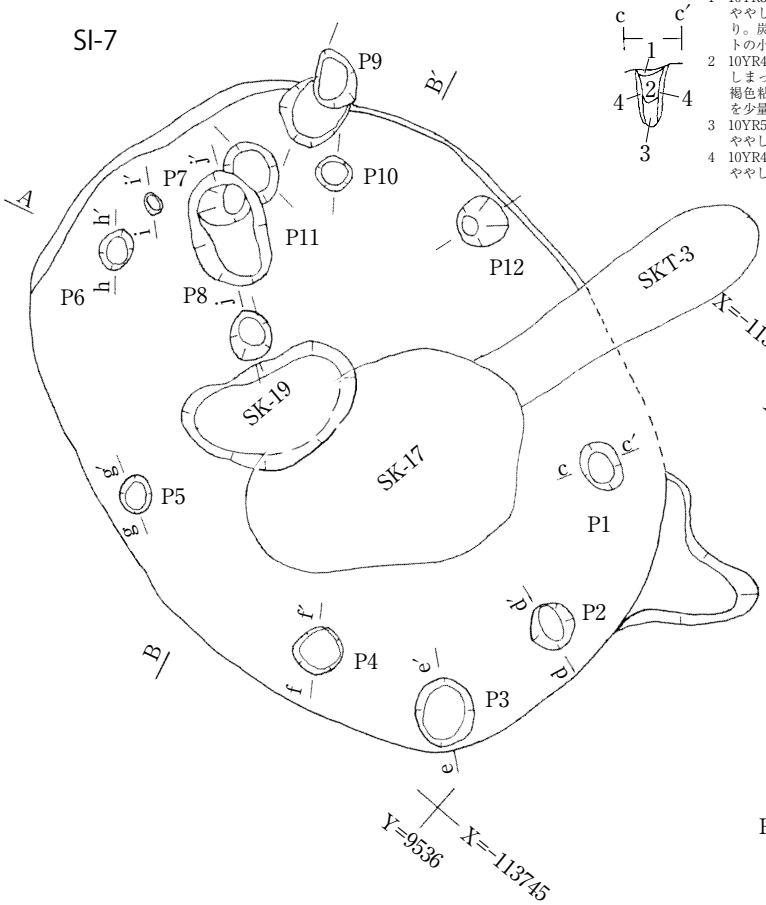
P-17

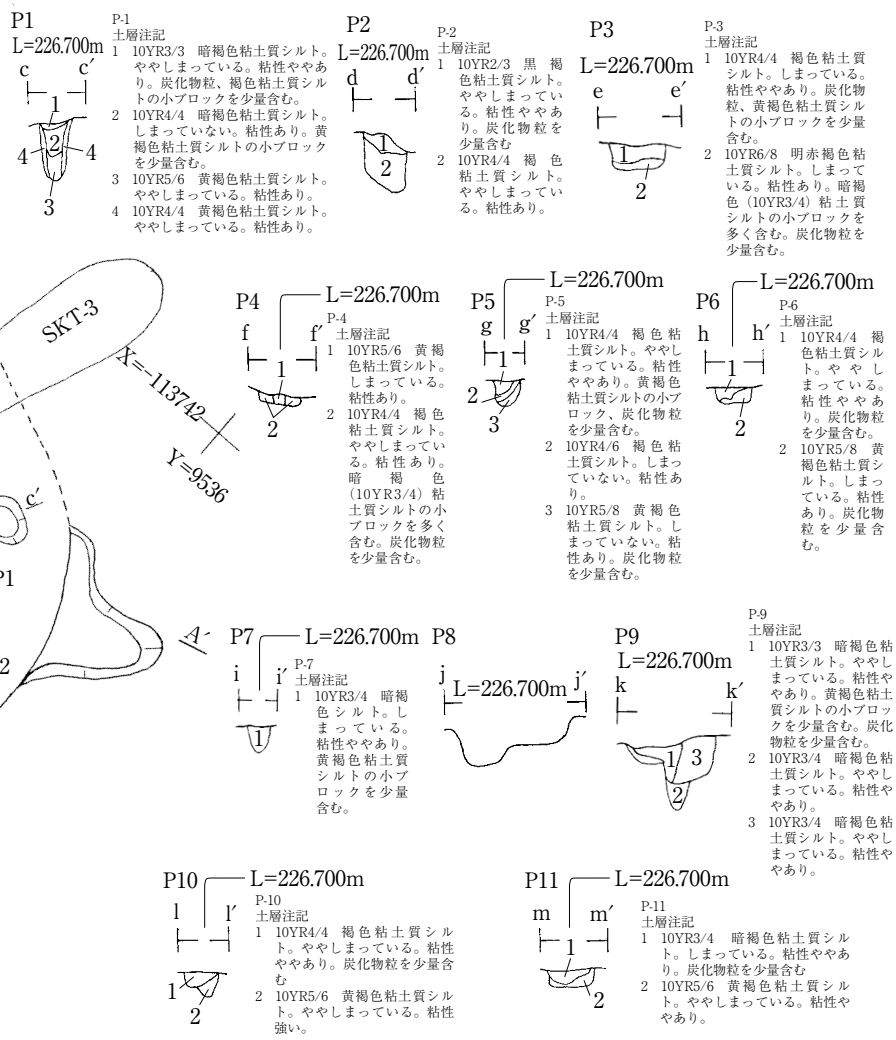


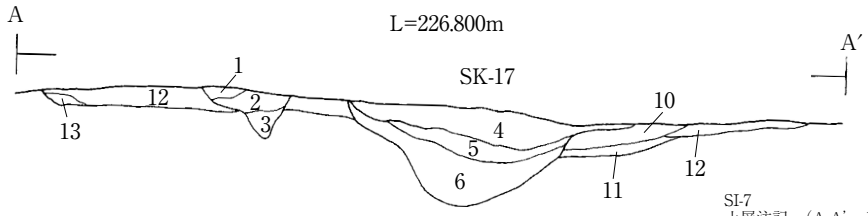
P-17
土層注記
1 10YR3/4 褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。やや粘性あり。

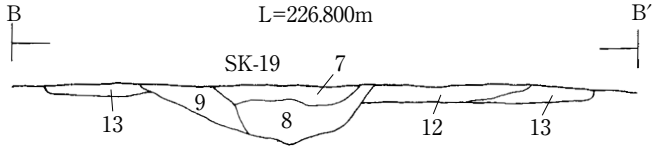
SI-6
土層注記 （A-A′，B-B′共通）
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっていない。粘性あり。炭化物粒を全体に少量含む。土器片を多く含む。
2 10YR4/6 褐色粘土質シルト。ややしまっていない。粘性ややあり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックをやや多く含む。
3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。

図８ SI-6 実測図

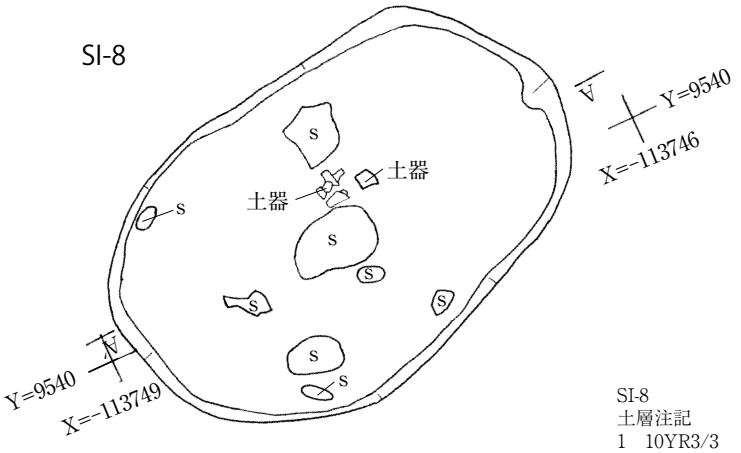


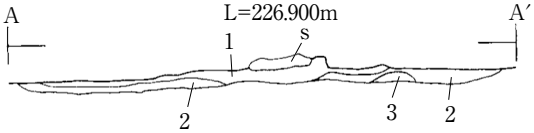






SI-7
土層注記 （A-A′，B-B′共通）
1 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。
3 10YR4/4 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
4 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
5 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
6 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
7 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
8 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
9 10YR4/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
10 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
11 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
12 10YR4/3 にぶい黄褐色。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色（10YE5/6）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
13 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。焼土粒を少量含む。

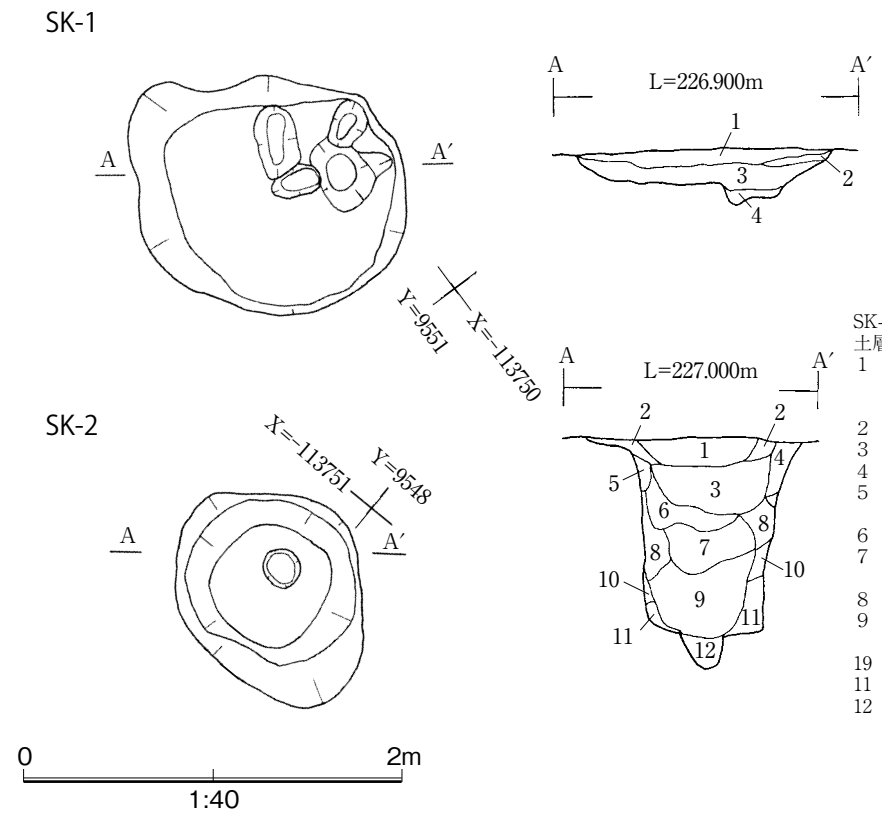




SI-8
土層注記
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性なし。縄文土器片、フレーク、台石を含む。
2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。縄文土器片を多く含む。
3 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。

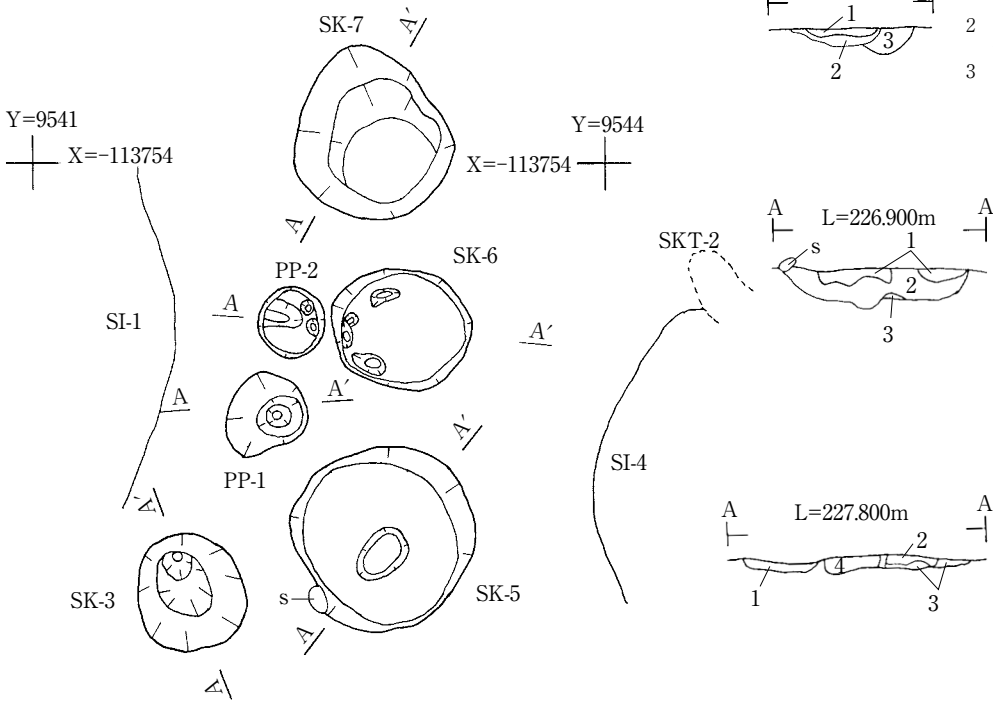
0 2m
1:40

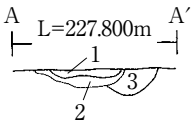
図９ SI-7・8 実測図



SK-1
土層注記
1 10YR5/6 にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性なし。黒褐色(10YR3/2)シルトの小ブロックを全体に、黄褐色粘土質シルトを少量含む。小石も少量含む
2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黒褐色（10YR3/2）の小ブロックを少量含む。
4 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。黄褐色（10YR5/6）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

SK-2
土層注記
1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒、黄褐色（10YR5/6）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。
3 10YR3/2 暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
4 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
5 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘土質シルト。
6 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
7 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。黄褐色（10YR5/6）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
8 10YR4/6 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
19 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
11 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
12 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややあり。粘性あり。

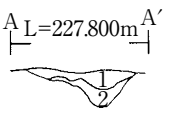




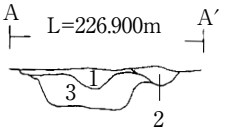
SK-3
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。
2 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。
3 10YR4/4 褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。

SK-5
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ほとんどなし。黄褐色（10YR5/6）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。炭化物粒を全体に少量含む。
3 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。

PP-2, SK-6
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色シルト。しまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
2 10YR2/3 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。
3 10YR3/4 暗褐色シルト。しまっている。粘性なし。炭化物粒を少量含む。
4 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。



PP-1
土層注記
1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。炭化物粒を少量含む。
2 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。



SK-7
土層注記
1 10YR3/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
3 10YR4/6 褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。炭化物粒を全体に少量含む。

図10 SK-1・2・3・5・6・7、PP-1・2 実測図

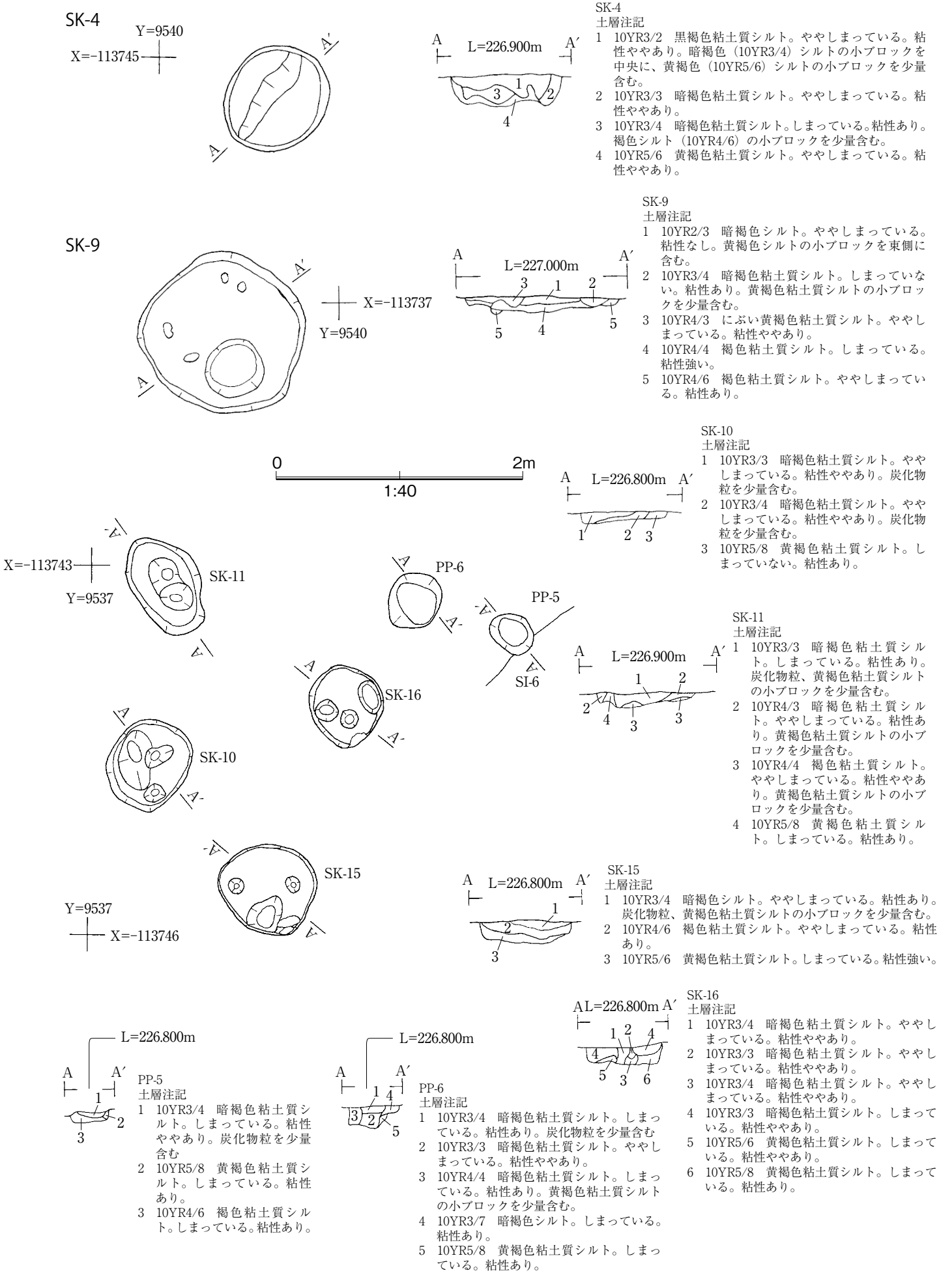


図11 SK-4・9・10・11・15・16、PP-5・6 実測図

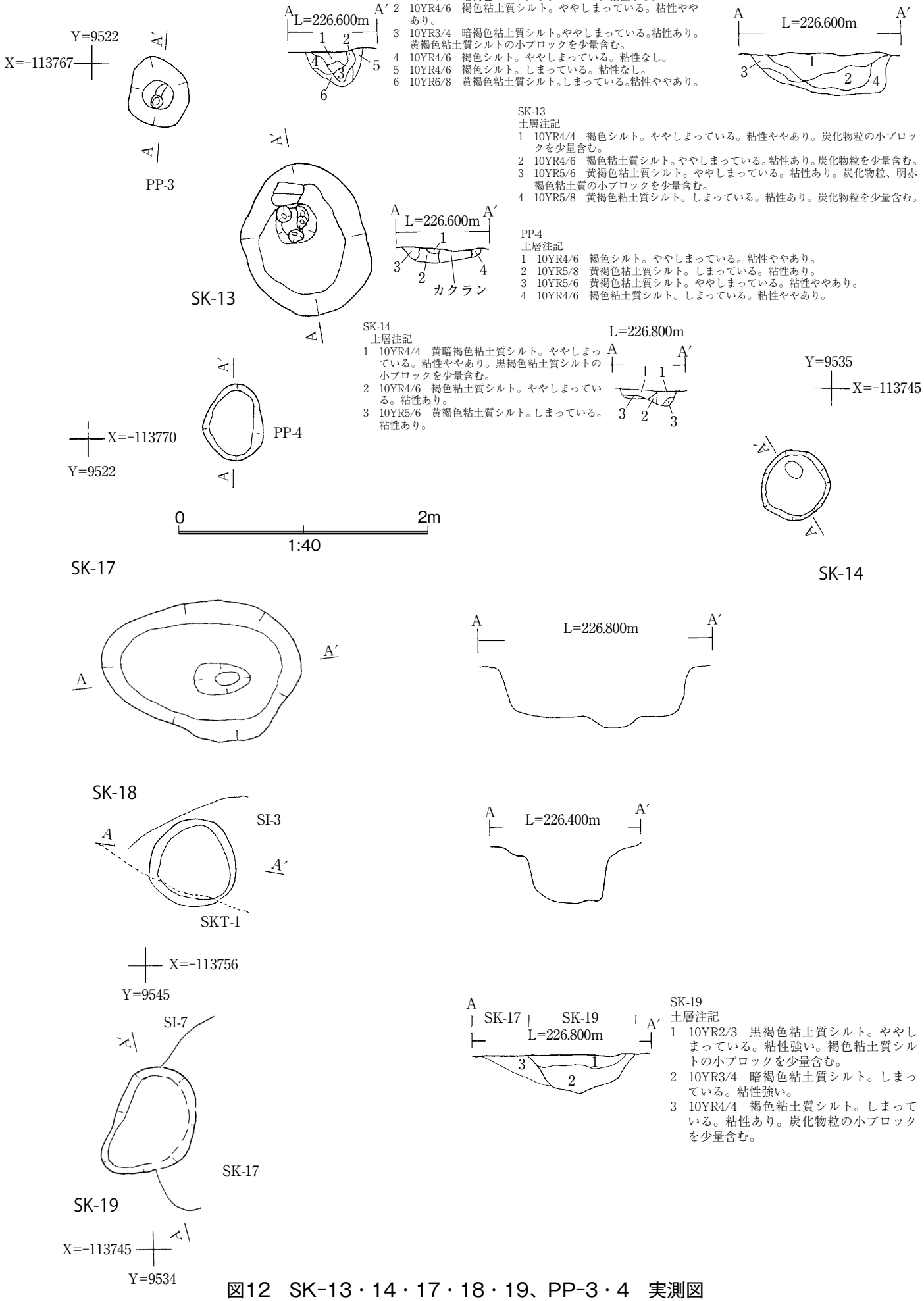
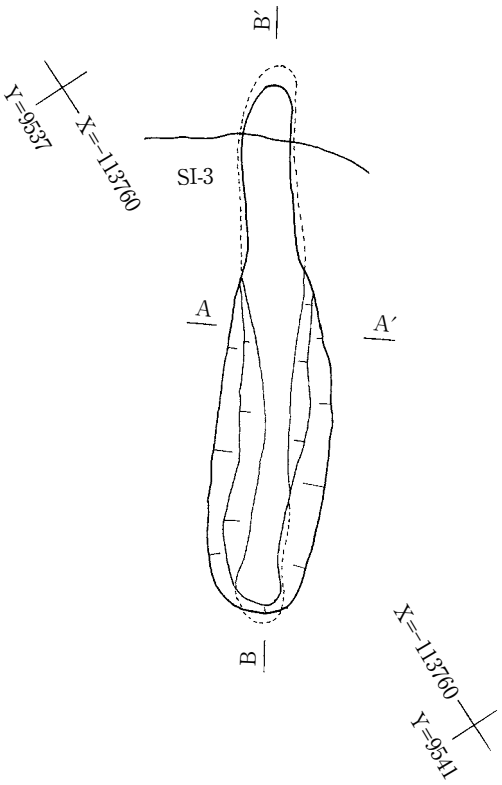
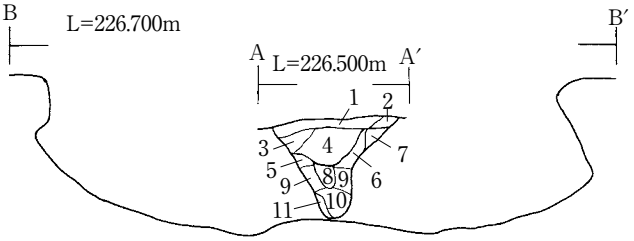


図12 SK-13・14・17・18・19、PP-3・4 実測図

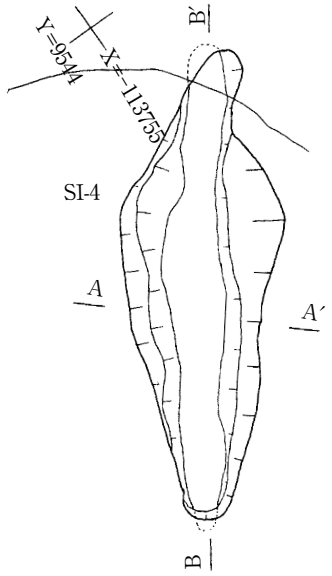
SKT-1

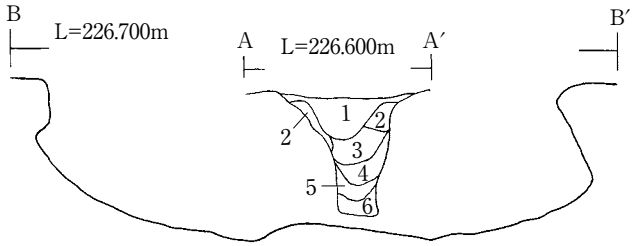




SKT-1
土層注記
1　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。
3　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
4　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。にぶい黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
5　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
7　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
8　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。
9　10YR4/6　褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
10　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性やや強い。
11　10YR6/6　明赤褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。

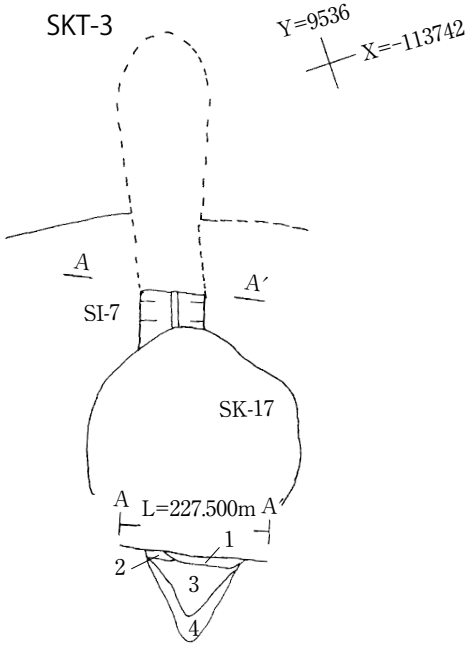
SKT-2





SKT-2
土層注記
1　10YR3/4　暗暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色（10YR5/6）シルトの小ブロックを全体に、炭化物粒を少量含む。
2　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色シルトの小ブロック、炭化物粒を少量含む。
3　10YR4/4　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを多く含む。
4　10YR6/6　明赤褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。かたくしまっている。粘性ややあり。
6　10YR5/6　褐色粘土質シルト。しまっている。粘性強い。

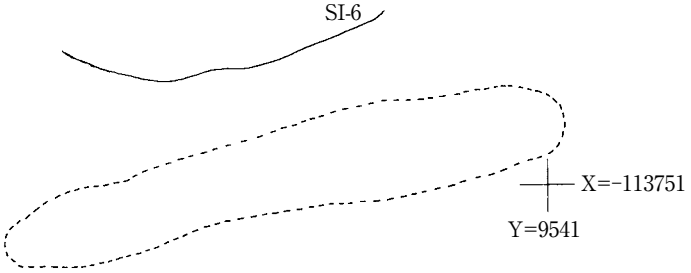
SKT-3
土層注記
1　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒を少量含む。
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性強い。炭化物粒を少量含む。黄褐色パミスを含む。



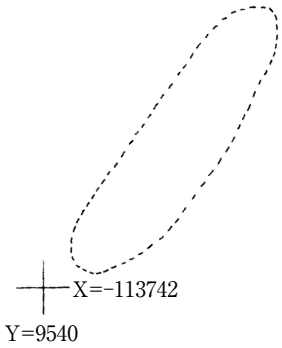
0　2m
1:40

図13　SKT-1・2・3　実測図

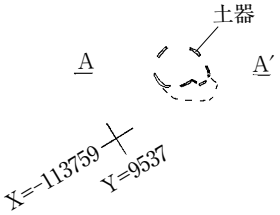
SKT-4



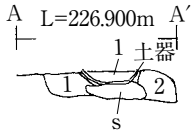
SKT-5



埋設土器 1

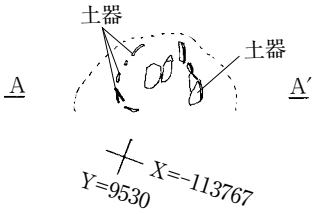


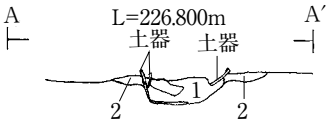
0 2m
1:40



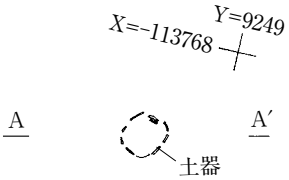
埋設土器 -1
土層注記
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。

埋設土器 2





埋設土器 3



埋設土器 -3
土層注記
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
2　10YR4/4　褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

埋設土器 -2
土層注記
1　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。土器片含む。
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。

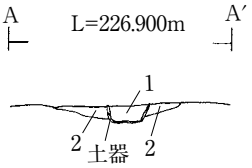


図14　SKT-4・5、埋設土器１・２・３　実測図

4　駒形８－１地点（駒形根神社境内）の調査

調査地点は、平泉野台地の北側斜面の南北に伸びる低位段丘上にあり、一関市厳美町字駒形８－１に所在する（図３）。現白山社の北東約400mにある。標高は約183～184mである。駒形根神社境内を築造する際に、北側にある尾根を削平し造成された平坦地である。

『陸奥国骨寺村絵図』（簡略絵図）では、「骨寺跡」の文字が見え、その東側に９個の礎石が描かれ、「六所宮」が書かれている。調査地点はその周辺にあたるものと考えられる。

今回の調査は、平成18年度に調査された地点の再調査である。平成19年３月発行の報告書に掲載されている「駒形根神社殿等配置及び試掘状況図」をもとに調査範囲を確定して再度、精査したものである。前回の調査で検出された遺構は、円形の落ち込みと７か所のピットで時期は不明のものである。出土遺物は石鏃１点と鋳銭「文久永宝」１点である。

調査期間は令和４年７月４日～７月21日、調査面積は約100㎡である。

調査区（図15）は、拝殿と神楽殿に挟まれた場所を調査区１（グリッド１ａ、１ｂ、２ａ、２ｂ）、拝殿の南東側を調査区２（グリッド２ｄ）とした。土層観察用のベルトを設定し、手掘りで表土を掘り下げ、地山である黄褐色土の上面まで掘り下げ遺構、遺物の検出行った。前回の調査で精査されなかった、調査区１の南側の造成された部分（グリッド２ａ、２ｂ）の精査も行った。

図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基R4-№3　X＝－113518.970、Y＝10025.534、H＝184.509

基R4-№4　X＝－113530.681、Y＝10035.342、H＝183.704

調査の結果、新たな遺構はなく、遺物は、土師器、角釘、銅銭、フレークである。調査終了後、残土を用いて、人力で埋め戻し、現状の回復を行った。

（１）基本土層

調査区１北側は削平されていて表土のみである。南側の造成された土層を記載する。

Ⅰ層：10YR3/3暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。褐色（10YR4/4）シルトの小ブロック、小円礫を少量含む。表土。層厚約10cm。

Ⅱ層：10YR3/2黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。円礫（径10～15cm大）を中心にやや多く含む。層厚約20～30cm。

Ⅲ層：10YR2/2黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。円礫（径15～20cm）を少量含む。層厚約10～20cm。

Ⅳ層：10YR6/6黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。最大径60cm大の円礫などを含む。地山。層厚20cm以上。

（２）確認した遺構と遺物　（図15、16、写真図版16、17、18）

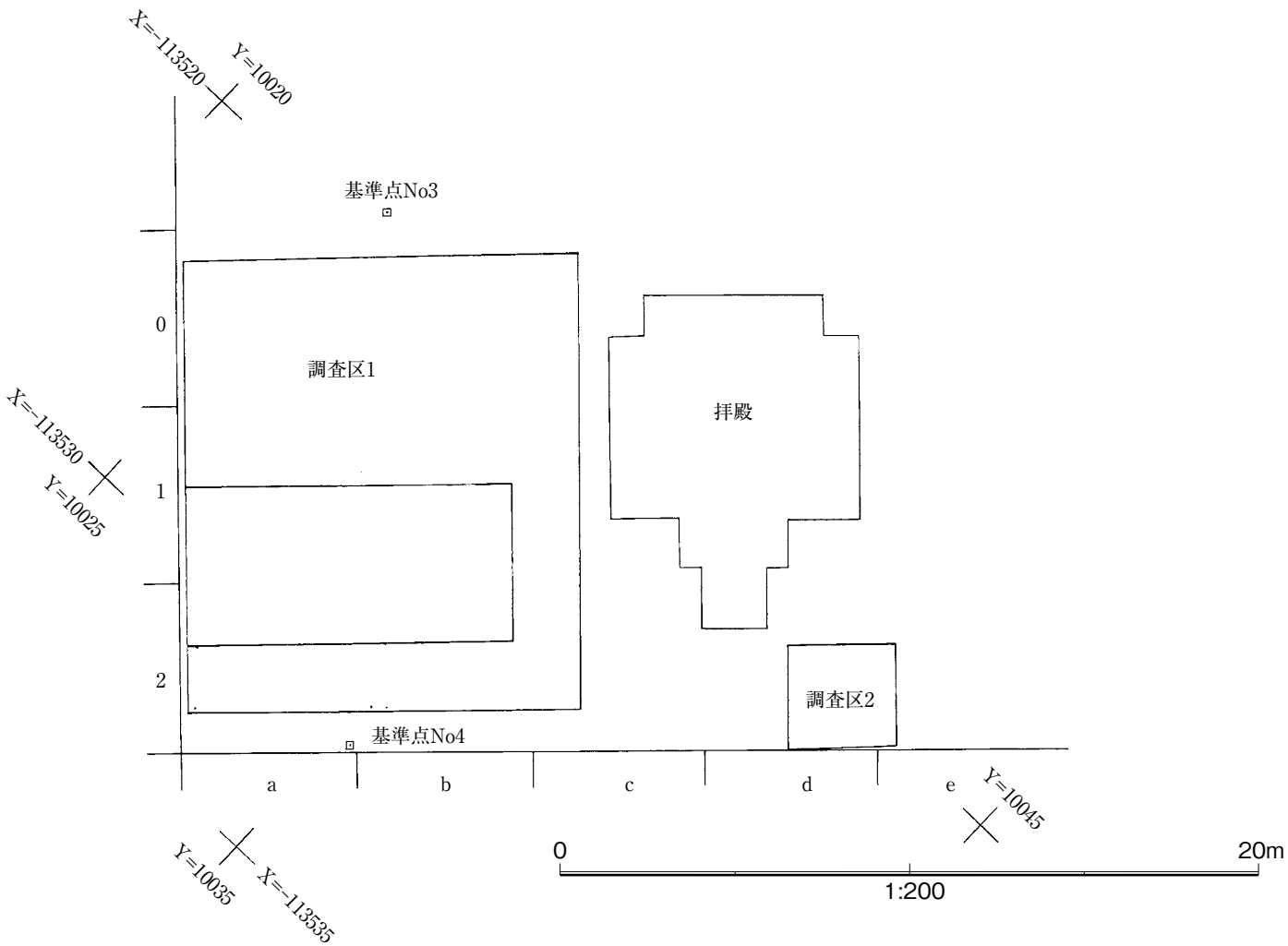
調査区１、調査区２からは、遺構は検出されていない。遺物は、調査区１から土師器片２点（１・２）、角釘１点（３）、調査区２から剥片１点（４）、銅銭１点（５）が出土している。（１）はグリッド２ｂのⅡ層の出土で、土師器坏形土器の体部片である。外面に綾があり、綾上段をヘラナデ、綾下

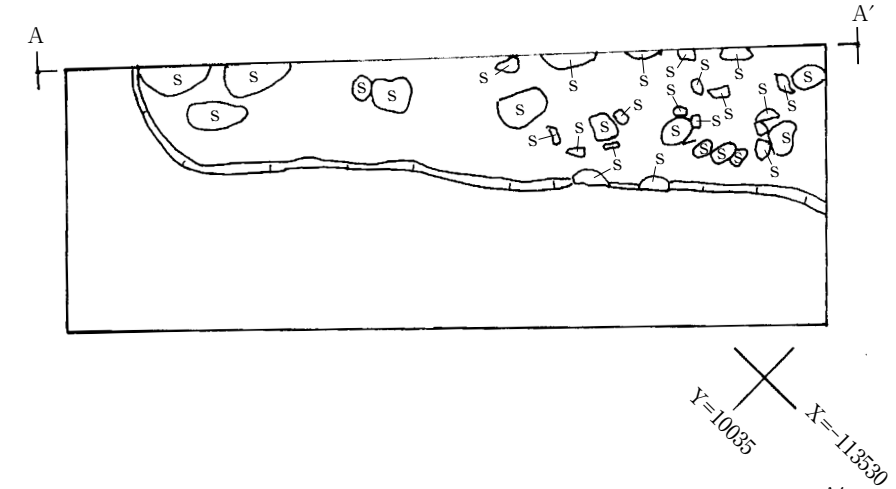
段をヘラケズリで調整されている。内面はヘラナデ、ヘラミガキ後、黒色処理が施されている。後世に加熱を受けており、内面の黒色が消失している。内面に炭化物が付着しており、再利用されていたと推定される。時期は８世紀代に位置づけられる。（２）はグリッド１ｂのⅠ層出土で、土師器甕形土器の体部片である。内外面はヘラナデで調整されている。外面は黒色帯びている。時期については、詳細は不明であるが古代に属するものである。（３）はグリッド２ｂのⅡ層出土で、鉄製の角釘である。先端部は欠損している。横断面は長方形を呈し、縦5.6mm、横8.5mmである。残存長は6.1cmである。釘の先頭部は曲がっている。近世のものと考えられる。（４）はグリッド２ｄのⅡ層出土で、頁岩製のフレークである。長さ7.9cm、幅3.6cm、厚さ1.1cmである。縄文時代のものと考えられる。（５）はグリッド２ｄのⅠ層出土の銅銭である。腐食が激しいが「十銭」の文字が読める。近代に属するものである。

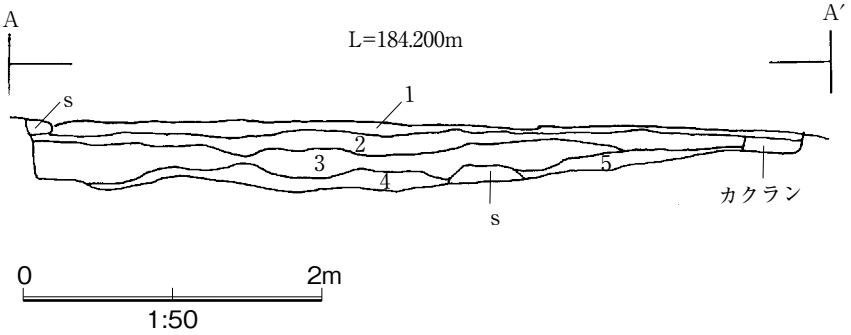
（３）まとめ

駒形根神社及びその周辺は、従来「六所宮」に比定されてきた。今回の調査でも、調査区１の南側と調査区２の東側が盛土されていたことがわかり、地形が改変されてきたことが裏付けられた。古代、中世の遺跡であったとしても、遺構の存在を確認する可能性は低いと考えられる。しかし、調査区１南側の盛土から８世紀代の土師器坏形土器の体部片が出土した。今までの確認調査では、古代では９世紀代の土師器、須恵器が最も古かった。今回の調査により、胆沢城が設置される以前に人々が住んでいた可能性が高くなったと考えられ、その意義は大きい。来年度以降も、継続的に発掘調査を実施したいと考えている。

（光井）







土層注記（A-A′）

1　10YR6/8　明赤褐色粘土質シルト。しまっている。粘性なし。径５～15cm の礫をやや多く含む。盛土、整地層。

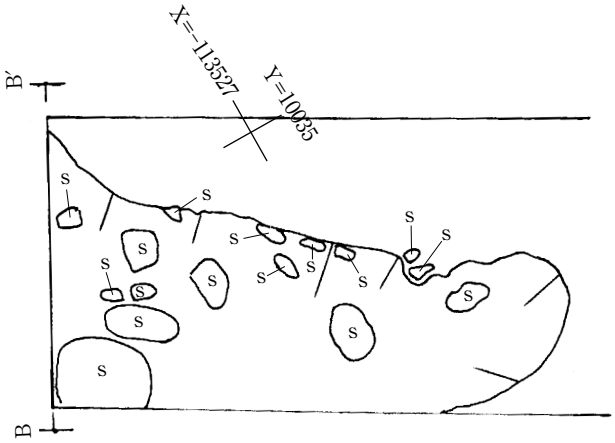
2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。かたくしまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

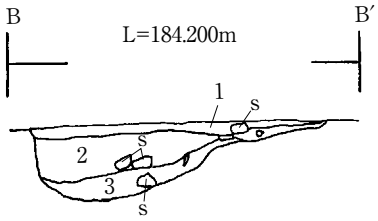
3　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。

4　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。礫を少量含む。

5　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性強い。川原石を多く含む。

図15　駒形根神社平面図、グリッド2a・2b平面図、土層断面図

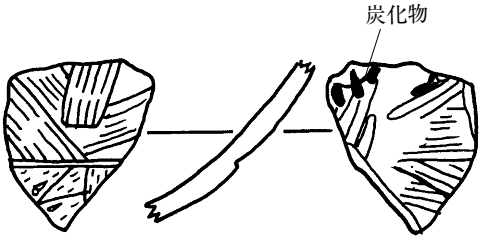




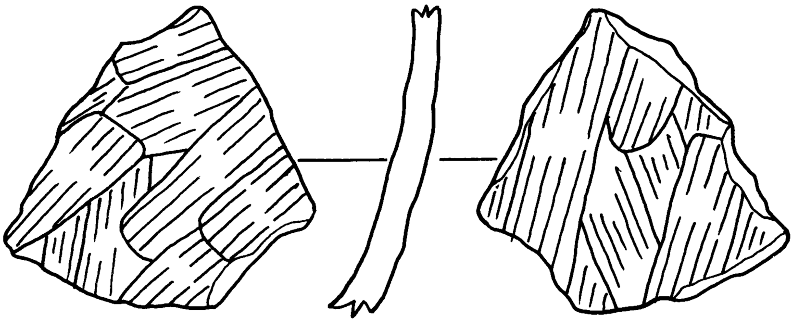
土層注記（B-B′）
1　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。川原石を少量含む。褐色(10YR4/4)シルトの小ブロックを含む。盛土。
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。径 10 ～ 15cm 大の礫をやや多く含む。
3　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。径 10 ～ 15cm 大の川原石を少量含む。

0　2m
1:50

出土遺物 No1



出土遺物 No2



0　4cm
1:1

図16　駒形根神社グリッド2b平面図、土層断面図、駒形根神社出土遺物実測図

5　骨寺村荘園遺跡から出土した黒曜石の原産地推定

佐々木　繁　喜

岩手県一関市厳美町本寺地区にある骨寺村荘園遺跡から出土した黒曜石について、蛍光Ｘ線分析装置による分析を行った。

1　試料と測定条件

測定試料は、一関市教育委員会の発掘調査によって得られた試料で、縄文中期前葉に相当する地層から出土した遺物である。出土した黒曜石は剥片ないし屑片で原礫面を残すものが多く、小さな黒曜石礫を剥離したもので、15点の試料を分析した。

測定は、岩手県一関市にある岩手県南技術研究センターに設置されたブルカー・エイエクスエス社製の上面照射型のM4 TORNADOエネルギー分散型蛍光Ｘ線装置で行った。Ｘ線発生源はロジウム管球、検出器はZr半導体である。径25μmのコリメータを用いて0.5×0.5mmの範囲をマッピングし、カリウム（K），カルシウム（Ca），チタン（Ti），マンガン（Mn），鉄（Fe）、ルビジウム（Rb），ストロンチウム（Sr），イットリウム（Y），ジルコニウム（Zr）などの９元素について測定した。管電圧は50ｋＶ、管電流は400mＡとし、大気雰囲気で測定を行った。測定時間は360秒で、ＲＯＩでバックグラウンドを差し引き、ネット強度により積分強度を求めた。

なお、原石はダイヤモンドカッターで切断し、研磨盤で研磨ののち、ガラス板上で1000、2000、3000番の研磨剤を用いて平滑な面が生じたものを使用した。

2　原石の分析結果

分析結果は、図17～21および表３の通りである。東北地方とその周辺地域から採取したパーライト（黒曜石・真珠岩・松脂岩など）については、青森系（天田内川・大釈迦）、中泊系（折腰内）、岩木山系（出来島・森田）、深浦系Ⅰ（六角沢・八森山・岡崎浜）、男鹿系（金ケ崎・脇本）、田沢湖系Ⅰ・Ⅱ（田沢湖･雫石･折居･花泉）、宮崎系（湯の倉）、色麻系（根岸）、塩竈系（塩竈漁港）、仙台系（秋保）、川崎系（腹帯）、蔵王系（四方峠）、月山系Ⅰ（今野）、月山系Ⅱ（大越沢・田代沢・月山荘）、寒河江系（碁盤森山）、飯豊系（高野）ほかに分類された。

判別はRb分率（Rb強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度））、Sr分率（Sr強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度））、Mn強度×100／Fe強度、log（Fe強度／K強度）を用いた（図18・19）。

また被熱した黒曜石を判別するために、Sr強度×（Sr強度＋Y強度）－Mn強度×100／Fe強度判別図を作成した（図20）。黒曜石が木灰中で熱せられると表面に木灰の成分である融点の低いkやRbなどが付着し、それらの元素の強度が高くなる傾向にあることが実験の結果明らかとなり、これらの元素を除いたものである。

さらに、遺物が風化を受けているかどうか検定するために、風化を受けると強度が相対的に高くなる傾向にあるTiを組み込んだ判別図も作成した。すなわちRb強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）－log（Mn強度/Ti強度）判別図である（図21）。

３　遺物の分析結果および考察

非破壊による分析結果を図18～21および表２に示す。分析した15点すべてが田沢湖系ＩＡと推定された。

岩手県の雫石と奥州市折居、一関市花泉などに分布する秋田県田沢湖付近に由来した田沢湖系の黒曜石は後期旧石器時代から秋田県や岩手県内で利用され、一部は青森県三内丸山遺跡からも検出されている。一関市付近では縄文中期中葉以降一関市花泉産の黒曜石が盛んに利用されたようであるが、中期前葉のものは今回がはじめてである。

ちなみに、一関地域では旧一関市清水遺跡（縄文後期）、旧川崎村河崎の柵擬定地（縄文中期～後期）、旧千厩町清田台遺跡（縄文中期～後期）、旧藤沢町相ノ沢遺跡（縄文後期～晩期）、旧藤沢町上野平遺跡（縄文中期後葉～後期初頭）、旧花泉町下館銅屋遺跡（縄文中期後葉～後期前葉）、旧花泉町石崎貝塚（縄文中期）などの遺跡から出土した黒曜石について蛍光Ｘ線装置による産地推定が行われ 、そのほとんどが田沢湖系のものであることが判明している。そして、遠方の宮城県宮崎系、秋田県男鹿系、山形県月山系、青森県深浦系のものもわずかに発見されている。

４　謝辞

今回の分析にあたって岩手県南技術研究センターの皆さまには大変お世話になりました。心より御礼を申し上げます。

【文献】

佐々木繁喜1997「東北地方の黒曜石」『岩手考古学』第９号　pp.45-83

佐々木繁喜2016「東北地方とその周辺から産出する黒曜岩の蛍光Ｘ線分析と原産地推定」
『岩手考古学』第27号　pp.1-18

表２　試料の各指標値および原産地判定

試料番号	採取年月日	遺物名	出土地点	層　位	大きさ(cm)	重量(g)	特徴	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log (Fe/K)	Sr*100/(Sr+Y)	log (Mn/Ti)	判　定
1	220530	剥　片	SI-1Q3	埋土下部	2.05×1.09×0.64	1.2	黒色半透明・円礫	22.360	4.367	21.864	0.818	64.761	0.169	田沢湖系IA
2	220601	剥　片	SI-1Q4	埋土下部	1.02×0.72×0.24	0.2	黒色半透明	22.763	4.614	21.410	0.802	62.658	0.205	田沢湖系IA
3	220601	剥　片	SI-1Q4	埋土下部	1.71×0.75×0.23	0.3	黒色半透明	21.389	4.237	22.412	0.823	67.131	0.120	田沢湖系IA
4	220601	剥　片	SI-1Q4	埋土下部	2.24×1.45×0.37	1.1	黒色半透明・円礫	21.877	4.181	21.756	0.844	64.575	0.126	田沢湖系IA
5	220615	剥　片	SI-1N1	床面直上	1.51×0.90×0.55	0.6	黒色半透明	22.265	4.613	20.638	0.801	62.244	0.211	田沢湖系IA
6	220622	剥　片	SK-13	埋土	3.07×2.44×0.71	4.2	黒色半透明・円礫	23.184	4.588	20.548	0.784	61.866	0.188	田沢湖系IA
7	220622	剥　片	SK-13	埋土	3.05×2.13×0.79	5.2	黒色半透明・円礫	21.947	4.160	22.376	0.837	67.795	0.126	田沢湖系IA
8	220622	剥　片	SK-13	埋土	2.08×1.30×0.83	2.0	黒色半透明	23.309	4.425	21.079	0.794	64.181	0.162	田沢湖系IA
9	220509	剥　片	5h	埋土	1.63×1.33×0.46	0.9	黒色半透明	23.083	4.688	22.066	0.778	62.443	0.197	田沢湖系IA
10	220509	剥　片	5h	Ⅱ　層	2.10×0.71×0.54	0.5	黒色半透明・円礫	20.689	4.373	22.966	0.811	66.936	0.130	田沢湖系IA
11	220512	剥　片	2e	Ⅱ　層	3.12×1.92×1.04	6.0	黒色不透明・角礫	22.091	4.257	23.378	0.830	66.430	0.133	田沢湖系IA
12	220516	剥　片	3k	Ⅱ　層	2.53×2.33×1.07	5.4	黒色不透明・円礫	21.995	4.057	23.404	0.835	67.272	0.093	田沢湖系IA
13	220519	剥　片	5h	Ⅱ　層	1.59×1.44×1.02	1.9	黒色半透明・円礫	22.933	4.454	22.372	0.821	65.519	0.173	田沢湖系IA
14	220511	剥　片	3d	Ⅱ　層	1.87×1.63×0.95	2.9	黒色不透明・円礫	22.730	4.089	24.017	0.838	67.489	0.110	田沢湖系IA
15	220602	剥　片	SI-5Q3	埋土下部	2.96×2.90×1.07	9.4	黒色不透明・亜角礫	22.497	4.295	23.998	0.809	68.168	0.119	田沢湖系IA

Rb分率はRb×100/(Rb+Sr+Y+Zr),　Sr分率はSr×100/(Rb+Sr+Y+Zr) を示す

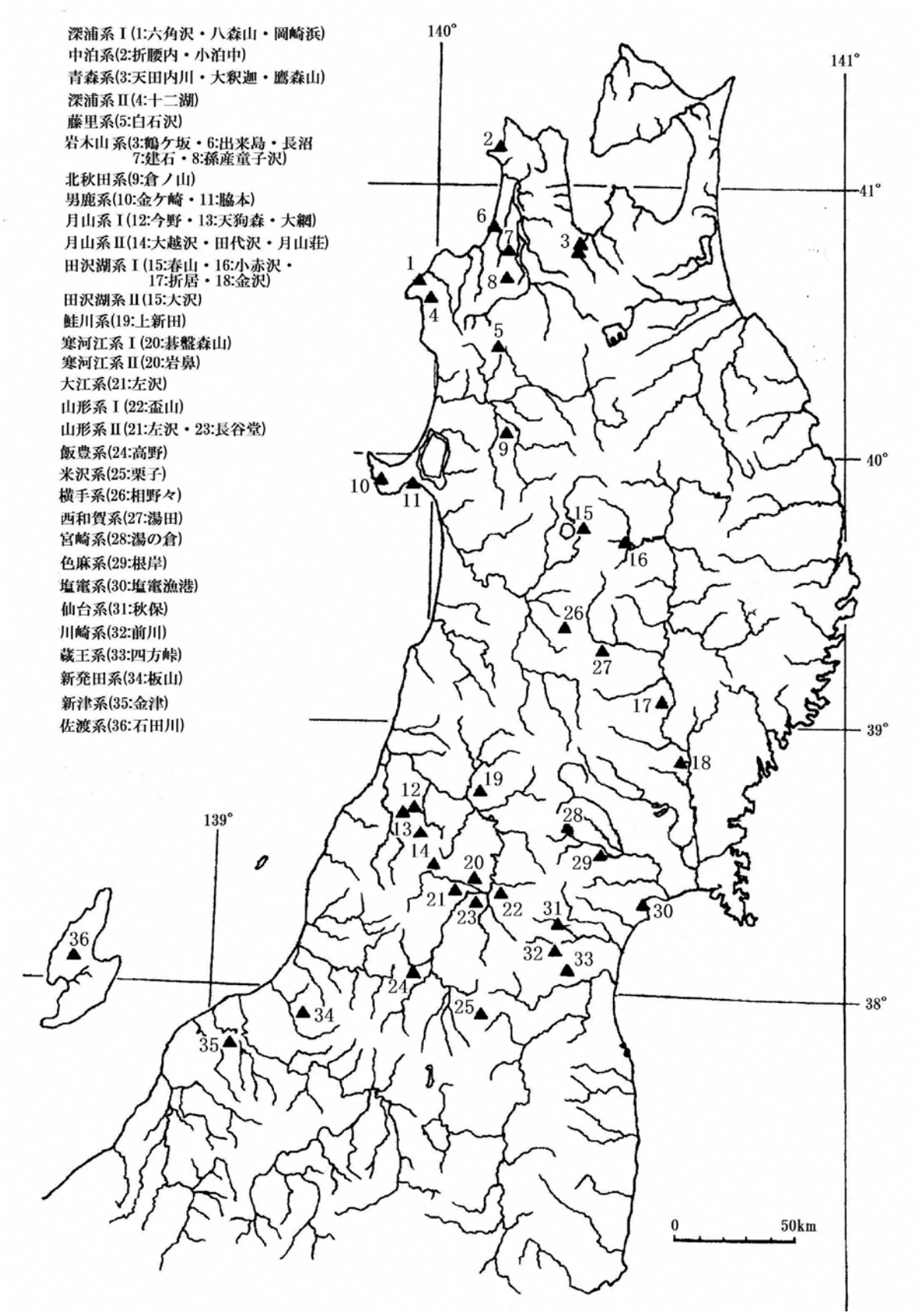


図17　パーライトの分布

表３　パーライト判別群と原石採取地

系	群　類	県　名	原石採取地（測定点数）
深　浦　系	Ⅰ	青　森	深浦市岡崎浜（10），六角沢（10），八森山（5）
中　泊　系			中泊町小泊折腰内（5），中泊町小泊中学校（3）※１
青　森　系	A		青森市天田内川（5），鷹森山（5）
	B		青森市大釈迦（3）
深　浦　系	Ⅱ		深浦市十二湖（5）※１
藤　里　系		秋　田	藤里町白石沢（2）※１
岩木山系		青　森	つがる市出来島（10），長沼（5），森田（5），孫産童子沢（5）
北秋田系		秋　田	北秋田市米内沢町倉ノ山（5）※１
男　鹿　系	A		男鹿市金ケ崎（20），脇本第一小学校（20）
	B		男鹿市脇本第一小学校（4）
月　山　系	ⅠA	山　形	鶴岡市今野（7），天狗森（10）
	ⅠB		鶴岡市ガラス山（5），今野（3），大網牧場（4）
	Ⅱ		西川町大越沢（5），田代沢（5），月山荘（5）
田沢湖系	ⅠA	秋　田	田沢湖町春山（5），岩手県雫石町小赤沢（5），岩手県奥州市水沢折居（5），岩手県一関市花泉金沢（5），岩手県一関市花泉日形（5）
	ⅠB		岩手県奥州市水沢折居（1），岩手県一関市花泉金沢（2），岩手県一関市花泉日形（1）
	Ⅱ		田沢湖町大沢（4）
鮭　川　系		山　形	鮭川村上新田（3）
山　形　系	Ⅰ		山形市盃山（4）
	Ⅱ		山形市長谷堂（5）※１
寒河江系	Ⅰ		寒河江市碁盤森山（20）
	Ⅱ		寒河江市島岩鼻（1）
大　江　系			大江町左沢（1）
飯　豊　系	A		飯豊町高野（20）
	B		飯豊町高野（2）
米　沢　系	A		米沢市栗子（5）※１
	B		米沢市栗子（2）※１
横　手　系		秋　田	横手市山内相野々（4）※１，岩手県一関市花泉日形（1）
西和賀系		岩　手	西和賀町湯田（1）※１
宮　崎　系		宮　城	加美町宮崎湯の倉露頭（5），道端（15）
色　麻　系			色麻町根岸（20）
仙　台　系	A		仙台市秋保芋生（21），仙台市秋保芋生露頭（5），村田町谷山（2），蔵王町塩沢（2）
	B		仙台市秋保芋生（10）
塩　竈　系			塩竈市塩竈漁港（20）※２
川　崎　系			川崎町前川腹帯（20）
蔵　王　系			蔵王町四方峠（13），蔵王町塩沢（2）

注　※１は真珠岩、※２はガラス質安山岩、その他は黒曜石を示す。

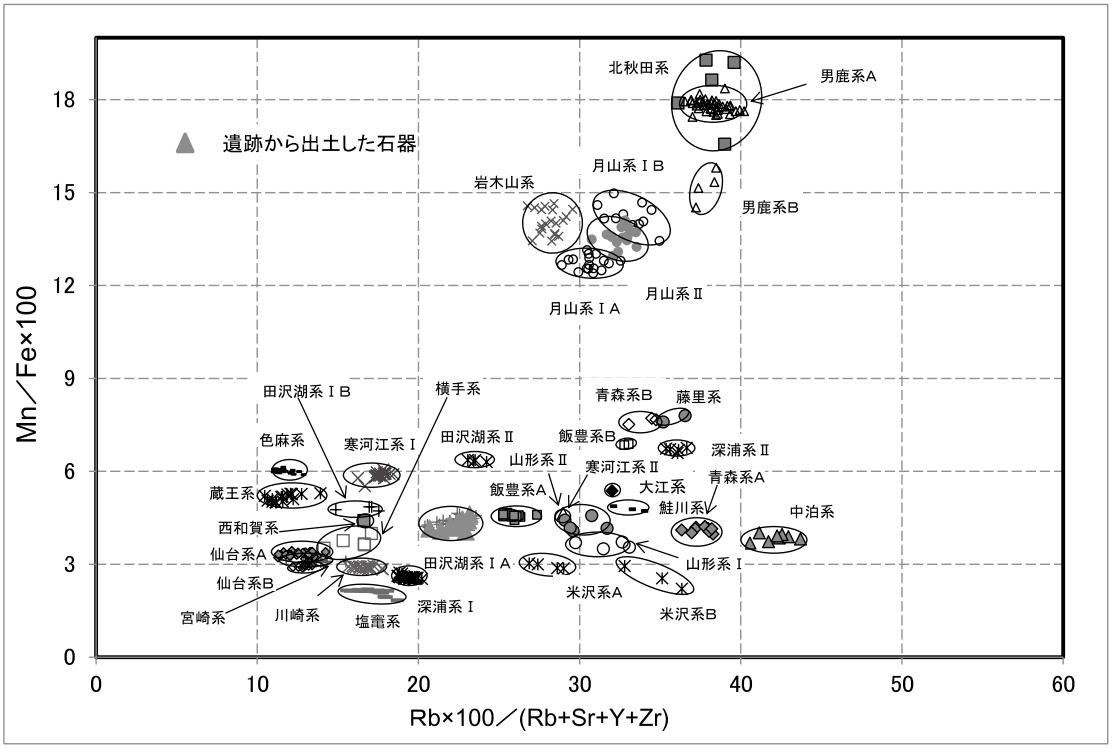


図18　東北のパーライトの判別図（１）　Rb分率

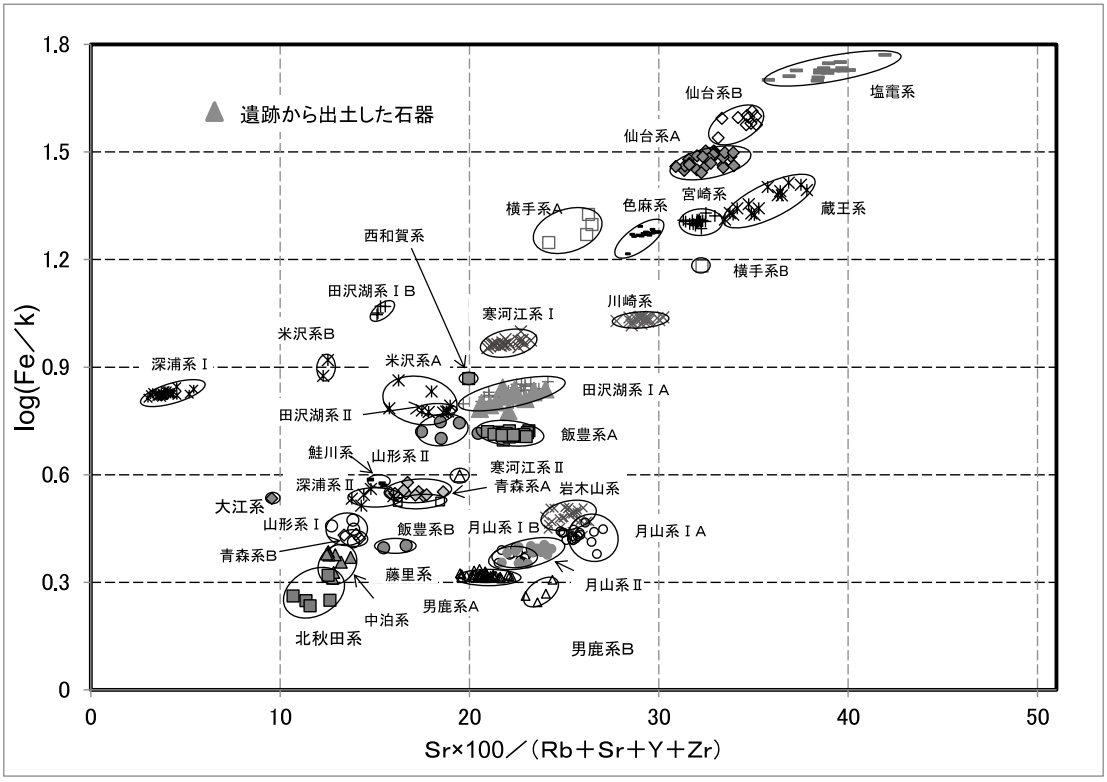


図19　東北のパーライトの判別図（２）　Sr分率

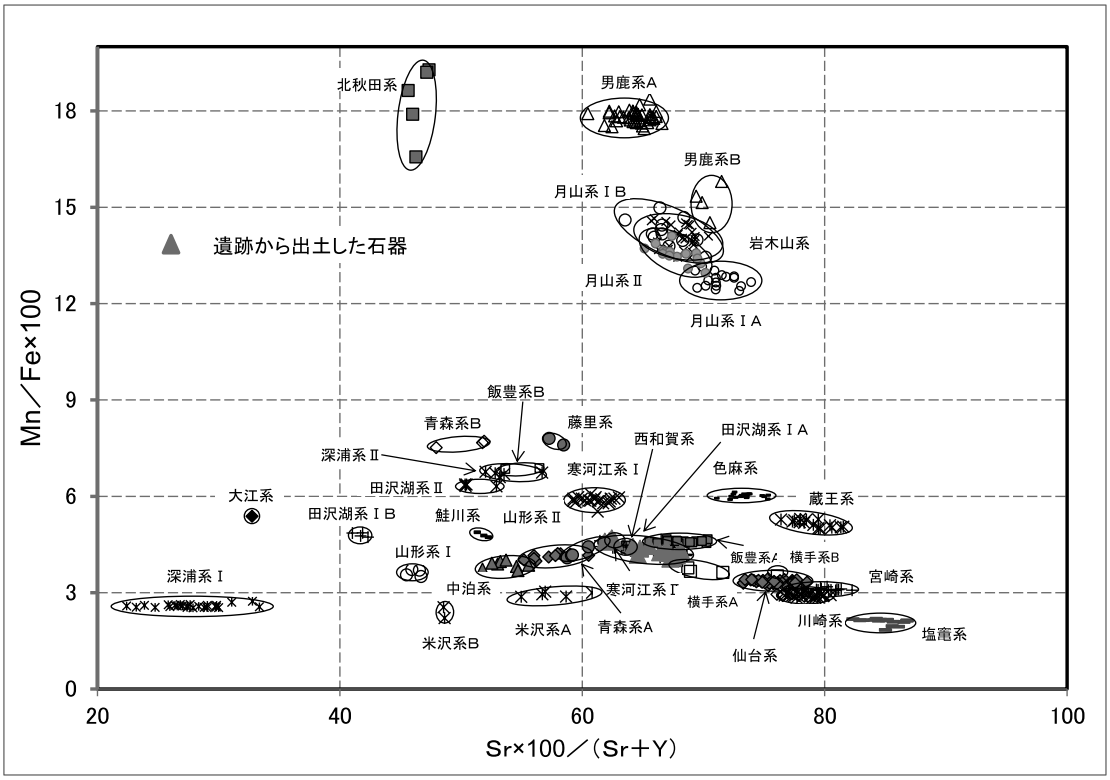


図20　東北のパーライトの判別図（３）　被熱検定

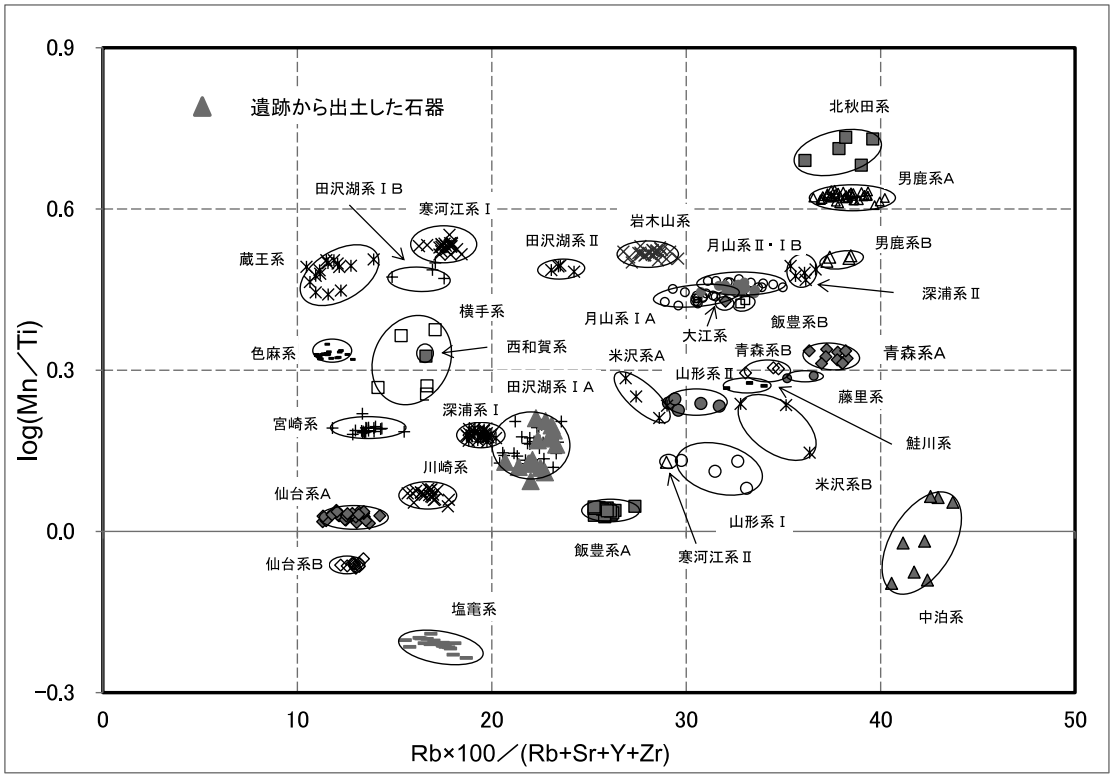
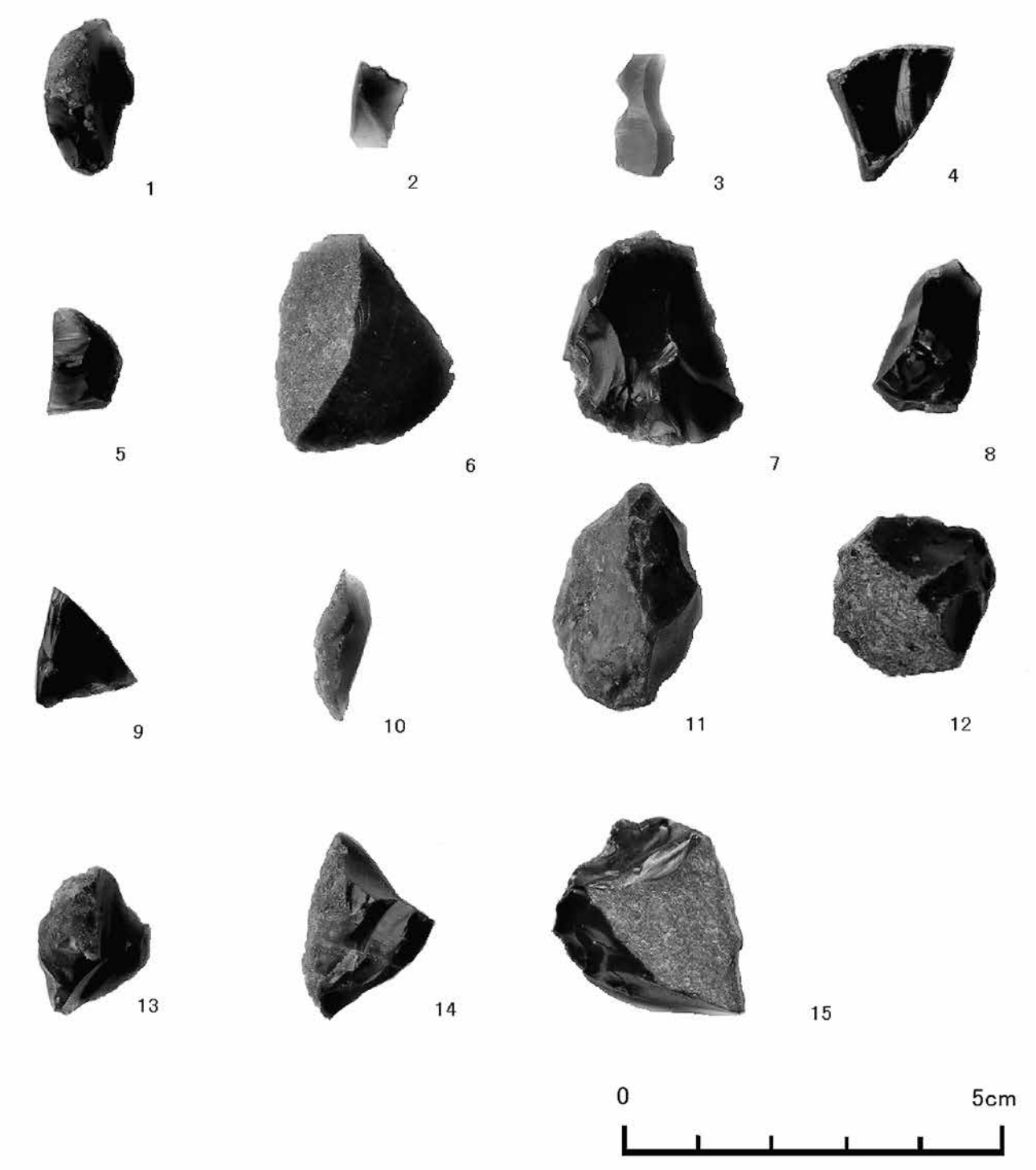


図21　東北のパーライトの判別図（４）　風化検定



出土した黒曜石

6　総括

令和４年度は、白山社及び駒形根神社のうち平泉野台地の最大の平場の南端部（平泉野遺跡）と、駒形根神社境内を調査した。平泉野遺跡では、竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑、落とし穴、柱穴状ピットのほか、縄文土器、石器、石製品、黒曜石を検出した。駒形根神社境内では、８世紀代の土師器坏形土器、近世の角釘、近代の銭貨、現代のガラス片、陶磁器片を検出した。

調査の目的である、「陸奥国骨寺村絵図」にある「骨寺(堂)跡」等の痕跡を確認することはできなかった。しかし、８世紀代の土師器坏形土器の検出は、これまでも土師器片が数点確認されており、骨寺村で水田耕作が開始されたと考えられる10世紀以前にも人の生活があると考えられていたが、今回の調査結果はその考えを補強するものである。

（菅原）

【参考文献】

相原淳一2018「縄文時代前期末葉から中期初頭の土器編年」『東北歴史博物館研究紀要19』

一関市1977『一関市史　第1巻通史』

一関市教育委員会2006『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第1集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2017『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2018『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2019『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2020『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2021『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第32集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

伊藤信1957「辺境在家の成立―中尊寺領陸奥国骨寺村について―」『歴史』第15号　東北史学会

入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか―骨寺村絵図研究の過去・現在・未来（１）―」一関市博物館研究報告第19号

入間田宣夫2021「大日岳社記―駒形根信仰における仏から神への転換をめぐって」一関市博物館研究報告第24号

岩手県教育委員会1980「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅴ―」岩手県文化財調査報告書第54集

大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号

黒田日出男1995「陸奥国中尊寺領骨寺村との対話―描かれた東国の村と境相論―」『描かれた荘園の世界』新人物往来社

島田直明2012「Ⅲ．骨寺村荘園遺跡の植生・植物相―特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

須原拓2009「大木7a式土器にみられる地域性」『紀要』XXⅧ（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

関根達人2009「北奥の一二世紀―堂ヶ平経塚の検討―」『平泉文化研究年報』第９号　岩手県教育委員会

松本博明2011『一関市厳美町本寺の民俗―骨寺村荘園遺跡のくらし―』　一関市教育委員会

土井宣夫2012「Ⅱ．地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館
平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ．一関厳美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班
吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻　地人書房
吉田敏弘2008『絵図と景観が語る　骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森

竪穴住居・竪穴遺構一覧表

№.	遺構名	平面形	規模　（残存長）			備考
			長径（cm）	短径（cm）	壁高（cm）	
1	SI-1	楕円形	308	235	8～20	竪穴住居
2	SI-2	円形	420	(180)	2～8	竪穴住居
3	SI-3	円形	300	272	3～10	竪穴遺構
4	SI-4	円形	255	(238)	3～13	竪穴遺構
5	SI-5	隅丸長方形	235	218	14～23	竪穴遺構
6	SI-6	円形	415	375	5～17	竪穴住居
7	SI-7	不整楕円形	425	276	4～7	竪穴住居
8	SI-8	隅丸長方形	263	161	2～7	竪穴遺構

竪穴住居跡柱穴規模一覧表

№.	遺構名	柱穴番号	規模			備考
			長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	
1	SI-1	P1	20	18	7	
2		P2	28	23	16	
3		P3	30	20	20	
4		P4	20	20	33	
5		P5	20	18	12	
6		P6	18	15	15	
7		P7	33	30	26	
8		P8	25	15	15	
9	SI-2	P1	30	25	8	
10	SI-3	P1	27	20	8	
11		P2	45	40	25	
12		P3	35	35	28	
13		P4	20	20	8	
14	SI-4	P1	31	15	80	
15		P2	45	43	15	
16		P3	30	30	4	
17		P4	35	28	30	
18	SI-5	P1	78	55	11	
19		P2	30	25	46	
20		P3	44	30	16	
21	SI-6	P1	35	35	12	
22		P2	25	24	8	
23		P3	23	19	13	
24		P4	35	33	18	
25		P5	50	40	10	
26		P6	25	16	12	
27		P7	40	32	13	
28		P8	64	18	15	
29		P9	45	42	18	
30		P10	45	45	15	
31		P11	13	13	13	
32		P12	45	45	13	
33	SI-7	P1	28	20	32	
34		P2	26	23	32	
35		P3	37	31	12	
36		P4	18	16	5	
37		P5	23	18	15	
38		P6	25	18	8	
39		P7	13	10	13	
40		P8	63	40	26	
41		P9	45	26	38	
42		P10	20	20	15	
43		P11	23	18	10	
44		P12	29	27	27	
45		P13	38	34	29	

表４－１　竪穴住居・竪穴遺構一覧表

No.	遺構名	柱穴番号	規模			備考
			長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	
46		P14	32	24	9	
47		P15	31	24	12	

土坑一覧表

No.	遺構名	平面形	規模			備考
			長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	
1	SK-1	楕円形	159	140	28	
2	SK-2	円形	128	100	110	※副穴径22cm、深さ18cm
3	SK-3	円形	70	55	16	
4	SK-4	円形	88	78	26	
5	SK-5	円形	100	95	13	
6	SK-6	円形	75	65	8	
7	SK-7	不整楕円形	93	81	25	
8	SK-9	円形	131	128	13	
9	SK-10	楕円形	75	63	9	
10	SK-11	楕円形	87	56	12	
11	SK-13	楕円形	123	98	33	
12	SK-14	円形	58	54	12	
13	SK-15	円形	79	73	18	
14	SK-16	円形	59	57	16	
15	SK-17	楕円形	160	112	47	
16	SK-18	円形	72	68	36	
17	SK-19	楕円形	97	64	32	

※SK-8、12は欠番

柱穴一覧表

No.	遺構名	規模			備考
		長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	
1	PP-1	48	45	8	
2	PP-2	39	38	19	
3	PP-3	59	52	28	
4	PP-4	62	49	12	
5	PP-5	38	30	9	
6	PP-6	50	42	18	

落とし穴一覧表

No.	遺構名	平面形	規模		規模		
			上端（　）は推定値		下端（　）は推定値		
			長径（cm）	短径（cm）	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	SKT-1	溝状	280	49	(292)	10	53
2	SKT-2	溝状	250	87	260	20	85
3	SKT-3	溝状	(300)	110	(300)	45	45
4	SKT-4	溝状	304	40	－	－	－
5	SKT-5	溝状	170	45	－	－	－

表４－２　竪穴住居・竪穴遺構一覧表

No.	出土地点	層位	器種	部位	残存長		特徴	連番	写真図版	備考
					長さ(cm)	厚さ(cm)				
1	SI-1 Q3	埋土下部	深鉢	口縁部	5.2	0.9	口唇：短沈線、隆帯による渦巻状文　口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	1	写真図版12-1	
2	SI-1 Q3	埋土	深鉢	口縁部	3.5	0.7	口唇：隆帯によるS字状・小波状文　口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	2	写真図版12-2	外面炭化物付着
3	SI-1	埋土	深鉢	口縁部	3.6	0.6	口唇：隆帯によるS字状・小波状文　口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	3	写真図版12-3	外面炭化物付着
4	SI-1 Q3	埋土	深鉢	口縁部	3.1	0.6	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	16	写真図版12-4	外面炭化物付着
5	SI-1 Q3	埋土	深鉢	口縁部	3.2	0.8	口唇：縦位の縄文原体押圧文（RL）、口縁：小山形口縁、縦位の縄文原体（RL）を持つ隆帯による弧状文	6	写真図版12-5	
6	SI-1 Q4	埋土	深鉢	口縁部	2.9	0.5	口唇:縦位の縄文原体押圧文（LR）　口縁:縄文（LR）	20	写真図版12-6	
7	SI-1 Q4	埋土	深鉢	口縁部	3.6	0.9	口唇：横位の縄文原体押圧文（LR）　口縁：横位の平行縄文原体押圧文（LR）	5	写真図版12-7	
8	SI-1 Q3	埋土下部	浅鉢	口縁部	3.4	0.7	口縁：刻み目を持つ隆帯による渦巻文、沈線による三角状・弧状文、縄文（LR）	4	写真図版12-8	
9	SI-1 Q3	埋土	深鉢	口縁部	7.3	0.8	口唇：隆帯による渦巻文、肥厚　口縁：沈線による三角状・渦巻文	7	写真図版12-9	
10	SI-1 Q1	埋土	深鉢	口縁部	4.4	0.8	口縁：隆帯による渦巻文	8	写真図版12-10	
11	SI-1 Q1	埋土	深鉢	口縁部	3.9	0.9	口縁：隆帯による渦巻文、山形口縁	14	写真図版12-11	
12	SI-1 Q1	埋土	深鉢	口縁部	3.8	0.7	口唇：ボタン状突起、無文　口縁：円形・平行沈線文、縄文（LR）	13	写真図版12-12	
13	SI-1 Q1	埋土下部	浅鉢	口縁部	4.8	0.7	口縁：無文帯、縄文（LR）	17	写真図版12-13	
14	SI-1 Q3	埋土	深鉢	口縁部	4.7	0.6	口唇：ボタン状突起、無文　口縁：縄文（LR）	9	写真図版12-14	
15	SI-1 Q1	埋土下部	深鉢	口縁部	3.8	0.9	口唇:無文帯　口縁:沈線による平行文、縄文（LR）	18	写真図版12-15	
16	SI-1 Q1	埋土	深鉢	口縁部	4.4	0.6	口唇：無文帯　口縁：粘土紐のはりつけによる弧状文、縄文（LR）	15	写真図版12-16	
17	SI-1 Q2	埋土	深鉢	口縁部	4.7	0.8	口縁：隆帯による平行文、縄文（LR）	21	写真図版12-17	
18	SI-1 Q2	埋土下部	深鉢	口縁部	5.5	0.8	口縁：隆帯による平行文、縄文（LR）	19	写真図版12-18	
19	SI-1 Q3	埋土	深鉢	胴部	3.6	0.8	胴：沈線による弧状文、縄文（LR）	10	写真図版12-19	
20	SI-1 Q3	埋土	深鉢	胴部	5.4	0.8	胴：沈線による弧状文、縄文（LR）	11	写真図版12-20	
21	SI-2 Q2	埋土	深鉢	口縁部	4.6	0.8	口唇：ボタン状突起　口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	22	写真図版12-21	
22	SI-2 Q2	埋土下部	深鉢	口縁部	5.6	0.8	口唇：縦位の縄文原体押圧文（RL）をもつ四角状突起　口縁：隆帯・沈線による弧状文、渦巻文、縄文（LR）	23	写真図版12-22	
23	SI-2	埋土下部	深鉢	口縁部	3.3	0.9	口唇：隆帯による渦巻文　口縁：沈線による渦巻文　内面：黒色処理	24	写真図版12-23	連番28と接合する
24	SI-2 Q2	埋土	深鉢	口縁部	5.4	0.8	口縁:隆帯による弧状突起、山形状口縁、縄文（LR）	26	写真図版12-24	
25	SI-2 Q2	埋土	深鉢	口唇部	3.5	1.0	口唇：隆帯による渦巻状突起	25	写真図版12-25	
26	SI-2 Q2	埋土	深鉢	口縁部	3.0	0.9	口唇：ボタン状突起、無文、山形口縁	27	写真図版12-26	
27	SI-2 Q2	埋土	深鉢	口縁部	3.4	0.8	口唇：隆帯による渦巻文　口縁：沈線による渦巻文　内面：黒色処理	28	写真図版12-27	連番24と接合する
28	SI-2	埋土下部	深鉢	胴部	3.4	0.8	胴：沈線による平行弧状文、縄文（LR）	30	写真図版12-28	
29	SI-3 Q1	埋土	浅鉢	口縁部	4.4	0.9	口縁：横位の縄文原体押圧文（RL）、細い隆帯と縄文原体押圧文（RL）による弧状文	31	写真図版12-29	
30	SI-3 Q3	埋土	深鉢	口唇部	3.9	2.0	口唇：隆帯による弧状文、貫通する刺突文、内面に小突起台形状口縁	32	写真図版12-30	
31	SI-3 Q4	埋土	深鉢	口縁部	4.3	0.7	口唇：対になるボタン状突起　口縁：縄文（LR）	33	写真図版12-31	
32	SI-3 Q2	埋土	深鉢	胴部	3.5	0.5	胴：沈線による弧状文、縄文（LR）	34	写真図版12-32	
33	SI-3 Q2	埋土	深鉢	口縁部	1.4	0.4	口縁：沈線による平行文	35	写真図版12-33	
34	SI-4	埋土	深鉢	口縁部	3.4	0.9	口縁：横位の結節回転縄文（RL）	39	写真図版12-34	
35	SI-3 Q4	埋土	深鉢	胴部	3.1	0.9	胴：横位の結節回転縄文（LR）	37	写真図版12-35	
36	SI-4 Q1	埋土	深鉢	胴部	4.3	1.0	胴：縦位の結節回転縄文（RL）	41	写真図版12-36	
37	SI-3 Q3	埋土	深鉢	胴部	4.0	1.1	胴：縄文（RL）	36	写真図版12-37	
38	SI-4	埋土	深鉢	胴部	3.1	0.6	胴: 縄文(LR)、外面－炭化物付着、内面－黒色処理	38	写真図版12-38	
39	SI-4 Q2	埋土	深鉢	胴部	3.1	1.1	口縁：細い隆帯による貼付文	40	写真図版12-39	
40	SI-5	埋土	深鉢	口縁部	7.9	0.7	口縁：沈線による平行文・山形文、沈線間に縦位、針位の短沈線を充填	48	写真図版12-40	
41	SI-5	埋土下部	深鉢	口縁部	5.7	0.9	口縁：沈線による平行文、縄文（LR）	49	写真図版12-41	
42	SI-5	埋土	深鉢	口縁部	3.7	0.7	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）、縄文（LR）	51	写真図版12-42	
43	SI-5	埋土	深鉢	口縁部	3.9	0.6	口縁：縄文原体押圧文（LR）による区画・弧状文・平行文	45	写真図版12-43	
44	SI-5	埋土下部	深鉢	口縁部	3.8	0.6	口縁:縄文原体押圧文(LR)による平行文、縄文(LR) No43と同一個体	42	写真図版12-44	
45	SI-5	埋土	深鉢	胴部	4.4	0.8	胴：横位の結節回転縄文（LR）	47	写真図版12-45	
46	SI-5	埋土	深鉢	胴部	3.3	0.8	口縁：縦位の結節回転縄文（RL）	46	写真図版12-46	
47	SI-6	埋土下部	深鉢	頸部	6.2	0.8	口縁：外面－隆帯と縄文原体押圧文（LR）による渦巻文、内面－隆帯沈線による渦巻文、T字形口縁	52	12-47a表面、12-47b裏面	
48	SI-6	埋土下部	深鉢	口縁部	7.2	0.7	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）、ボタン状突起、縄文（LR）	55	写真図版12-48	
49	SI-6	炉下部の埋土	深鉢	口縁部	2.7	0.5	口縁：隆帯と縄文原体押圧文（LR）による区画文、弧状文	51	写真図版12-49	地床炉No2
50	SI-6	埋土下部	深鉢	口縁部	6.1	0.7	口縁:隆帯と沈線による弧状文・楕円文、縄文（LR）	56	写真図版12-50	

表５－１　出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部位	残存長		特徴	連番	写真図版	備考
					長さ(cm)	厚さ(cm)				
51	SI-6	埋土下部	深鉢	口縁－胴	5.7	0.9	口縁：隆帯による弧状文、横位と縦位の短沈線を充填、台形状口縁　胴：沈線による弧状文、平行文、縄文（RL）	54	12-51a表面、12-51b裏面	
52	SI-6 Q2	埋土下部	深鉢	口縁部	10.0	11.0	口縁：縄文原体で押圧された隆帯と縄文原体押圧文（RL）により渦巻文、山形口縁	53	12-52a表面、12-52b裏面	
53	SI-7 Q2	埋土	深鉢	口縁部	3.7	1.0	口縁：内外面隆帯による渦巻文	59	写真図版12-53	
54	SI-7 Q2	埋土	深鉢	口縁部	3.6	1.1	口縁：無文帯、縦位による縄文原体押圧文（LR）	58	写真図版12-54	
55	SI-7 Q2	埋土	深鉢	口縁部	3.2	0.7	口縁:平行沈線文を交互刺突文、沈線による波状文、縄文（LR）	57	写真図版12-55	
56	SI-7 Q2	埋土	深鉢	口縁－胴	4.3	0.7	口縁：無文帯、胴：縄文（RL）	60	写真図版12-56	
57	SI-8 Q2	底面直上	深鉢	口縁－胴	4.0	0.6	口唇：縦位の縄文原体押圧文（LR）、口縁：沈線による平行文、胴部：縄文（LR）	68	写真図版12-57	
58	SI-8	埋土下部	深鉢	口唇部	5.0	0.9	側縁が盛り上がる、左下半分、右下端が欠損、板状土偶の可能性あり	65	写真図版12-58	
59	SI-8 Q2	埋土下部	浅鉢	口縁部	4.9	0.6	口縁：隆帯と縄文原体押圧文（LR）による区画文、弧状文、平行文　胴部：縄文原体押圧文（LR）による平行文、縄文（LR）	61	写真図版12-59	
60	SI-8	底面直上	深鉢	口縁－胴	6.2	0.7	口縁:隆帯による渦巻文、弧状文、山形口縁　胴部:沈線による弧状文、渦巻文、縄文（RL）	67	写真図版12-60	
61	SI-8 Q2	底面直上	浅鉢	口縁部	3.1	0.5	口縁：沈線による平行文、内面に炭化物付着	69	写真図版12-61	
62	SI-8 Q2	底面直上	梁鉢	胴部	3.0	0.6	胴：沈線による弧状文、平行文、縄文（LR）	70	写真図版12-62	
63	SI-8	埋土	深鉢	口縁部	4.8	0.7	口縁：沈線による平行文、弧状文	62	写真図版12-63	
64	SI-8	底面直上	深鉢	胴部	7.8	0.7	胴：沈線による渦巻文、縄文（RL）	66	写真図版12-64	No60と同一個体か
65	SI-8	埋土	深鉢	胴部	4.4	1.0	胴：隆帯・沈線による弧状文、縄文（LR）	63	写真図版12-65	
66	SI-8	埋土下部	深鉢	胴部	4.2	0.7	胴：隆帯・沈線による弧状文、縄文（RL）	64	写真図版12-66	
67	SI-8 Q2	埋土下部	深鉢	胴部	4.3	0.8	胴：継位の隆帯による平行文	71	写真図版12-67	
68	SK-1	埋土	深鉢	口縁－胴	6.5	0.9	口縁：隆帯による平行文、無文帯　胴：沈線による弧状文、縄文（RL）	75	写真図版12-68	
69	SK-1	埋土	深鉢	口縁部	3.8	1.0	口縁：ボタン状突起、沈線による波状文	79	写真図版12-69	
70	SK-1	埋土	深鉢	口縁－胴	6.8	1.0	口縁：沈線による三角状文、波状文　胴：沈線文、無文	76	写真図版12-70	
71	SK-1	埋土	深鉢	口縁部	3.7	0.9	口唇：無文帯　口縁：沈線による平行文	74	写真図版12-71	
72	SK-1	埋土	深鉢	胴部	5.1	0.9	胴：沈線による三角状文、弧状文	77	写真図版12-72	
73	SK-1	埋土	深鉢	胴部	2.9	1.0	胴：沈線による三角状文、渦巻文	78	写真図版12-73	
74	SK-3	埋土	浅鉢	口唇部	3.6	0.7	口唇：隆帯による渦巻文、口縁：縄文原体押圧文（LR）による平行文	83	写真図版12-76	
75	SK-3	埋土	深鉢	口縁部	4.0	0.5	口縁：刻み目の持つ隆帯による平行文、縄文（LR）	81	写真図版12-77	
76	SK-3	埋土	深鉢	頸部	5.3	0.5	口縁：縄文（LR）	80	写真図版12-78	
77	SK-3	埋土	深鉢	口縁部	4.4	0.6	口縁：縦位による縄文原体押圧文（LR）	82	写真図版12-79	
78	SK-1	埋土	深鉢	胴部	4.0	1.0	胴：縄文（LR）	84	写真図版12-74	
79	SK-1	埋土	深鉢	胴部	3.7	1.0	胴：縄文（LR）	85	写真図版12-75	
80	SK-5	埋土	深鉢	胴部	4.2	0.6	胴：縄文（LR）	86	写真図版12-80	連番88と接合する
81	SK-5	埋土	深鉢	胴部	3.5	0.6	胴：縄文（LR）	88	写真図版12-81	連番86と接合する
82	SK-5	埋土	深鉢	胴部	2.8	0.8	胴：隆帯・沈線による平行文	87	写真図版12-82	
83	SK-7	埋土下部	深鉢	胴部	9.3	0.9	胴：隆沈線による区画文、渦巻文、縄文（RL）	92	写真図版12-85	
84	SK-7	埋土下部	深鉢	口縁－胴	5.0	0.5	口縁：隆帯による曲線文、縦位の縄文原体押圧文（LR）、小山形口縁　胴：縄文（LR）	91	写真図版12-86	
85	SK-6	埋土	深鉢	胴部	2.5	0.6	胴：縄文（LR）	89	写真図版12-83	
86	SK-7	埋土	深鉢	胴部	2.8	0.5	胴：縄文（LR）	90	写真図版12-84	
87	SK-13	埋土下部	深鉢	口縁部	4.1	0.5	口縁：沈線による平行文、小波状文、平行沈線間を短沈線による鋸歯状文	93	写真図版12-87	
88	SK-13	埋土下部	深鉢	口縁部	4.9	0.6	口縁：沈線による波状文、小波状文	94	写真図版12-88	
89	SK-13	埋土	深鉢	口縁部	5.6	1.1	口縁：刻み目のある隆帯、沈線による平行文	96	写真図版12-89	
90	SK-13	埋土	深鉢	口縁部	3.5	0.8	口縁：沈線による平行文、山形口縁	98	写真図版12-90	
91	SK-13	埋土	深鉢	口縁部	3.6	0.9	口縁：横位の縄文原体押圧文（RL）、肥厚	99	写真図版12-91	
92	SK-13	埋土下部	深鉢	胴部	5.7	0.7	胴：縄文（LR）	95	写真図版12-94	
93	SK-15	埋土	深鉢	口縁部	4.3	0.8	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	101	写真図版12-95	
94	SK-15	埋土	深鉢	口縁部	2.6	1.0	口縁：隆帯による渦巻状突起	102	写真図版12-96	
95	SK-15	埋土	深鉢	胴部	5.1	0.9	胴：隆帯による縦位の弧状文、縄文（RL）	103	写真図版12-97	
96	SK-13	埋土	深鉢	口縁部	4.0	0.7	口縁：刻み目のある隆帯、沈線による平行文、小波状文	97	写真図版12-93	
97	SK-13	埋土	深鉢	胴部	5.5	0.8	胴：縄文（LR）	100	写真図版12-92	
98	SK-16	埋土	深鉢	口縁－胴	8.6	0.7	口縁：隆帯による半円形文、縦位の縄文原体押圧文（LR）　胴：縄文（LR）	104	写真図版13-98	
99	SK-16	埋土	深鉢	口縁部	1.8	0.9	口縁：隆帯による小突起、縦位の縄文原体押圧文（LR）	106	写真図版13-99	
100	SK-16	埋土	深鉢	口縁部	2.8	0.6	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）、縄文（LR）	107	写真図版13-100	
101	SK-16	埋土	深鉢	口縁部	4.0	0.8	口唇：縦位の短沈線、口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	105	写真図版13-101	
102	SKT-3（SI-9）	埋土上部	深鉢	口縁部	5.5	0.8	口縁：ボタン状突起、縦位の縄文原体押圧文	108	写真図版13-102	

表５－２　出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部位	残存長		特徴	連番	写真図版	備考
					長さ(cm)	厚さ(cm)				
103	PP-1	埋土	深鉢	胴部	4.6	0.7	胴：縄文（LR）	109	写真図版13-103	
104	PP-1	埋土	深鉢	胴部	3.3	0.6	胴：縄文（LR）	110	写真図版13-104	
105	PP-3	埋土	深鉢	口縁部	2.1	0.8	口縁：無文	112	写真図版13-105	
106	PP-3	埋土	深鉢	胴部	6.5	1.1	胴：縄文（LR）	111	写真図版13-106	
107	PP-3	埋土	深鉢	口縁部	2.7	0.7	口縁：横位の縄文原体押圧文（LR）	113	写真図版13-107	
108	4e	Ⅱ層	深鉢	口縁部	2.9	0.9	口縁：沈線による平行文、平行沈線間に交互刺突文	外18	写真図版13-108	
109	5f	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	5.2	0.7	口縁：沈線による平行文、平行線間に刺突文　胴：縄文（LR）	外32	写真図版13-109	
110	5i	Ⅱ層	浅鉢	口縁－胴	3.0	0.6	口唇内面：粘土紐による小波状貼付文　口縁：縦位の短沈線文、 胴：無文	外8	写真図版13-110	
111	3i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.2	0.7	口唇：縦位の短沈線、 口縁：無文	外15	写真図版13-111	
112	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.9	0.7	口縁：刺突列と縦位の刺突文（3段）、山形口縁	外26	写真図版13-112	
113	3d	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.6	0.7	口縁：沈線による平行文、小波状文、平行沈線間を短沈線を斜位に充填	外61	写真図版13-113	
114	3j	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.6	1.1	口縁：沈線に平行文，鋸歯状文、縄文（LR）	外4	写真図版13-114	
115	1k	Ⅱ層　下部	深鉢	口縁部	3.6	0.9	口唇:刻み目を付された粘土紐による弧状文　口縁:沈線による平行文、無文帯	外39	写真図版13-115	
116	5h	Ⅱ層	浅鉢	口縁部	3.8	0.6	口唇外面:刻み目を付された粘土紐による小波状文、口唇内面：隆帯と沈線による平行文、口縁：無文帯	外69	写真図版13-116	
117	5h	Ⅱ層	浅鉢	口縁部	2.5	0.6	口唇外面：隆帯による弧状文、刻み目を付した粘土紐による小波紋、口唇内面：粘土紐による弧状・小波状文	外99	写真図版13-117	
118	5j	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.1	0.8	口縁： 縄文原体押圧文（LR） を付された粘土紐による小波状文、縄文（RL）	外87	写真図版13-118	
119	1j	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.2	1.1	口縁：隆帯による小波状文	外33	写真図版13-119	
120	4j	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	5.4	0.7	口縁：指圧文された隆帯を横位に付す　胴：指圧文された隆帯でY字形に縦位に付す、縄文（RL）	外5	写真図版13-120	
121	2j	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	4.1	0.6	口縁：隆帯による弧状文、無文帯　胴：縄文（LR）	外55	写真図版13-121	
122	5e	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.0	0.6	口縁:刻み目をつけられた隆帯による２条の平行文、無文帯	外96	写真図版13-122	
123	4i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.0	0.5	口縁:刻み目をつけた隆帯に横位に付す、縄文（LR）	外65	写真図版13-123	
124	2i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.8	0.8	口縁：刻み目をつけた隆帯に横位に付す、沈線による平行文、無文帯、縄文（LR）	外56	写真図版13-124	
125	4h	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.2	0.9	口唇：粘土紐による小波状文、斜位の縄文原体押圧文（LR）	外6	写真図版13-125	
126	4k	Ⅱ層	深鉢	口唇部	2.8	0.7	口唇：刻み目を付された粘土紐による弧状文、楕円文、口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	外2	写真図版13-126	
127	4k	Ⅱ層	深鉢	口縁部	2.9	0.6	口唇：刻み目をつけた粘土紐による小波状文、肥厚　口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	外21	写真図版13-127	外２と同一個体か
128	4i	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	4.8	0.7	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）、横位の隆帯と縄文原体押圧文（LR）　胴：隆帯を縦位に付す、縄文（RL）	外12	写真図版13-128	
129	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	4.5	0.7	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）、横位に隆帯と縄文原体押圧文（LR）を付す、胴:隆帯による曲線文、内面に炭化物付着	外93	写真図版13-129	
130	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	3.1	0.6	口唇： 楕円状突起、口縁： 縦位の縄文原体押圧文（LR）、横位に隆帯と縄文原体押圧文（LR）を付す	外92b	写真図版13-130	
131	5j	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	6.2	0.8	口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	外67	写真図版13-131	
132	2e	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.9	0.7	口唇：縦位の縄文原体押圧文（LR）　口縁：沈線による平行文、縄文（LR）	外52	写真図版13-132	
133	4d	Ⅱ層	深鉢	口唇部	2.8	0.9	口唇：粘土紐による小波状文、刺突文　口縁：縦位の縄文原体押圧文（LR）	外22	写真図版13-133	
134	4j	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	3.8	0.8	口縁：縄文原体押圧文を付した隆帯（LR）によるV字状突起、縦位の縄文原体押圧文(LR)、胴:縄文(LR)	外35	写真図版13-134	
135	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	4.2	0.8	口縁： 縦位の縄文原体押圧文（LR） をつけた留意による小波状文、山形口縁　胴：縦位に隆帯に付す、沈線による斜行文	外84	写真図版13-135	
136	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	2.8	0.8	口縁：横位２条の縄文原体押圧文（LR）	外110	写真図版13-136	
137	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.2	0.9	口縁：横位２条の縄文原体押圧文（LR）	外95	写真図版13-137	
138	4i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	3.6	0.9	口縁：横位３条の縄文原体押圧文（LR）	外13	写真図版13-138	
139	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	7.1	0.8	口縁:横位２条の縄文原体押圧文（LR）、肥厚　胴:縄文（LR）	外91	写真図版13-139	
140	5j	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	7.1	1.0	口唇： 縦位の縄文原体押圧文（LR） をつけた隆帯を横位に付す、肥厚、口縁－胴：隆帯と縄文原体押圧文（LR）による三角状文、弧状文	外108	写真図版13-140	
141	3c	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.9	1.1	口縁： 環状突起、山形口縁、2条の縄文原体押圧文（LR） をつけた隆帯を口唇部に付す	外63	写真図版13-141	
142	1k	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.9	0.6	口唇:横位の縄文原体押圧文（LR）、T字状突起口縁:隆帯と縄文原体押圧文（LR）による弧状文	外13	写真図版13-142	
143	1k	Ⅱ層　下部	深鉢	口縁部	5.3	0.8	口唇：粘土紐による三角状文、肥厚　口縁：隆帯・沈線による楕円文	外41	写真図版13-143	
144	5h	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.3	0.7	口縁：沈線による2条の平行沈線、縄文（LR）	外71	写真図版13-144	
145	4d	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.1	1.0	口縁:沈線による2条の平行文、山形口縁、縄文（RL）	外7	写真図版13-145	
146	5k	Ⅱ層	深鉢	口縁部	7.6	1.1	口縁:沈線による2条の平行文、沈線による三角状文、結束羽状縄文（LR）	外66	写真図版13-146	
147	4d	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.8	0.6	口縁：指頭圧痕をもつ隆帯と沈線による弧状文	外24	写真図版13-147	

表５－３　出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部位	残存長		特徴	連番	写真図版	備考
					長さ(cm)	厚さ(cm)				
148	3f	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.6	1.4	口縁：隆帯・沈線による弧状文	外112	写真図版13-148	
149	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.7	0.8	口縁：隆帯・沈線による弧状文	外29	写真図版13-149	
150	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.1	0.9	口縁：微隆帯と沈線にいよる楕円文、小山形口縁、肥厚、縄文（LR）	外9	写真図版13-150	
151	2i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.5	0.9	口縁：隆帯を横位に付す、縄文（LR）	外54	写真図版13-151	
152	4g	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.2	0.5	口縁：隆帯を1条横位に付す、隆帯をはさんで2条ごとの沈線による平行文、沈線による斜行文、縄文（LR）	外78	写真図版13-152	
153	5i	Ⅱ層　下部	深鉢	口縁部	4.5	0.7	口唇：刻み目のある隆帯による渦巻文、沈線による楕円文、縄文（LR）	外81	写真図版13-153	
154	5i	Ⅱ層	深鉢	胴部	5.1	0.9	胴：沈線による弧状文、隅丸四角文、縄文（LR）	外85	写真図版13-154	
155	4k	Ⅱ層	深鉢	胴部	6.7	0.7	胴：沈線による楕円文、縄文（LR）	外1	写真図版13-155	
156	5h	Ⅱ層	深鉢	胴部	7.7	0.8	胴：沈線による楕円文、弧状文、縄文（LR）	外90	写真図版13-156	
157	4c	Ⅱ層	深鉢	胴部	4.8	0.9	胴：沈線による楕円文、縄文（LR）、内面に炭化物付着	外31	写真図版13-157	
158	4j	Ⅱ層	深鉢	胴部	9.9	0.6	胴：複数（2～3条）の沈線による渦巻文、直線文	外115	写真図版13-158	
159	5d	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.9	0.8	口縁：頂部に刻み目、沈線による渦巻文、小山形文	外14	写真図版14-159	
160	1k	Ⅱ層　下部	浅鉢	口縁部	4.5	0.7	口縁：隆帯・沈線による渦巻文、弧状文	外40	写真図版14-160	
161	2k	Ⅱ層	浅鉢	口縁部	3.3	0.8	口縁：隆帯による渦巻文、沈線による2条の平行文	外46	写真図版14-161	
162	2k	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.9	0.7	口縁：隆帯による弧状突起	外74	14-162a表面、14-162b裏面	
163	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁－胴	5.8	1.0	口縁外面：隆帯による弧状突起、口縁内面：粘土紐による渦巻文、胴：縦位の縄文原体押圧文（LR）	外101	14-163a表面、14-163b裏面	
164	2i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	4.6	3.1	口唇：刺突文、口縁内側：粘土紐による渦巻文、口縁外側：隆帯による楕円文，孔有	外36	14-164a表面、14-164b裏面	
165	5i	Ⅱ層	深鉢	口縁部	7.0	0.6	口唇:ボタン突起、口縁:横位の結節回転縄文（RL）、沈線による曲線文	外27	写真図版14-165	
166	5h	Ⅱ層	深鉢	口縁部	5.9	0.9	口縁：横位の結節回転縄文（RL）	外68	写真図版14-166	
167	4j	Ⅱ層	深鉢	口縁部	6.4	0.9	口縁：横位の結節回転縄文（RL）	外114	写真図版14-167	
168	5i	Ⅱ層	深鉢	胴部	5.4	0.9	胴：撚糸文	外109	写真図版14-168	
169	2j	Ⅱ層　下部	深鉢	胴部	4.4	0.6	胴：縄文（LR）、外面炭化物付着	外105	写真図版14-169	
170	4d	Ⅱ層	深鉢	胴部	6.8	0.9	胴：縄文（LR）	外106	写真図版14-170	

表５－４　出土土器観察表

No.	遺構名	層　位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	仮番号	写真図版	備　考
1	SI-1（Q2）	埋土下部	石匙	6.70	1.44	0.46	5.60	頁岩	S1	写真図版14-206	
2	SI-2	床面	削器	9.38	3.77	0.97	36.10	頁岩	S2	写真図版14-208	
3	SI-1（Q3）	埋土下部	フレーク	2.05	1.09	0.64	1.20	黒耀石	資1	写真図版14-216	
4	SI-1（Q4）	埋土下部	フレーク	1.02	0.72	0.24	0.20	黒耀石	資2	写真図版14-217	
5	SI-1（Q4）	埋土下部	フレーク	1.71	0.75	0.23	0.30	黒耀石	資3	写真図版14-218	
6	SI-1（Q4）	埋土下部	フレーク	2.25	1.45	0.37	1.10	黒耀石	資4	写真図版14-219	
7	SI-1	床面直上	フレーク	1.51	0.90	0.55	0.60	黒耀石	資5	写真図版14-220	
8	SI-5　Q2	埋土下部	石匙	3.68	2.82	0.53	5.80	頁岩	S3	写真図版14-202	
9	SI-5（Q2）	埋土下部	石篦	4.13	3.27	0.52	10.30	頁岩	S4	写真図版14-210	
10	SI-5（Q2）	埋土下部	石核	2.87	2.66	1.05	9.50	黒耀石	S16	出土した黒曜石15	
11	SI-7（Q1）	埋土下部	石匙	7.73	3.94	0.91	25.00	頁岩	S5	写真図版14-207	
12	SI-8	埋土下部	石匙	2.61	1.64	0.31	1.20	頁岩	S6	写真図版14-201	
13	SK-13	埋土	フレーク	3.07	2.44	0.71	4.2	黒耀石	資6	写真図版14-221	
14	SK-13	埋土	フレーク	3.05	2.13	0.79	5.2	黒耀石	資7	写真図版14-222	
15	SK-13	埋土	フレーク	2.08	1.30	0.83	2.0	黒耀石	資8	写真図版14-223	
16	5g	Ⅱ層	石鏃	1.58	1.70	0.27	0.60	頁岩	S8	写真図版14-204	
17	3e	Ⅱ層	石篦	5.10	3.35	1.42	29.90	頁岩	S7	写真図版14-211	
18	2i	Ⅱ層	石篦	7.16	3.70	1.60	47.30	頁岩	S9	写真図版14-213	
19	2i	Ⅱ層	石匙	4.85	2.30	0.70	8.10	頁岩	S10	写真図版14-203	
20	3i	Ⅱ層	石篦	6.54	4.05	1.35	31.30	頁岩	S11	写真図版14-212	
21	5i	Ⅱ層	石匙	5.70	2.08	0.71	9.70	頁岩	S12	写真図版14-205	
22	5h	Ⅱ層	フレーク	1.63	1.33	0.46	0.90	黒耀石	資9	写真図版14-224	
23	5h	Ⅱ層	フレーク	2.10	0.71	0.54	0.50	黒耀石	資10	写真図版14-225	
24	2c	Ⅱ層	フレーク	3.12	1.92	1.04	6.00	黒耀石	資11	写真図版14-226	
25	3k	Ⅱ層	フレーク	2.53	2.33	1.07	5.40	黒耀石	資12	写真図版14-227	
26	5h	Ⅱ層	フレーク	1.59	1.44	1.02	1.90	黒耀石	資13	写真図版14-228	
27	3d	Ⅱ層	フレーク	1.87	1.63	0.95	2.90	黒耀石	資14	写真図版14-229	
28	5i	Ⅱ層	磨製石斧	6.36	4.21	1.17	48.10	流紋岩	S13	写真図版14-214	
29	2k	Ⅱ層下部	石篦	3.99	2.02	1.41	14.00	頁岩	S14	写真図版14-209	
30	1i	埋土下部	石製品	8.48	6.39	2.18	82.40	ガラス質安山岩	S15	写真図版14-215	
31	SI-1（Q2）	埋土最下部	台石	16.7	11.0	6.9	1.6	デイサイト質凝灰岩	1	写真図版15-268	
32	SI-1	床面	台石	15.8	9.2	5.6	1.0	砂岩	20	写真図版15-269	
33	SI-1（Q4）	埋土下部	磨石	8.3	9.0	3.6	0.3	デイサイト質凝灰岩	19	写真図版15-270	
34	SI-2（Q2）	埋土下部	台石	11.8	10.2	4.4	0.4	デイサイト質凝灰岩	14	写真図版15-271	
35	SI-2（No3）	床面	凹石	12.6	9.3	4.8	0.3	デイサイト質凝灰岩	13	写真図版15-272	
36	SI-2（No2）	床面	台石	7.9	11.8	4.6	0.3	デイサイト質凝灰岩	12	写真図版15-273	
37	SI-2（No4）	床面	擦石	11.8	10.9	5.2	0.3	デイサイト質凝灰岩	15	写真図版15-274	
38	SI-2（No1）	床面	台石	12.8	9.2	4.6	0.3	デイサイト質凝灰岩	16	写真図版15-275	
39	SI-2（Q2）	埋土下部	台石	19.8	10.5	4.8	1.1	デイサイト質凝灰岩	11	写真図版15-276	
40	SI-3	床面	擦石	10.8	7.7	4.1	0.3	デイサイト質凝灰岩	18	写真図版15-277	
41	SI-5（No4）	埋土下部	磨石	10.0	10.4	6.7	0.9	デイサイト質凝灰岩	6	写真図版15-278	
42	SI-5（Q1）	埋土下部	磨石	8.5	6.2	5.1	0.4	デイサイト質凝灰岩	9	写真図版15-279	
43	SI-5（No3）	埋土下部	磨石	12.3	8.6	6.4	0.8	デイサイト質凝灰岩	7	写真図版15-280	
44	SI-5（No6）	底面	磨石	10.6	8.7	5.1	0.6	デイサイト質凝灰岩	5	写真図版15-281	
45	SI-5（No7）	底面	磨石	11.9	8.9	7.7	0.7	砂岩	8	写真図版15-282	
46	SI-5（Q2）	埋土下部	擦石	14.8	6.4	3.7	1.0	デイサイト質凝灰岩	3	写真図版15-283	
47	SI-5（No2）	底面	擦石	24.9	7.9	4.5	0.6	デイサイト質凝灰岩	4	写真図版15-284	
48	SI-5（No2）	底面	擦石	23.2	6.7	4.5	1.2	デイサイト質凝灰岩	2	写真図版15-285	
49	SI-5（No5）	埋土下部	台石	13.1	15.7	7.1	2.3	デイサイト質凝灰岩	10	写真図版15-286	

表６－１　出土石製品・石器一覧表

No.	遺構名	層　位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石　材	仮番号	写真図版	備考
50	SI-6（S7）	埋土下部	凹石	6.7	5.3	4.1	0.2	デイサイト質凝灰岩	45	写真図版15-287	
51	SI-6（S3）	埋土下部	凹石	10.5	6.6	4.7	0.4	デイサイト質凝灰岩	43	写真図版15-288	
52	SI-6（S4）	埋土下部	凹石	11.0	7.7	3.4	0.4	デイサイト質凝灰岩	40	写真図版15-289	
53	SI-6	床面	擦石	10.6	5.4	5.3	0.4	デイサイト質凝灰岩	23	写真図版15-290	
54	SI-6	埋土下部	擦石	19.3	7.0	5.9	1.4	デイサイト質凝灰岩	22	写真図版15-294	
55	SI-6（S5）	埋土下部	擦石	17.2	8.1	4.8	0.8	デイサイト質凝灰岩	41	写真図版15-291	
56	SI-6（Q2）	埋土下部	擦石	14.4	7.1	4.6	0.7	デイサイト質凝灰岩	21	写真図版15-292	
57	SI-6	埋土下部	磨石	14.7	9.5	6.2	1.3	デイサイト質凝灰岩	42	写真図版15-293	
58	SI-8（No5）	埋土下部	擦石	11.6	7.2	2.1	0.2	細粒砂岩	33	写真図版15-295	
59	SI-5（No2）	床面	擦石	22.6	6.7	4.7	1.2	デイサイト質凝灰岩	2	写真図版15-296	
60	SI-6　Q2	埋土下部	擦石	14.4	7.1	4.6	0.7	デイサイト質凝灰岩	26	写真図版15-297	
61	SI-8（No6）	埋土下部	台石	23.9	14.8	3.9	2.4	デイサイト質凝灰岩	28	写真図版15-298	
62	SI-8（No1）	埋土下部	台石	33.2	28.8	7.8	9.2	デイサイト質凝灰岩	148		
63	SI-8（No2）	埋土下部	台石	38.9	30.7	10.9	18.0	デイサイト質凝灰岩	146		
64	SK-1	埋土下部	凹石	12.1	6.5	3.3	0.3	デイサイト質凝灰岩	38	写真図版16-295	
65	1g	Ⅱ層	擦石	12.5	5.0	3.3	0.2	デイサイト質凝灰岩	34	写真図版16-300	
66	SK-5	埋土	擦石	13.1	6.9	3.2	0.4	デイサイト質凝灰岩	32	写真図版16-302	
67	SK-15	埋土	擦石	11.9	8.2	4.2	0.6	デイサイト質凝灰岩	47	写真図版16-301	
68	SK-15	埋土	凹石	19.1	13.5	7.7	2.5	デイサイト質凝灰岩	48	写真図版16-304	
69	3c	Ⅱ層	台石	28.7	22.5	11.0	11.6	デイサイト質凝灰岩	147	写真図版16-297	
70	4j	Ⅱ層	台石	26.8	24.5	8.9	10.1	デイサイト質凝灰岩	145	写真図版16-298	
71	2k	Ⅱ層	台石	54.5	26.6	13.5	34.1	デイサイト質凝灰岩	144	写真図版16-305	
72	1j	Ⅱ層	台石	6.4	5.5	5.0	0.3	デイサイト質凝灰岩	37	写真図版16-299	
73	1g	Ⅱ層	擦石	11.1	8.5	3.0	0.3	デイサイト質凝灰岩	31	写真図版16-292	
74	1j	Ⅱ層	擦石	13.4	10.0	4.7	1.0	デイサイト質凝灰岩	39	写真図版16-296	
75	SI-5（No1）	底面	擦石	15.1	6.7	3.7	0.6	デイサイト質凝灰岩	4		
76	1j	Ⅰ層	擦石	10.8	7.2	3.8	0.4	デイサイト質凝灰岩	62	写真図版14-230	
77	5i	Ⅱ層	擦石	8.6	7.4	6.7	0.6	デイサイト質凝灰岩	70	写真図版14-231	
78	4d	Ⅱ層	擦石	8.0	5.9	3.3	0.1	デイサイト質凝灰岩	106	写真図版14-232	
79	4d	Ⅱ層	擦石	8.6	6.2	3.9	0.2	デイサイト質凝灰岩	105	写真図版14-233	
80	3h	Ⅱ層	擦石	13.7	6.6	2.3	0.4	緑色凝灰岩	117	写真図版14-234	
81	2g	Ⅱ層下部	擦石	6.6	6.5	3.8	0.2	デイサイト質凝灰岩	133	写真図版14-235	
82	4k	Ⅱ層	擦石	9.7	7.2	3.6	0.3	デイサイト質凝灰岩	104	写真図版14-236	
83	1i	Ⅱ層	擦石	9.3	7.5	5.1	0.5	デイサイト質凝灰岩	51	写真図版14-237	
84	1c	Ⅱ層下部	擦石	11.6	9.3	5.7	0.9	デイサイト質凝灰岩	52	写真図版14-238	
85	3i	Ⅱ層	擦石	6.7	6.1	5.4	0.2	デイサイト質凝灰岩	135	写真図版14-236	
86	2k	Ⅱ層	擦石	15.1	8.4	5.8	1.1	デイサイト質凝灰岩	119	写真図版14-237	
87	1j（No6）	Ⅱ層	擦石	11.8	8.6	5.1	0.7	デイサイト質凝灰岩	59b	写真図版14-241	
88	4i	Ⅱ層	擦石	8.2	5.7	3.6	0.2	デイサイト質凝灰岩	93	写真図版14-242	
89	1i	Ⅱ層埋土	磨石	12.9	8.6	6.0	0.9	デイサイト質凝灰岩	27	写真図版16-293	
90	1e	Ⅱ層	磨石	8.8	7.7	5.0	0.5	デイサイト質凝灰岩	60	写真図版15-243	
91	1e	Ⅱ層	磨石	4.4	5.1	4.2	0.1	デイサイト質凝灰岩	55	写真図版15-244	
92	4i	Ⅱ層	磨石	9.6	6.8	4.1	0.4	デイサイト質凝灰岩	103	写真図版15-246	
93	5i	Ⅱ層	磨石	6.9	6.2	6.1	0.3	デイサイト質凝灰岩	76	写真図版15-247	
94	2g	Ⅱ層	磨石	8.8	5	2.7	0.3	デイサイト質凝灰岩	123	写真図版15-245	
95	3c	Ⅱ層	磨石	12.9	10.3	6.1	1.1	砂岩	127	写真図版15-248	
96	SI-1（Q4）	埋土下部	磨石	8.3	9.0	3.6	0.3	デイサイト質凝灰岩	19	写真図版15-249	
97	4c	Ⅱ層	磨石	11.0	7.3	5.4	0.6	デイサイト質凝灰岩	108	写真図版15-250	
98	4d	Ⅱ層	磨石	12.2	9.9	4.8	0.8	デイサイト質凝灰岩	107	写真図版15-251	

表６－２　出土石製品・石器一覧表

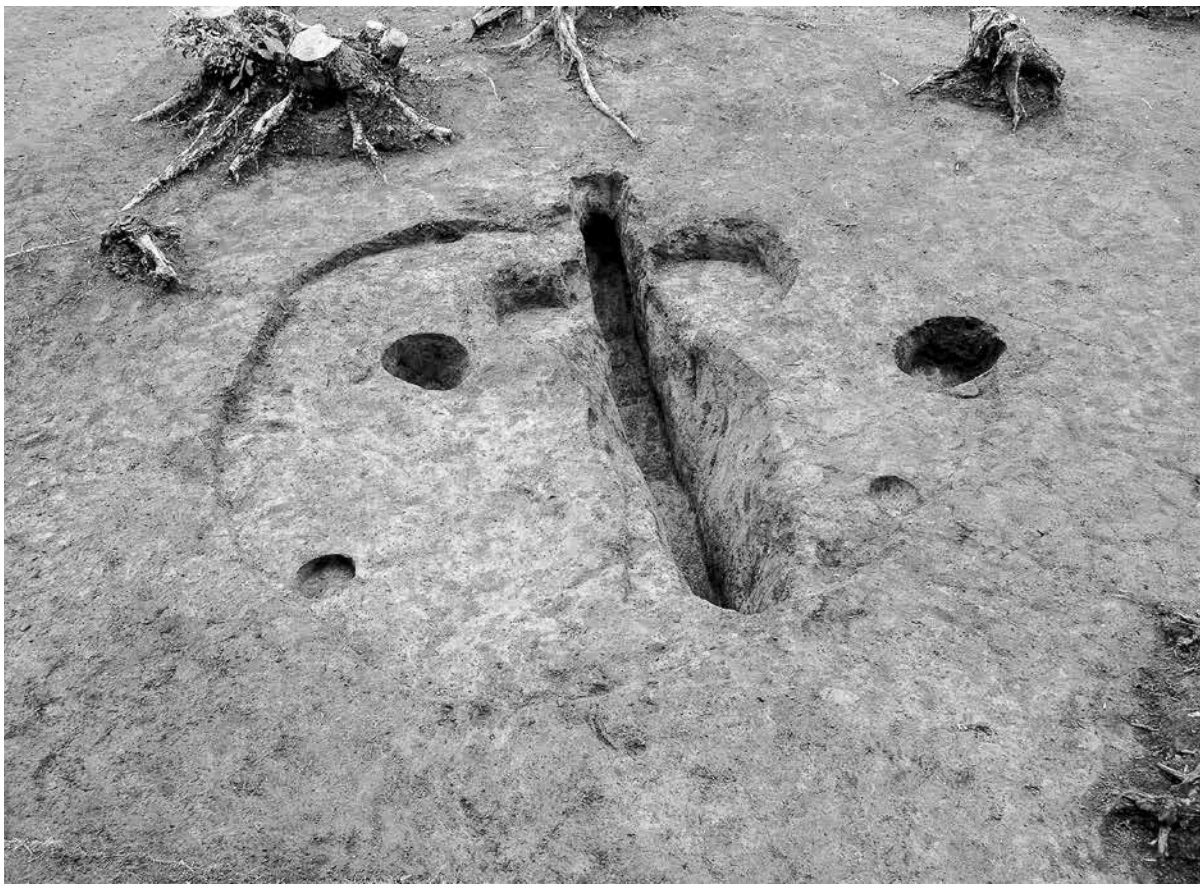
No.	遺構名	層　位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石　材	仮番号	写真図版	備考
99	2g	Ⅱ層	凹石	12.2	7.8	4.7	0.7	デイサイト質凝灰岩	128	写真図版15-252	
100	3d	Ⅱ層	凹石	10.5	7.8	5.0	0.5	デイサイト質凝灰岩	120	写真図版15-253	
101	3i	Ⅱ層最下部	凹石	10.9	7.8	3.9	0.4	デイサイト質凝灰岩	134	写真図版15-254	
102	1i	Ⅱ層	凹石	9.1	8.0	5.7	0.5	デイサイト質凝灰岩	143	写真図版15-255	写真図版15-294と同じ
103	3c	Ⅱ層	凹石	8.8	7.0	3.6	0.3	デイサイト質凝灰岩	121	写真図版15-257	
104	4i	Ⅱ層	凹石	12.1	7.9	6.1	0.7	デイサイト質凝灰岩	102	写真図版15-259	
105	5h	Ⅱ層	凹石	8.8	7.7	4.4	0.4	デイサイト質凝灰岩	74	写真図版15-260	
106	4j	Ⅱ層	凹石	12.6	10.5	6.6	1.1	デイサイト質凝灰岩	89	写真図版15-256	
107	4d	Ⅱ層	凹石	9.9	7.1	3.3	0.2	デイサイト質凝灰岩	92	写真図版15-258	
108	4d	Ⅱ層	凹石	11.1	9.4	5.3	0.8	ガラス質安山岩	88	写真図版15-261	
109	1j	Ⅱ層	台石	14.8	11.4	2.2	0.7	デイサイト溶結凝灰岩	49	写真図版15-262	
110	2j	Ⅱ層	台石	14.1	8.7	6.9	1.0	デイサイト質凝灰岩	126	写真図版15-263	
111	1j	Ⅱ層	台石	19.7	12.6	5.1	1.6	デイサイト質凝灰岩	56	写真図版15-264	
112	1j	Ⅰ層	台石	20.8	12.3	5.2	2.0	デイサイト質凝灰岩	59a	写真図版15-265	
113	3d	Ⅱ層	台石	19.9	6.4	4.4	0.9	デイサイト溶結凝灰岩	116	写真図版15-266	
114	5h	Ⅱ層	台石	14.9	8.7	6.0	1.1	デイサイト質凝灰岩	77	写真図版15-267	
115	1g	Ⅰ層	台石	26.8	16	7.8	4.8	デイサイト質凝灰岩	129		
116	3i	Ⅱ層	台石	19.2	14.9	8.7	3.8	デイサイト質凝灰岩	111		
117	4j	Ⅱ層	台石	16.9	11.6	5.1	1.4	緑色凝灰岩	101a		

※中新統　厳美層新第三系

表６－３　出土石製品・石器一覧表

１　SI-1　完掘状況　（南から）

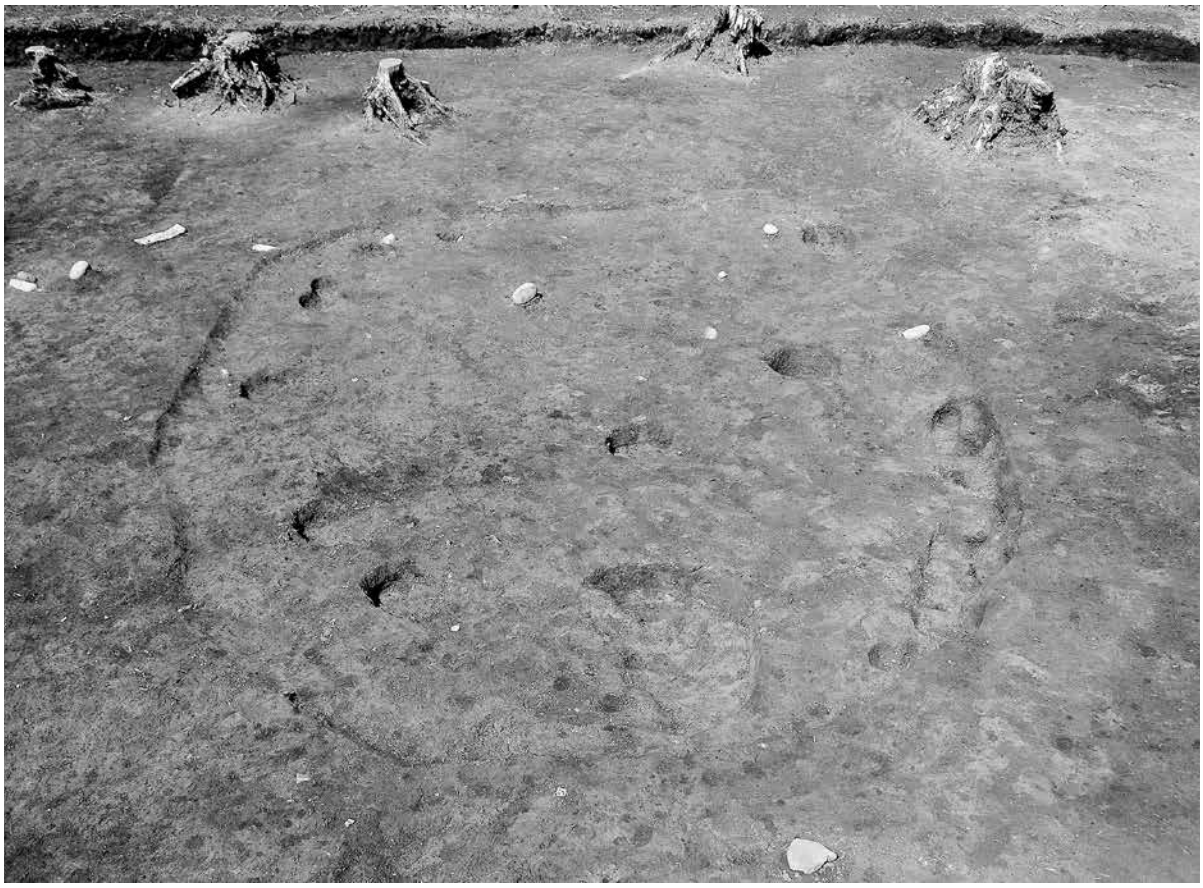
２　SI-2　完掘、埋土断面（西から）



1　SI-3・SKT-1　完掘状況　（南から）

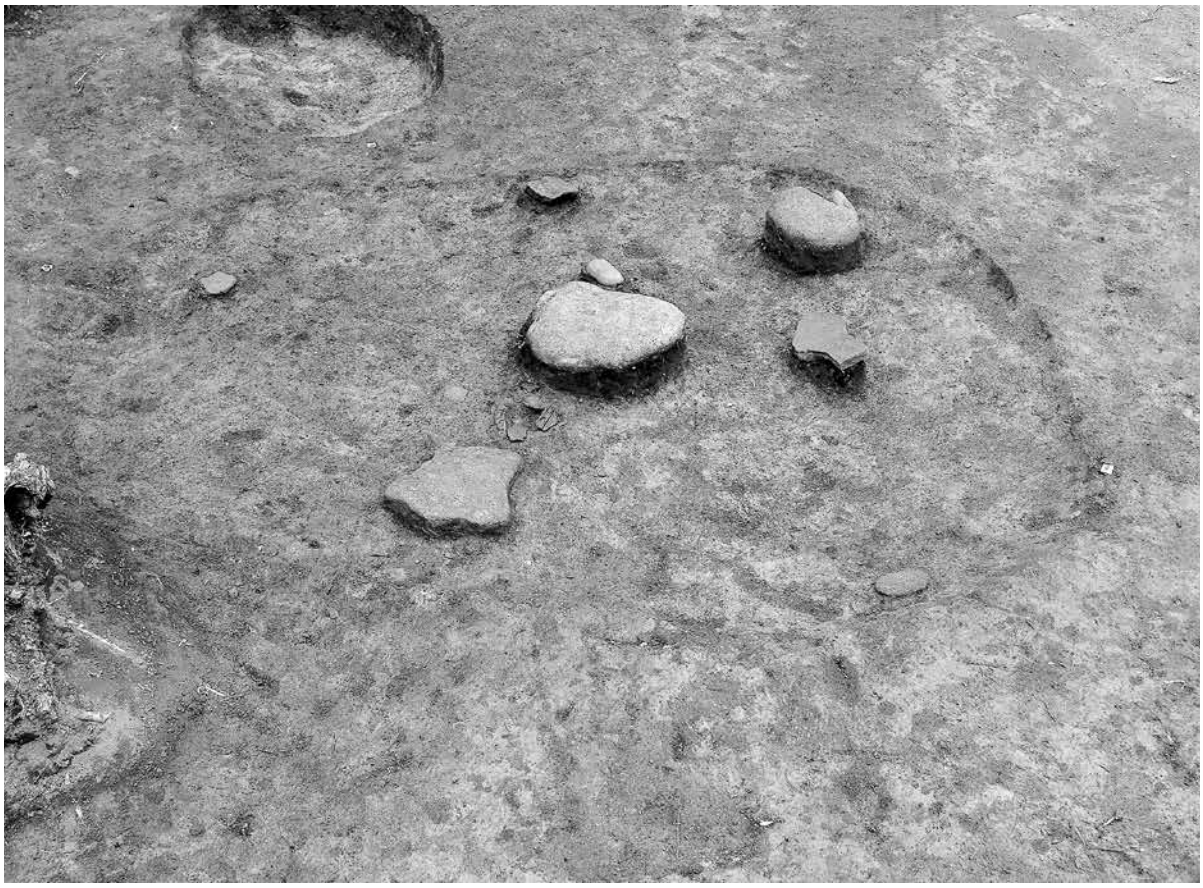
2　SI-4　完掘状況（南から）

１　SI-5　完掘状況　（南から）

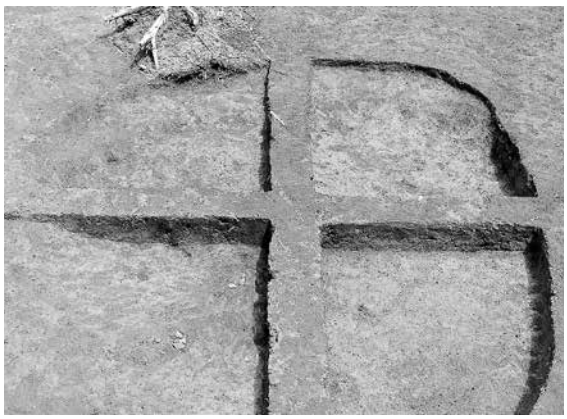


２　SI-6　完掘状況（南から）

１　SI-7　完掘状況　（南から）

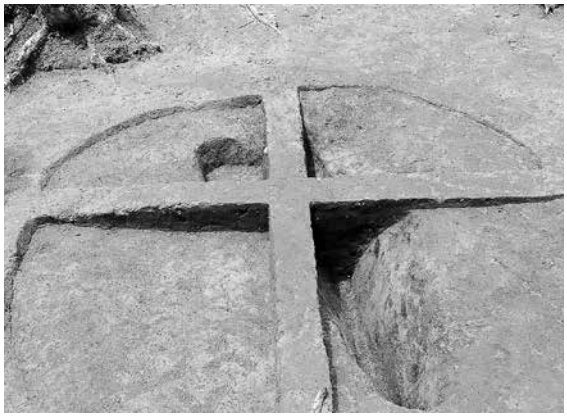


２　SI-8　完掘状況（南から）

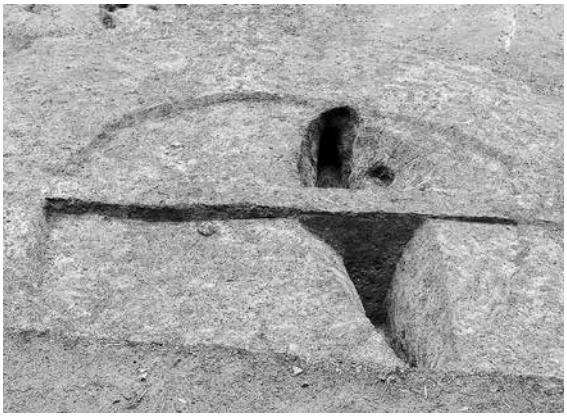


1　SI-1　埋土断面（南から）

2　SI-2　地床炉断面（西から）

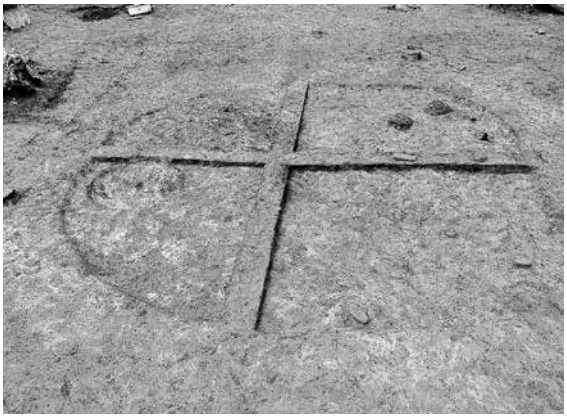


3　SI-3　埋土断面（南から）

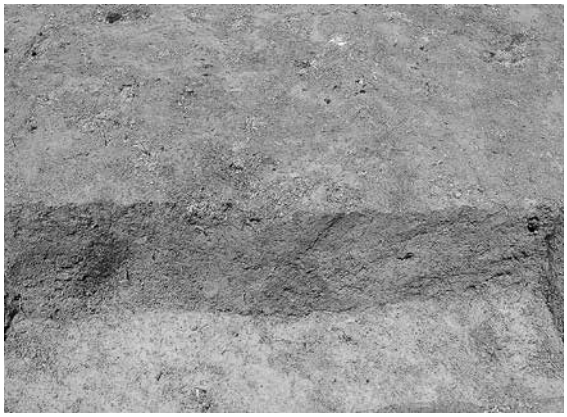


4　SI-4　埋土断面（南から）

5　SI-5　埋土断面（南から）



6　SI-6　埋土断面（南から）



7　SI-6　地床炉No1　断面（南西から）

8　SI-6　地床炉No2　（南から）

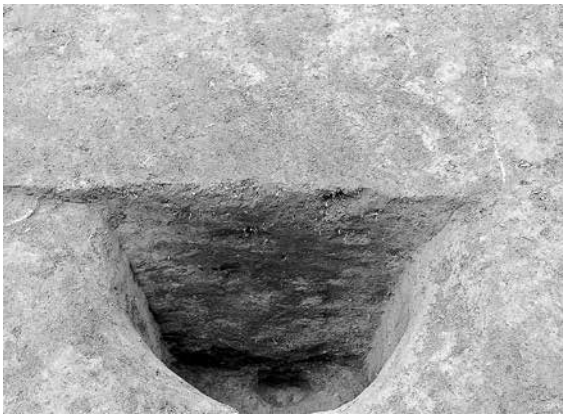
１　SI-7　埋土断面（南から）

２　SI-8　埋土断面（西から）

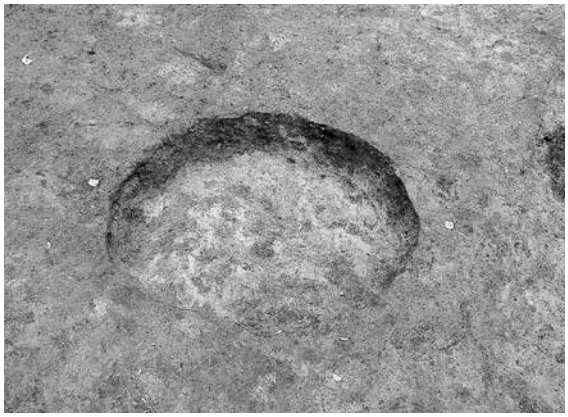
３　SK-1　完掘状況（南から）

４　SK-1　埋土断面（南から）

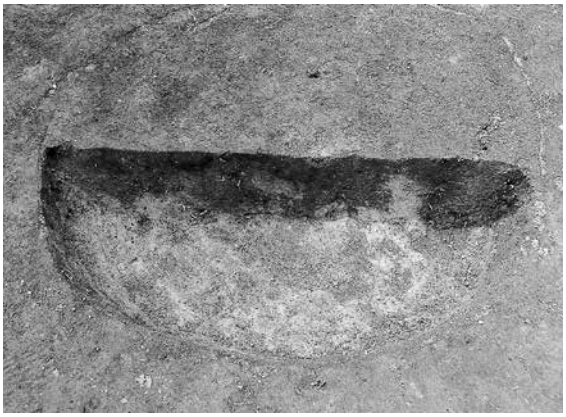
５　SK-2　完掘状況（南から）



６　SK-2　埋土断面（南から）

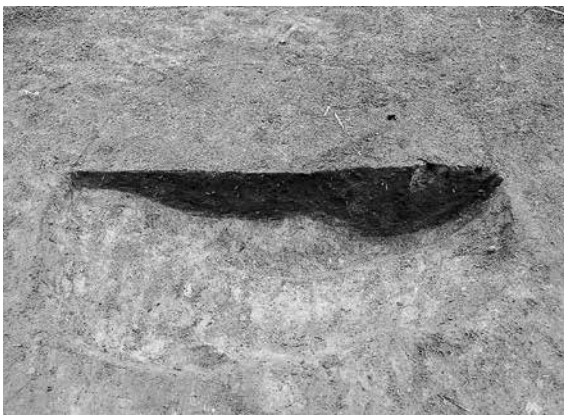


７　SK-4　完掘状況（北から）



８　SK-4　埋土断面　（南から）

1　SK-5　完堀状況（南から）



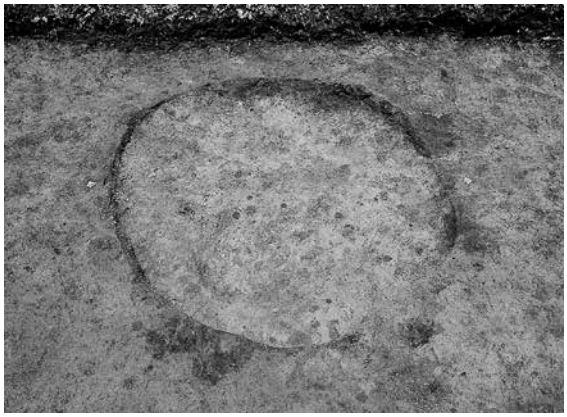
2　SK-5　埋土断面（南から）

3　SK-6　完堀状況（南から）

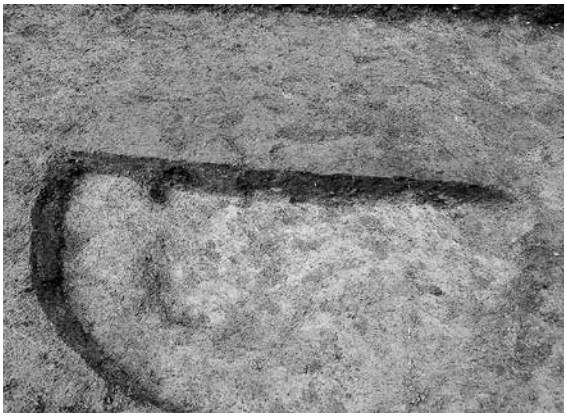
4　SK-6　埋土断面（南から）

5　SK-7　完堀状況（南から）

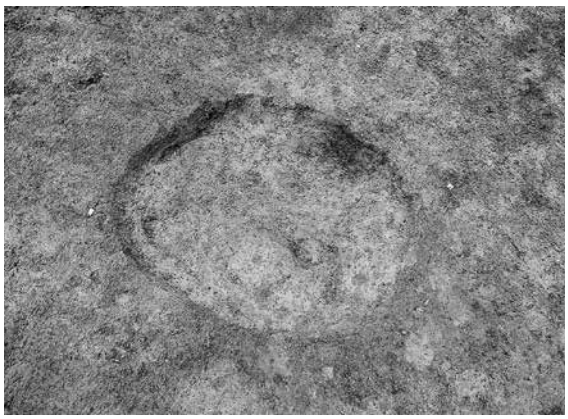
6　SK-7　埋土断面（南から）



7　SK-9　完堀状況（南から）



8　SK-9　埋土断面（南から）



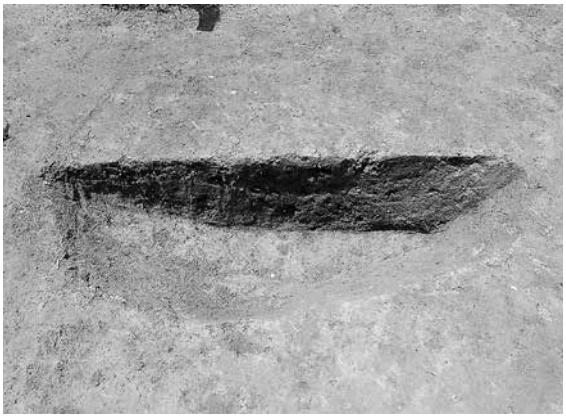
1　SK-10　完堀状況（北から）

2　SK-10　埋土断面（東から）

3　SK-11　完堀状況（北から）

4　SK-11　埋土断面（南から）

5　SK-13　完堀状況（南東から）

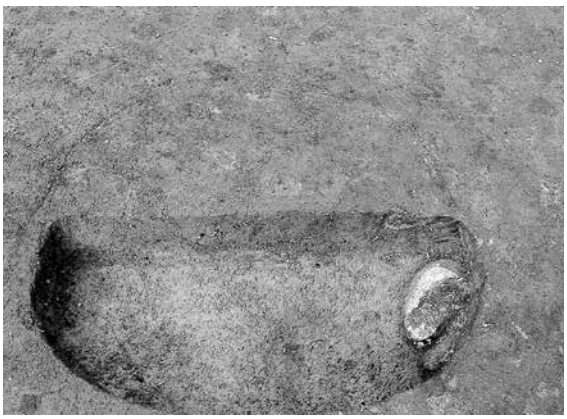


6　SK-13　埋土断面（東から）

7　SK-14　完堀状況（南東から）

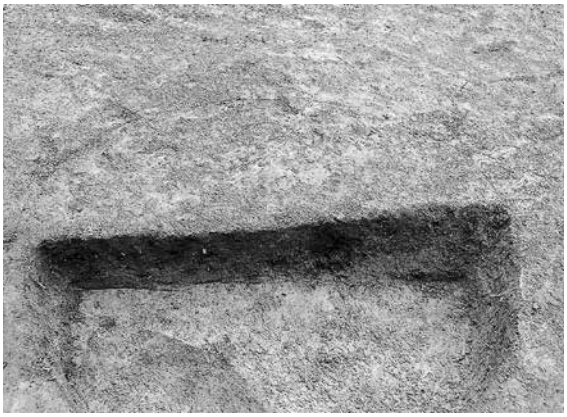
8　SK-14　埋土断面（南から）

1　SK-15　完堀状況（西から）



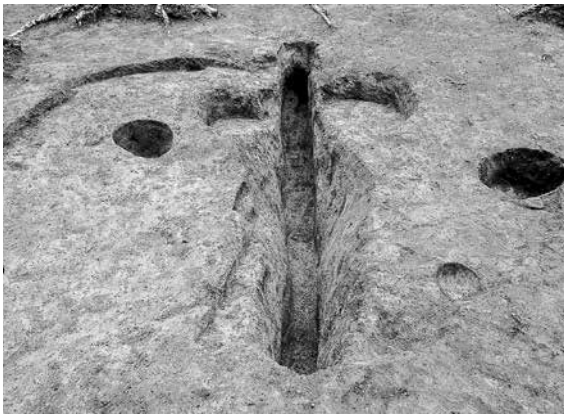
2　SK-15　埋土断面（西から）

3　SK-16　完堀状況（南から）

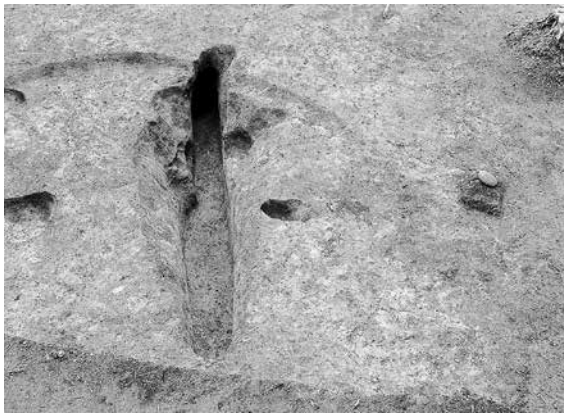


4　SK-16　埋土断面（東から）

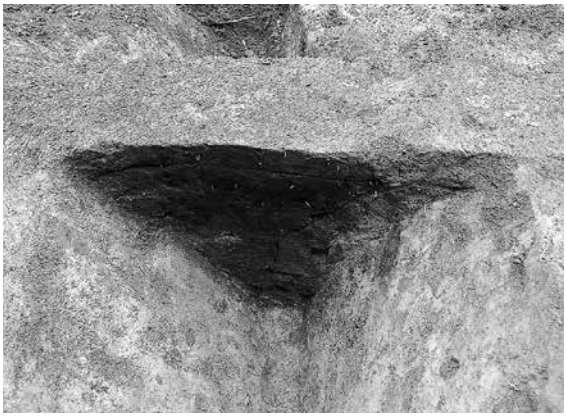
5　SK-17　埋土断面（南から）



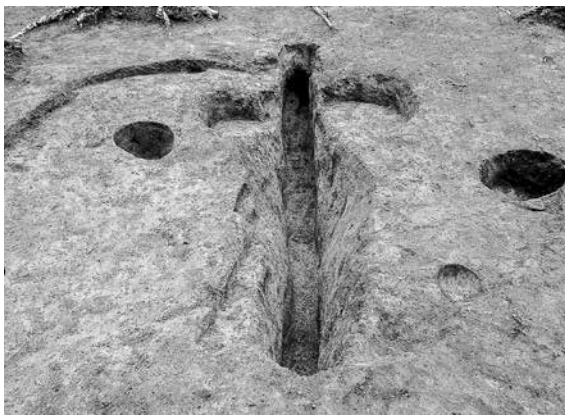
6　SK-18　完堀状況（南から）



7　SKT-1　完堀状況（南から）



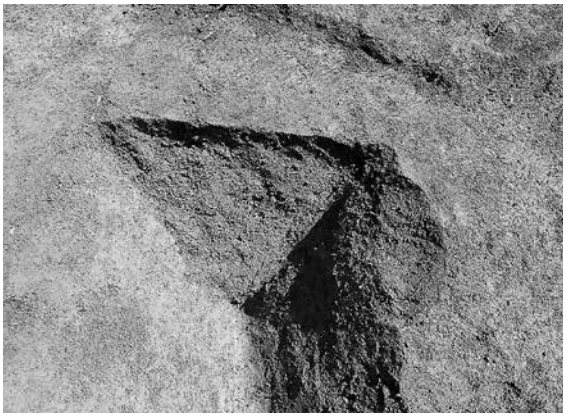
8　SKT-1　埋土断面（南から）



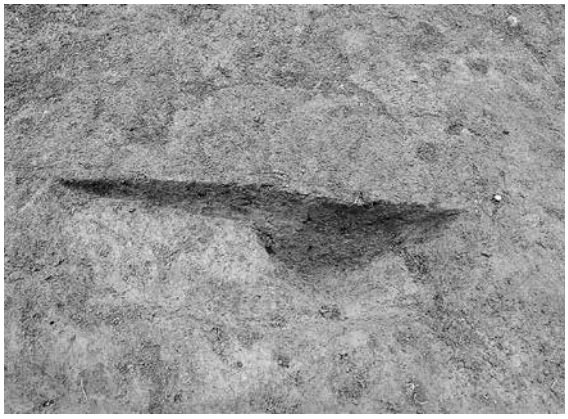
1　SKT-2　完堀状況（南から）

2　SKT-2　埋土断面（南から）

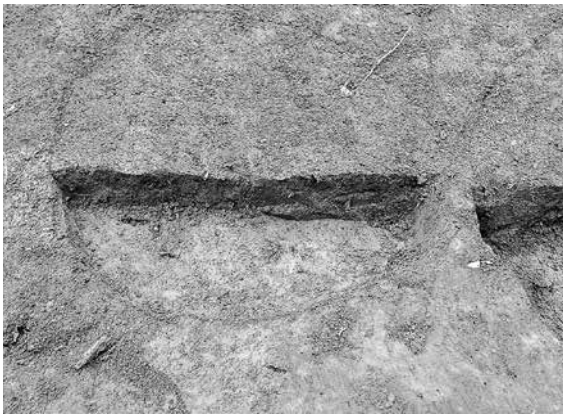
3　SKT-3　半掘状況（南から）



4　SKT-3　埋土断面（南から）

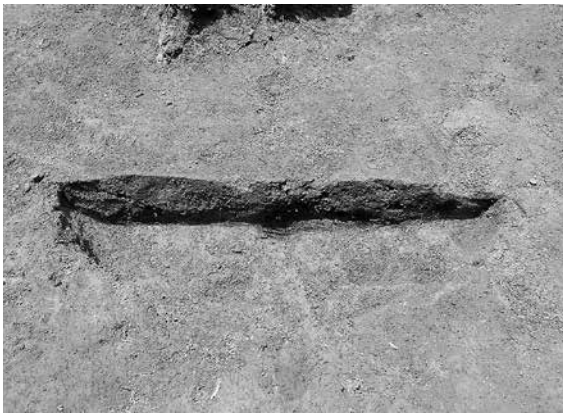


5　PP-1　埋土断面（南から）



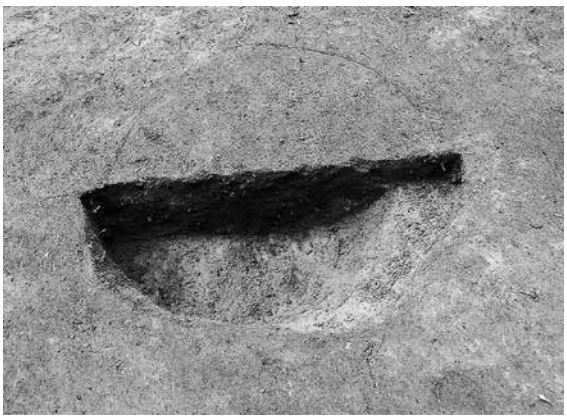
6　PP-2　埋土断面（南から）

7　PP-3　埋土断面（南西から）



8　PP-4　埋土断面（南東から）

1　PP-5　埋土断面（東から）

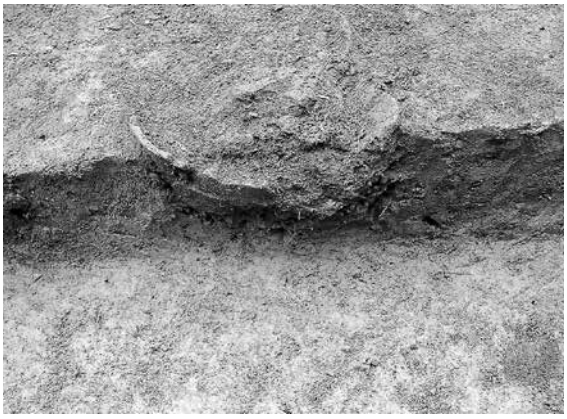


2　PP-6　埋土断面（東から）

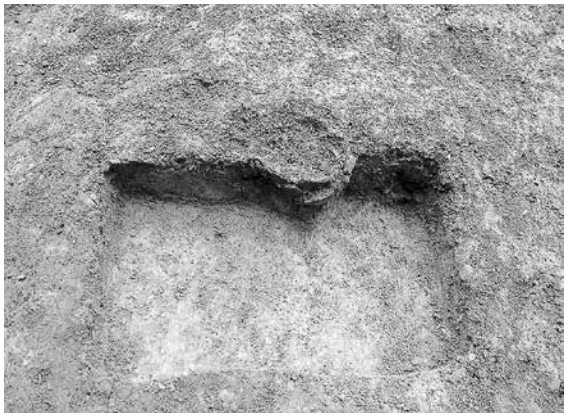
3　埋設土器1　埋土断面（西から）

4　埋設土器1　下部の石（西から）

5　埋設土器2　検出状況（南から）

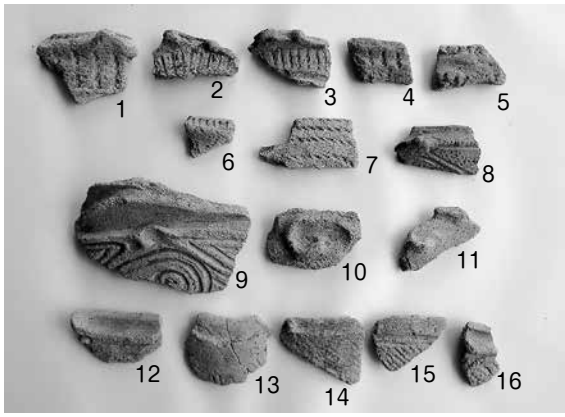


6　埋設土器2　埋土断面（南から）

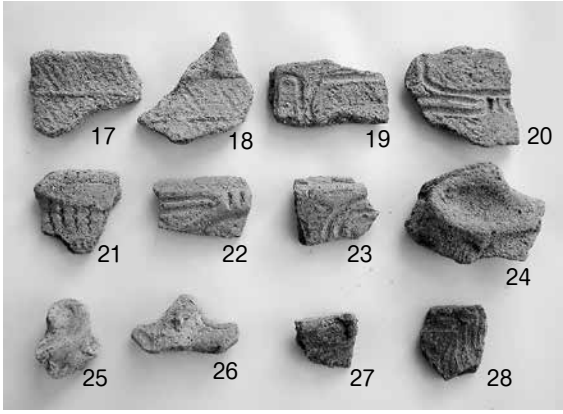


7　埋設土器3　断面（南から）

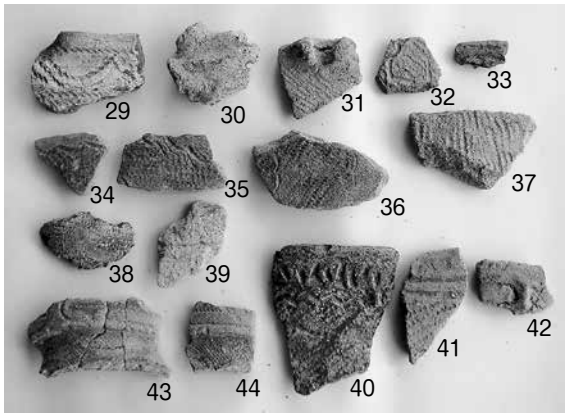
8　基本土層　断面（西から）



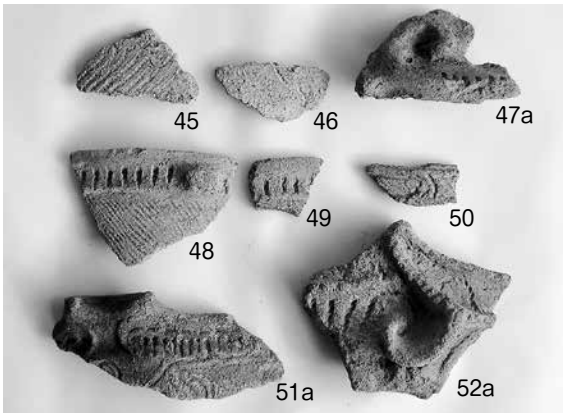
1　遺構内出土土器（1）



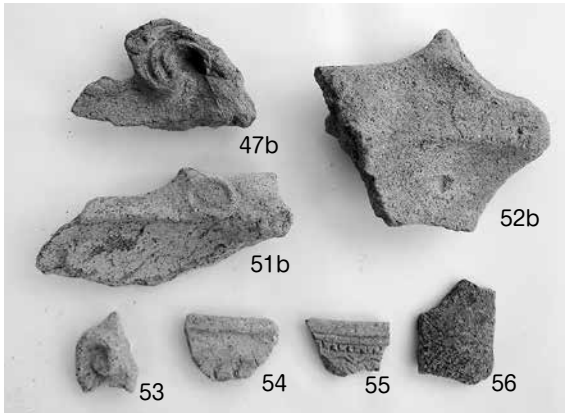
2　遺構内出土土器（2）



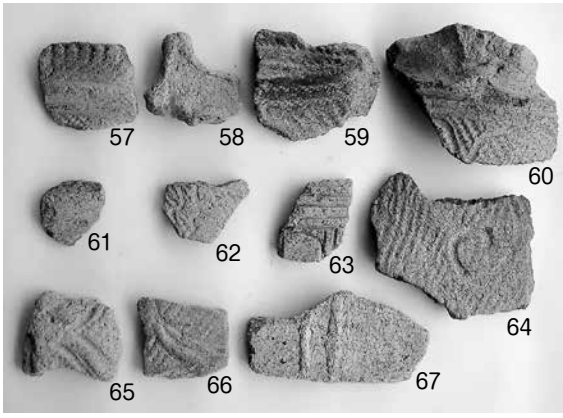
3　遺構内出土土器（3）



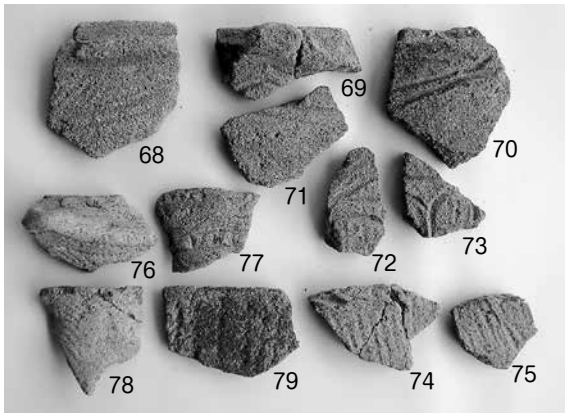
4　遺構内出土土器（4）



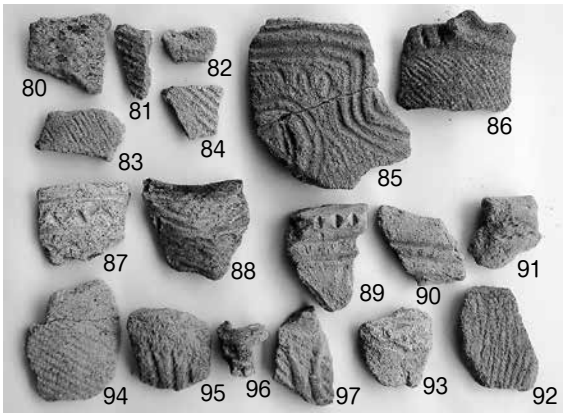
5　遺構内出土土器（5）



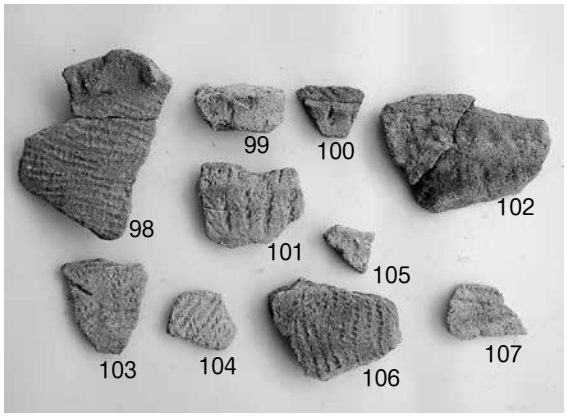
6　遺構内出土土器（6）



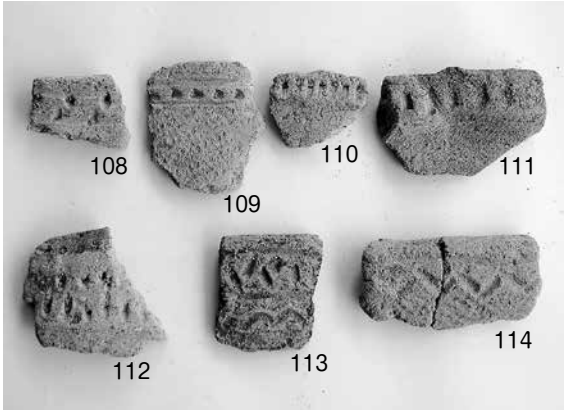
7　遺構内出土土器（7）



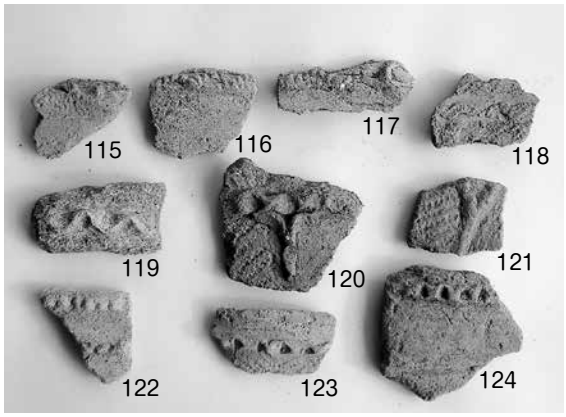
8　遺構内出土土器（8）



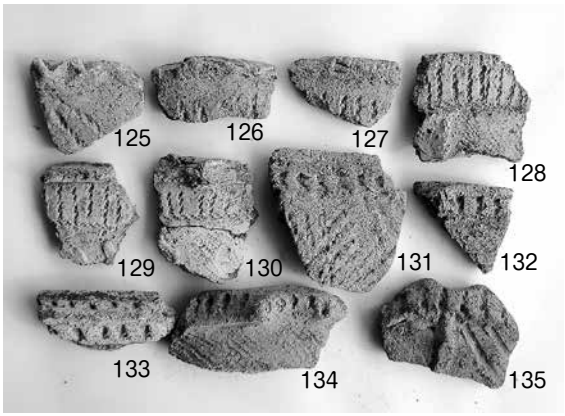
1　遺構内出土土器（9）



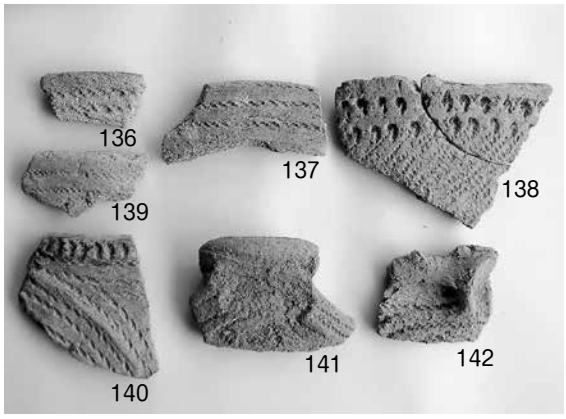
2　遺構外出土土器（1）



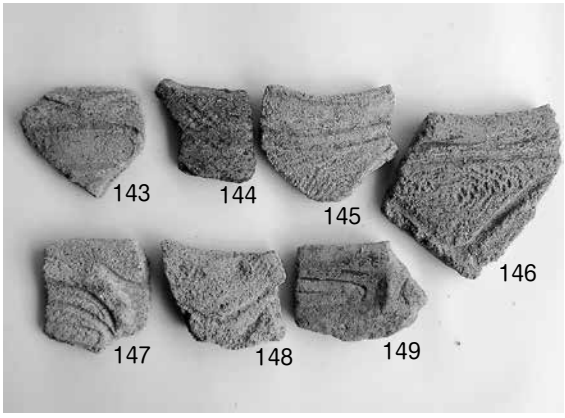
3　遺構外出土土器（2）



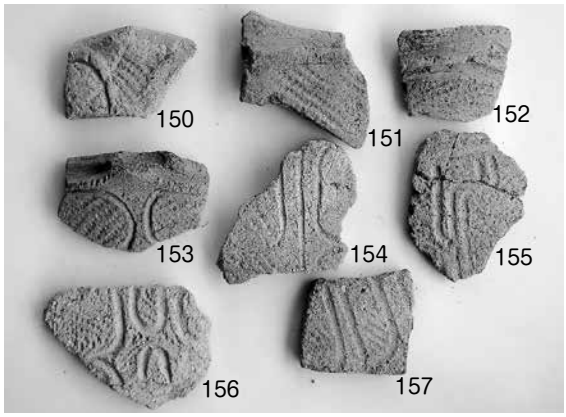
4　遺構外出土土器（3）



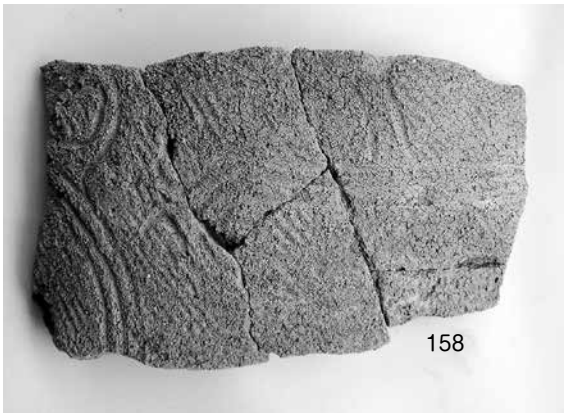
5　遺構外出土土器（4）



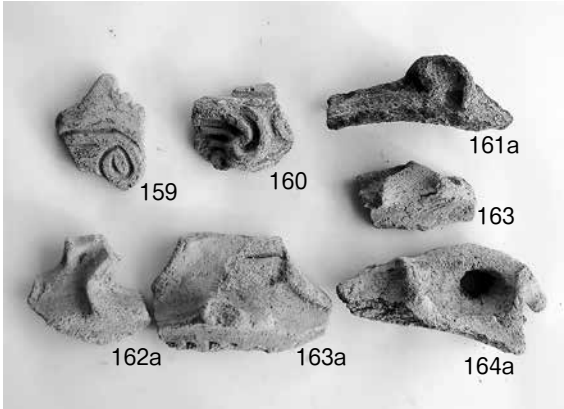
6　遺構外出土土器（5）



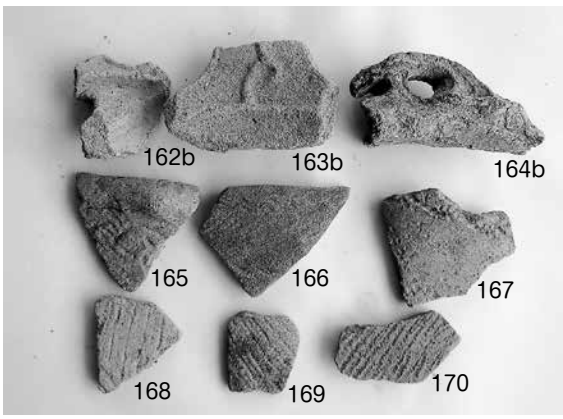
7　遺構外出土土器（6）



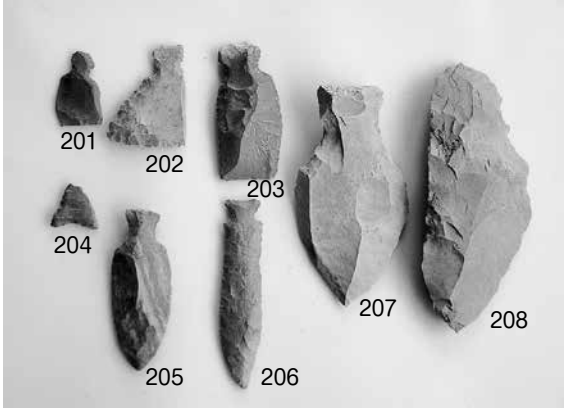
8　遺構外出土土器（7）



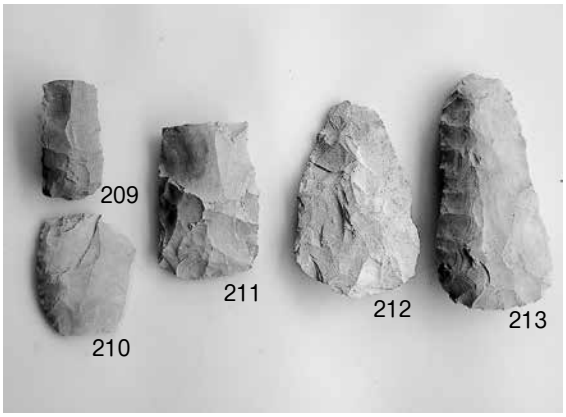
1　遺構外出土土器（8）



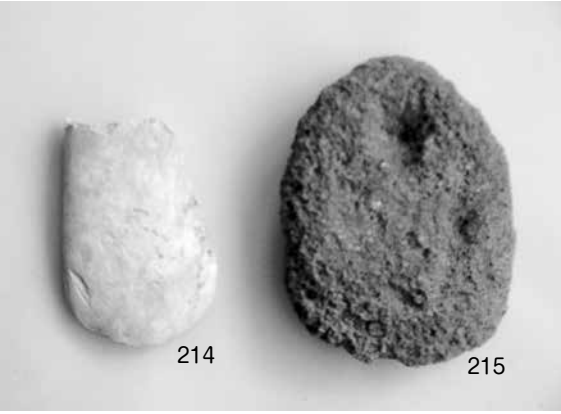
2　遺構外出土土器（9）



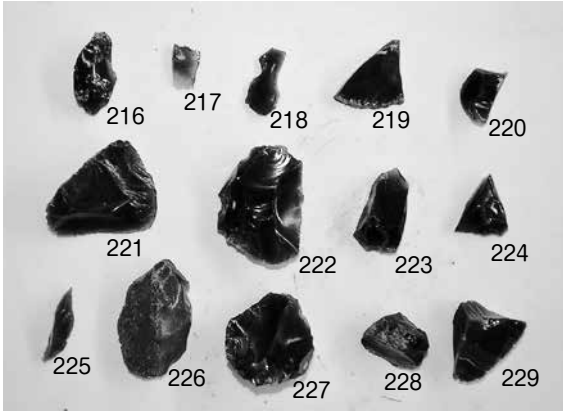
3　出土石器類（1）



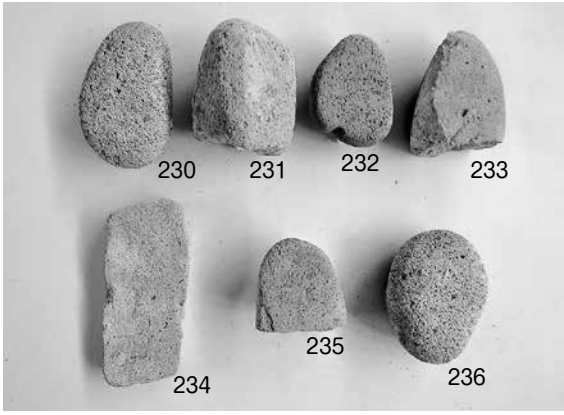
4　出土石器類（2）



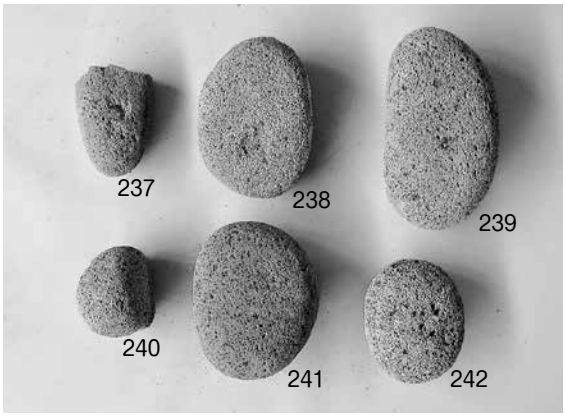
5　出土石器類（3）



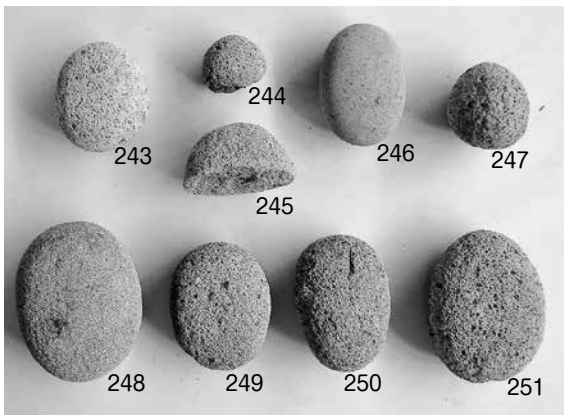
6　出土石器類（4）



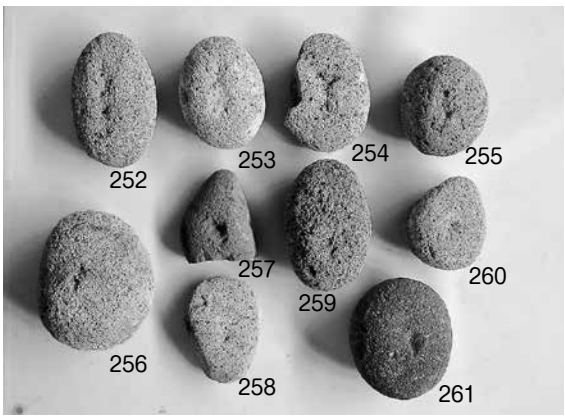
7　出土石器類（5）



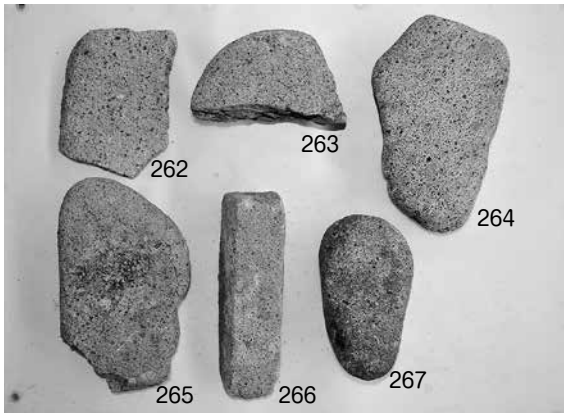
8　出土石器類（6）



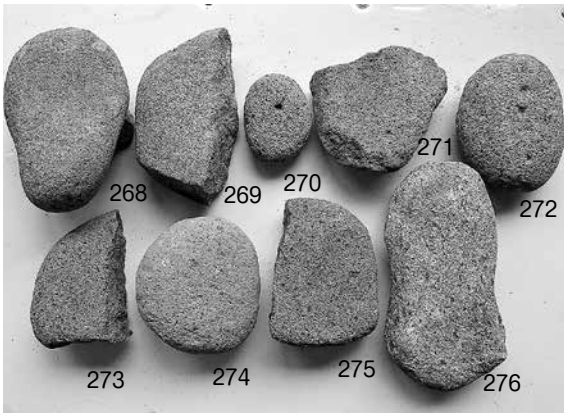
1　出土石器類（7）



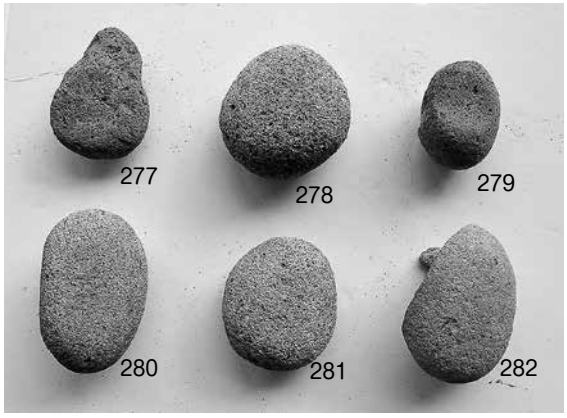
2　出土石器類（8）



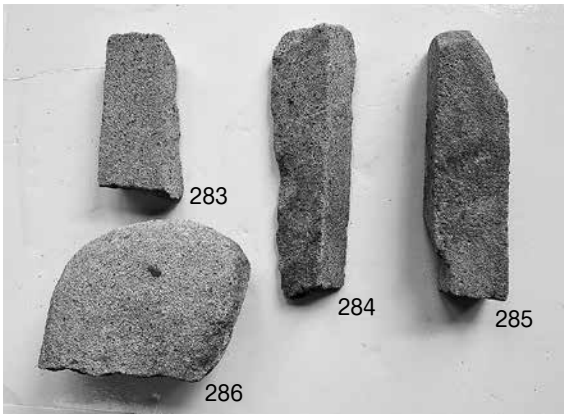
3　出土石器類（9）



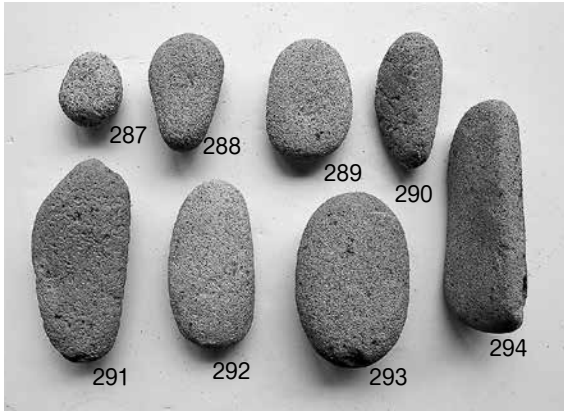
4　出土石器類（10）



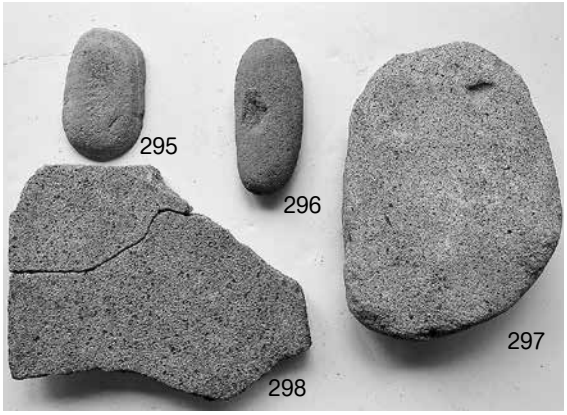
5　出土石器類（11）



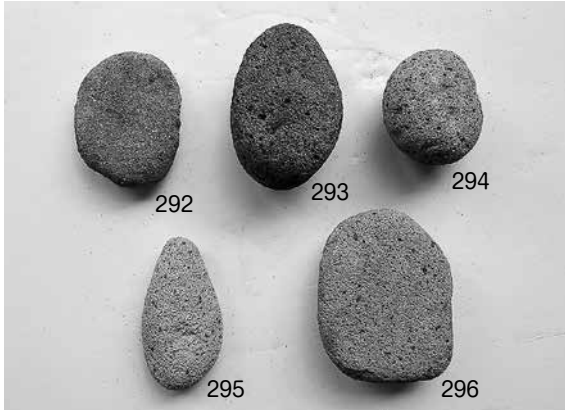
6　出土石器類（12）



7　出土石器類（13）

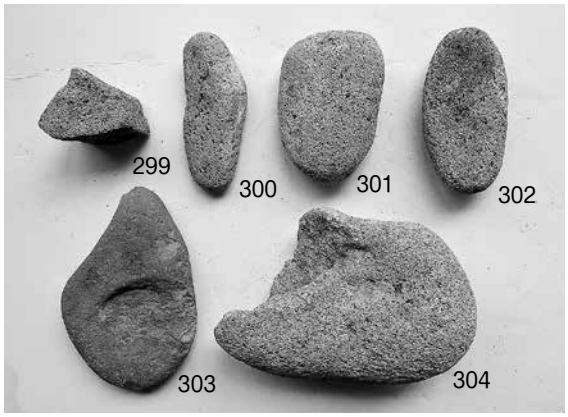


8　出土石器類（14）

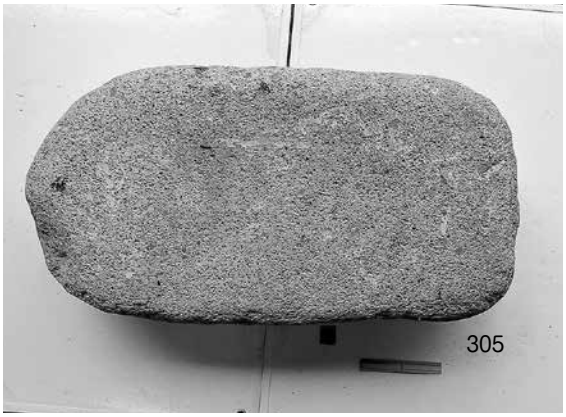


1　出土石器類（15）

2　出土石器類（16）



3　出土石器類（17）



4　出土石器類（18）

5　駒形根神社境内　調査区１北側（南から）

1　駒形根神社境内　調査区２（西から）

2　駒形根神社境内　調査区１南側（西から）

1　駒形根神社境内　調査区１南側（西から）

2　駒形根神社境内　出土遺物

抄　　録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書
副書名	平泉野遺跡・白山社及び駒形根神社
巻次	
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	菅原孝明・光井文行・阿部　充
編集機関	一関市教育委員会
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29　TEL0191-82-2242
発行年月日	2023年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平泉野（へいせんの）	一関市厳美町字若井原194-1（いちのせきしげんびちょうあざわかいはら）	03209	NE72-2197	38°58′43″	140°56′21″	20220411～20220721	620㎡	確認調査
骨寺村荘園（ほねでらむらしょうえん）	一関市厳美町字駒形8-1（いちのせきしげんびちょうあざこまがた）	03209	NE72-2283	38°58′35″	140°56′55″	20220704～20220721	100㎡	確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平泉野	散布地	縄文、近世	竪穴住居 竪穴遺構 土坑 落し穴 柱穴	縄文土器 石器 礫器 フレーク	
骨寺村荘園	荘園	縄文、古代 近世、近代		土師器 フレーク 鉄釘 銭貨	

要約	令和４年度は、平泉野遺跡と駒形根神社（骨寺村荘園遺跡）を調査した。その結果、上記の遺構・遺物を確認した。調査の目的である「骨寺（堂）跡」の痕跡の確認はできなかったが、８世紀代の土師器の出土により、骨寺村で稲作が始まったとされる10世紀以前にも人の生活があった可能性が高まったといえる。

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡・白山社及び駒形根神社

発　　行　　令和５年３月24日

発行・編集　　一関市教育委員会
〒029-3105
岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29
電話　（0191）82-2242

印　　刷　　川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話　（0191）46-4161㈹